SICK MUSIC FOR SICK PEOPLE VOL.16

EL ZINE

the [international] kvlt conspiracy

GENERACION SUICIDA

IV.IV.XC
4490RECORDS

BEER BELLY

HYSTERESE

LASHING SPEED DEMONS
EL ZINE的NWOBHM再検証

ZEX

DORNATA

KRAKK

行川和彦 vs 大越よしはる
実録！二〇〇〇〇文字対談



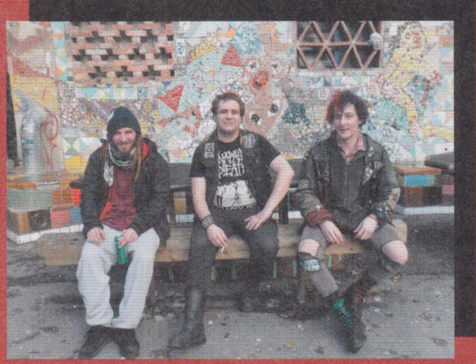
TOM AND BOOT BOYS USA TOUR REPORT

the [international] kvlt conspiracy EL ZINE SICK MUSIC FOR SICK PEOPLE VOL.16

CONTENTS VOL.16





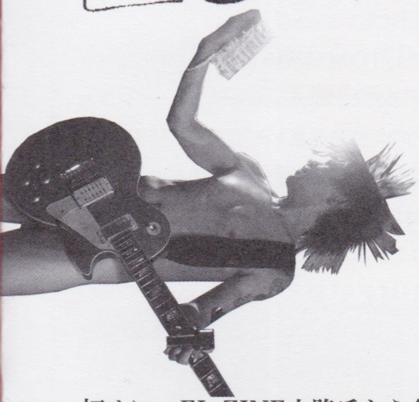








TOM AND BOOt BOYS USA TOUR REPORT



初めに：EL ZINE山路氏から今回の原稿依頼を受けて、ブログに記載しようと思ったことをこちらへ持ってきた。僕は週5日呑み歩いているんだけど、どーも、若い頃に比べまぢめになってしまう傾向が最近あるせいか、とってもまぢめな内容になってしまった(35歳までが無茶苦茶過ぎたってのもありますが・大汗)。まぁ暑苦しいこともまぢめなことも大嫌いなのでそんな感じで読んでもらって何かを感じてもらえれば嬉しいなと思います(ってもう暑苦しい・滝汗)。

TEXT:今村紀康

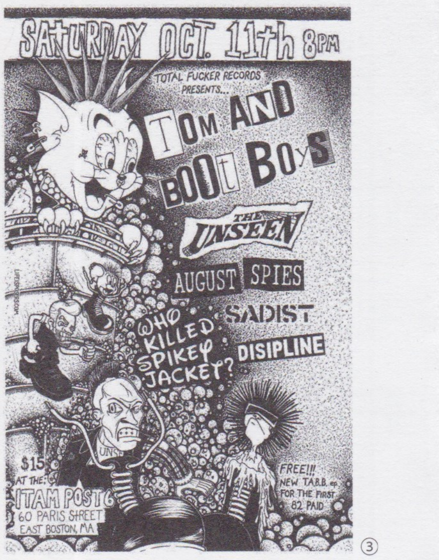




①



②



③

TOM AND BOOT BOYS USA TOUR 2014のキッカケ

35歳を過ぎた辺りから再びPOGO77 RECORDSの運営をきちんとやり出して、海外との繋がりも再び出来てきて、ここ数年、漠然とまたボストン、ニューヨークで演奏したいなと思っていた。そんな時、2014年春にニューヨークのPOGO PUNK BAND、SAD BOYSがHARDCORE SURVIVESの招聘の元、ロング・ジャパン・ツアーを行い、僕らTOM AND BOOT BOYSは初日に出演させて頂く。僕は自分からはあまり話かけない人なんだけど、打ち上げで偶然?意図的?に近くの席に居合わせたMIKE(SAD BOYS)と数分歓談。この時に僕がまたアメリカでやりたいな〜って言ったのか、MIKEから言われたのかは覚えていないけど、そんなことがあった。

彼らのジャパン・ツアーも終わり数週間経った時に、彼からメッセージが来た。

「TOM AND BOOT BOYSでアメリカで本当にやりたいの?」。すぐにメンバーに連絡し、4日で返信。「うん!僕ら全員スタンバイOKだよ!」と。さて、ここまでは強引に僕が推し進めたのはあるけど、実際に、2児の父である三好君(ベース)、毎日遅くまで仕事しているTAKA-44(ドラム)が速攻会社に休みの段取りも立てて僅か3日で、僕にOKを出した彼らの気持ちが僕は凄く嬉しかったし、それに絶対に応えていい思いをさせてやる!と心に誓ったのだ(かなり暑苦しいが)。

TOM AND BOOT BOYS USA TOUR 2014に向けての準備

希望した日程まで3ヶ月。時間は無いが手ぶらでお世話になるわけにはいかない。話題性のあるリリースをその日程にできる限りぶち当てることをまずは念頭におき、ニューヨークのオーガナイザーになるMIKE(SAD BOYS)、ボストンのTIM(TOTAL FUCKER)のところから「WHO WANTS PANTIES?」7"のリリースが決まる。条件として各会場82枚先着入場者へ無料配布。こんな面白い条件断る理由無し。そして、HUMAN DOUBLE FACE RECORDSのRICHARDにも協力してもらい「SUCK MY FUCKIN' DICK BASTARD」5"の変態フォーマットを通販と別で各会場で限定発売。

そしてそして、時期はちょいずれたけど、FEAR OF WARのADRIANからはアナログ化してない「OLD PUNK GENERATION」のリリース。ここまでやれば大分海外でツアーの宣伝にもいいかなと。

次は物販。TOM AND BOOT BOYSがアメリカに行った1996年とは状況もノウハウも違うので友人であるZYANOSEやPOIKKEUSへ相談。現地調達すべしとのアドバイス。よし、MIKEへ相談。即返事で全て動いてくれるとのこと(金銭の話は一切無し)。ボストン側でもTIMからLIFE IS POSER(WHO KILLED SPIKEY JACKET?のアルバム・ジャケットを描いてる)へ依頼があったようでこちらも別途動いてくれた。

現地調達だけでは面白味が無いと思ったので、POGO77のできる限りの在庫、下北沢KILLERSからの支援在庫も合わせて前もって郵送をした。あとは事務的なことだけで、飛行機の予約は三好君(ベース)に任せて、ESTAは各自で取得すると。おっとTAKA-44(ドラム)は、デザインをやってくれててツアーTシャツとして製作する流れに。正直3ヶ月でここまで準備できたか!という感じだが、TOM AND BOOT BOYSを信頼してくれた現地の方々に敬服することは言うまでもない。普通はここまでやってくれないと思うんだがどうなんだろう。

TOM AND BOOT BOYS USA TOUR 2014のブッキングやリリース情報等もぞくぞくアップされてきて

3泊5日という超強行スケジュールの中、興味深いショーの内容があがってきた。1日目ニューヨークはWELCOME PARTYと題したパーティー。TOM AND BOOT BOYSは演奏なし(内容はフライヤー①参照)。2日目は



今回の主催者MIKEが在籍するSAD BOYS含めたちょい幅広いメンツで僕が気になってたバンドが網羅されている(内容はフライヤー②参照)。そして3日目、僕のアイデンティティ確立の場所ボストンでは、新旧バンド入れてくれたニクイ面子(内容はフライヤー③参照)。ボストン責任者のTIMの心意気に感動(実際メールが来て内容に感動したが)。物販デザインもアップされはじめてきたから、無茶苦茶ちゃんと沢山の人が僕たちの為に動いてくれてるじゃんっと改めて責任を感じた。

TOM AND BOOT BOYS USA TOUR 2014　日本→アメリカ

うちのメンバー2人、三好君、TAKA-44共に仕事にしょっちゅう遅刻して行く寝坊常習犯なので、前日に僕の家に来て準備、そのまま空港へ行くことにした。たったの72時間のアメリカ滞在なので、できるだけ軽装で来いよ、とも。その通りすっからかんのトランク。「何で持ってきたの？」と聞くと、「ノリさん、向こうで仕入れるでしょ？」。分かってらっしゃる(笑)。さすが、三好君とは18年の友人歴、TAKA-44は10年の親分子分関係(笑)。さて本題へ。羽田空港へ朝6時入り。電車は無理。タクシー高い。家族に頼むのもチビがいるから無理。あ〜こんな時はご近所の超呑み友達ひろし君(DEATH HORN/ex.IMPULSIVE)がいるじゃないか。ってことで彼が午前4時、僕の家へ到着(笑)。羽田空港まで無事送ってもらいました(車中、僕たちずーっと寝てました・笑)。無事、飛行機へ乗り、良し!出発!まずは北京へ(号泣)。そう、北京経由ニューヨーク往復便を買ったんです。理由はもう分かると思うから書きません(滝涙)。合計20時間弱、ゴミクズのようになってました、僕たち。

TOM AND BOOT BOYS USA TOUR 2014　初日　MIKEと再会

入国は拍子抜けするほどすんなり(準備万端だったんだけどね)。僕らはあんまり知らないMIKEいるかな?とちょっと不安(だって本当にその時は通算会話時間5分、FACEBOOKで会話してただけだから・笑)。そしたらMIKEから声をかけてきた。安堵(笑)。そそくさとありきたりな「飛行機の時間長かったでしょ?」みたいなつまんない会話(笑)をしながら彼の車へ向かう。

で、で、でかいよ!おとうさん!やっぱアメリカだよな!機材たんまり搭載できて、別途10人乗れるもんね。でもとっても汚い。聞いたら歴代のパンクスから渡り続けられているビッグバンだそうで、前任者は家族ができて、ツアーが頻繁にできないから譲ったそうだ(よくあるよね)。道中、「ノリさん、どう久しぶりのアメリカ?」「いや〜特にないね〜」なんてたいした話しかしなくてすいません(笑)、あ、ツアー中ずーっと、MIKEは僕を「ノリさん」と呼んでた。三好君、TAKA-44は、必死に僕らの会話を聞こうとしている。うむ。いいことだ!(と上から目線で見てました・笑)本当にうちのメンバーはいい奴らなんだ。と横道にそれました。そうこうして30分ほどでMIKEの家へ到着。引っ越して1週間だそうでとっても綺麗で広くて屋根も高くて、流石、ここはアメリカ!(たまたまと思うけど。実際に僕が昔住んでいたときは日本の家と変わんなかったし)まずは、髪の毛を洗いたい!とある理由…(笑)。

そんなこんなしているうちに続々とパンクスが集まってきて(あの〜僕ら、アメリカついてまだ1時間程なんですけど)、三好君、TAKA-44、あたふた(笑)。僕も普段はあまり喋らないから、うむ、ビールの力がいるなと思ったら、MIKEが買ってきてくれた、神君臨の瞬間。いや、本当に沢山いて20人位?名前がまだ覚えられないし分かんないし、一応TOMのリーダーだからいろんな人と会話しなくちゃなんだけど(大汗)、そんな時、我らが大ボスMIKEが僕らに細かな気配りを。あんた、天才だよ。WHO KILLED SPIKEY JACKET?のメンバーもいましたよ。今夜ライヴだし。TAKA-44が猛烈に好きなので(僕も三好君もだけど)ニヤニヤしたのが印象的でした。でも思った以上に、お酒呑まないTAKA-44が会話しようと(会話になってる)してたのが印象的だったし、三好君はいつも通り、お酒呑みながら、誰とでもニコニコしていたのが嬉しかったです。うん。僕は嬉しかった(笑)!つか…三好君、海外出張多いのに、何故英語そこまで出来ないんだ?(天然だから動物的感覚で感じてるのかな)

TOM AND BOOT BOYS USA TOUR 2014　初日　WELCOME PARTY

(えーと、ここから僕、泥酔へ突入しますのでもろもろデタラメ入るかもしれませんがご了承ください)僕たちは、今夜は演奏がない!WHO KILLED SPIKEY JACKET?とROTTEN UKを見て楽しむだけだ。きっと小さな会場でホンワカやるんだろうと思ったら、普通に300人位入るし(汗)。到着したらすぐにアメリカでは当たり前のドラム、アンプ等々を搬入、組み立てる。三好君、TAKA-44には言っていたけど、実際に見て驚いてたと思うし、日本はやりやすいと思ったことだろう。後ほど、TAKA-44が「これ毎回ですか?めんどくさいっすよね(苦笑)?」と言ってたし。うん。めんどくさい。

みんなでPIZZA屋に行って、PIZZAの大きさ、値段に、2人はビビる(僕は住んでたからビビらない。威張ってないよ)。TAKA-44がぼそっと「これ毎日喰ってたら、そりゃデブになりますよね」「ちょちょちょ(笑)」という会話の横で、三好君はニコニコMIKEだかWHO KILLED SPIKEY JACKET?のメンバーだかと会話中。

さてと…(笑)、クラブに戻ってみると、うわ!人沢山。感激(僕ら出ないけど・笑)。ショットのグラスを奢りまくってもらって(一気呑みだよね、もちろん)、三好君はもちろん、お得意の笑顔で奢ってもらいまくり、TAKA-44はどこにいたのか覚えてない(笑)。

日本のパンクスもカッコイイけど、ニューヨークのパンクスもカッコいいね。東京に近い感じで、黒主体で洗練されたパンクスが多い。派手なのも来てたけど。そんなことしてたら…THE CASUALTIESのJAKE、MEGGERSが!僕は感動!(そんな感動してないけど)超有名になっても、僕らなんかのに来てくれるんだ〜みたいな。話しても、売れてない頃と全然変わってないし(変わったら糞だけどな)。JAKEはいやらしい酔っぱらいだし、MEGGERSはいいお兄ちゃん的酔っぱらいだし(どっちみち酔ってるけど)。

ここいら辺から僕は激酔っぱらいになるので、三好君とTAKA-44の話を元に書きます。パーティーのバック・ミュージックを担当するDJは…JAKE!あの〜僕DJ嫌いなんですけど(笑)。そんなこたーどーでも良くて楽しそうにやってたな〜。ライヴの話を書かなくちゃ。1バンド目は、ぜひ見たかったROTTEN UK。名前とロゴを見ると、CHAOS UKみたいなノイズ・コアかな?って思っていたんだけど、違う。UK82が基本のハードコアではあるんだけど、それにポスト・パンクとかゴスが少しだけ混じってた感じ。お客さんも盛り上がってて(200人は来てた?)、僕はポスト・パンクとかゴスとか嫌いなんだけど、彼ら、良い。ルックスがパンクスだから(笑)?終わってから話したけど気さくなお兄さんでした。もっと話したかった(泥酔してまして)。

次は、もう日本から僕、レーベル含め、大推薦していたWHO KILLED SPIKEY JACKET?。物凄い良すぎる!ポップだが荒々しい。荒々しいが重たくない。あえて言うと超初期THE CASUALTIESにTOM AND BOOT BOYSを入れて、突進型滑稽型と緩急混ぜてくる感じか?(というのはコアな人なら分かると

思うが、彼らのLPに出てくる会話部分、TOMの"PISS OFF MTV PUNKS"の会話「へぃ、ソフィ〜…」を真似て同じ感じの内容にしているのには気がついた?)かつ、彼らが超POGO 77 RECORDSの大ファンなんだ。嬉しい(普通に嬉しい)。

さて、ライヴに戻ろう。お客さんひっちゃかめっちゃか、僕も渦の中へ(ぼんやり覚えてる)、最高!!「PUNKS!DRESS!PUNK!」まったくその通りだぜ!黒髪だ?普段はパンクの格好でないのか?それでパンクだ?(そんな時代でないのは分かってますが若者はくじけず派手で行くんだ!笑)

そうこうしてるうちに、ヴォーカルのCHRISからマイクを向けられ、コーラスしまくる!それだけでなく(まったく記憶にないが後日MIKEに映像を見せてもらう)、「ノリ・コール」が起こり、不肖今村ステージにあがり、いつもの全裸へ(号泣大会)。まったくイカれたライヴ?パーティーだったぜ。その後も数百人で呑み続けてるが、僕は尿をもよおす。トイレは長蛇の列。困った。我慢できない。立ちションしに外へ出るが、パンクスから「ノリ!外でするとと逮捕だぜ!」と言われ、どっかお店がないか探しまくる。探してもトイレを貸してくれない。そんな…。かくなる上は最後の手段。もう我慢できないのでズボン履いたままブーツ履いたまま、おしっこした(茫然)。もちろん泥酔しててぼんやり覚えてるんだけど、朝起きたら、ズボンがびっちゃびちゃで、なんだこれは!!!と我が下半身を疑う。話はパーティーに戻り、MIKEとTAKA-44の他に誰か?にバンへ担ぎ込まれて無事MIKEの家へ帰った。と…TAKA-44が次の日報告してくれた。

TOM AND BOOT BOYS USA TOUR 2014 2日目 観光(?) IN NY

朝起きて、速攻、パンツを捨てて、ズボンをチェンジ。仕方ない、アメリカはもうノーパン(先ほど書いたが、ズボン履いたまんまおしっこしたから)。時刻は昼前。MIKEのリビング・ルームで寝ていたようだが、起きたら、知らないパンクスがぽつぽつと。お前誰だよ!(って僕が誰だよ!か・笑)ASPECT OF WARやPRIMITIVE PACTの連中だった。ちょっと嬉しい。だって音源気に入ってるから。

MIKEとPRIMITIVE PACTの弟の方(兄弟でやってんだって)が、「朝飯(昼だけどもう)行くかい?」ってんで、「もちろん、僕たち72時間しかいません。思い出欲しいです」。TAKA-44も行きたいと。三好君はビール呑んでるからいらないと(笑)。4人で仲良く、10分ほどと言ってた珈琲店へ向かう。

歩けど歩けどつかない。20分歩いて到着。やっぱ近いの感覚が違うのね。チーズバーガーを食す。普通。珈琲、まずい。間違えて豆乳入れてもらっちゃった(涙)。小雨の中、MIKEの家へ。三好君、旨そうなサンドウィッチ喰ってるし(怒)!「サンフランシスコから来たこのカップルがくれたんだよ〜」と満面の笑みで彼らを紹介してくれる。彼氏の方はジェッセ君っていったかな?彼らは最後の空港までずーっと一緒にいることになる。

さて、三好君に僕とTAKA-44が苦笑いしつつリビングにいると、またまたパンクスがぞくぞくと…また20人規模か(苦笑)。人が多いと気を使うからめんどくさいんだよ、まぁたまのアメリカだからいいけど。また来ましたWHO KILLED SPIKEY JACKET?軍団。一緒にボストンから来た連中も。ボストンってだけで贔屓目になっちゃう。そして我がリーダーMIKEが「みんな!10分後昼飯に街へ行こうぜ!」的なことを言い、みんな、だらだら用意する。40分後出発(苦笑)。

全員が行ったわけでなく僕たちTOM AND BOOT BOYSとMIKEとWHO KILLED SPIKEY JACKET?軍団。20人位か?ひとまず最寄りの駅へ向かい、切符(トークン)買おうかな〜って思ってたら、さすが、我ら営業部長MIKE、さっと、僕ら3人用のパスを買ってくれた。あんた出世するよ、どこでも。

がたがた揺られ、ブルックリン(記憶だと)で降りて、あれ?ここ知ってる。昔来た。そう、今や手の届かぬ存在になってしまった(届くけど・笑)THE CASUALTIESのJORGEが働いていた店じゃないか。どうやら、MIKEがオーナーさんと仲がいいようでご紹介してくれた。ちなみに、その近くに所謂僕たちみたいなパンクスが行かないパンク・ショップがあると、MIKEが指さして教えてくれて、「そこにTOM AND BOOT BOYSのフライヤーとかポスターが貼ってあるんだよ。でも全然行かないけどな(笑)」だって。

さて、お店でパンクの物を買う予定も気持ちもない。んだが、ウロウロしてたら、子供用のライダース・ジャケットが。買ってました(笑)。地下に行ってみると、三好君が子供用のDr. Martensを買ってました(笑)。僕は服のこと全く詳しくないけど、日本と値段は変わらないね。ちょっと高いかも、円安考慮すると(新品)。

そうそう、地下に行ったら知った顔の坊主のお兄さんが。そう、SAD BOYSのギター(日本語話せる)がいた。「何やってんの?」「働いてます」「ちょ(笑)」。なるほどね、英語が全くできない三好君がちゃんとお買いものできた訳だね。そして、ご飯をやっと食べにホットドッグ



屋へ向かう。いいじゃん、僕こういうジャンクな雰囲気好きだよ。みんなで仲良く店を占拠(笑)。いいね!やっとみんな同じ席で落ち着いて話せるじゃん!(お酒もあるし)

僕の横には日本に下北沢KILLERSのライヴを見に来たMARK(WKSJ?ギターたまにドラム)、斜め前にはCHRIS(WKSJ?ヴォーカル)、ELIE(WKSJ?ベース)。あとは女の子がちょろちょろ。三好君、TAKA-44も近く。あ、余談だが、WKSJ?はベースのELIEがリーダーなんだって、後で詳しく書くけどPOGO77の超大ファン。さて、和やかな昼食も早々に、大統領MIKEの合図が入る。「みんな、行くぞ!セントラルパークを抜けてライヴへ行く準備だ!」。お店の前でダラダラ30分経過(笑)。

セントラルパークでは、みんなで写真撮ろうぜ的なことになり、見知らぬ女性に、ELIEが写真を撮ってと頼む(超ポップ)。彼女もこんなパンク軍団におじけずさらにポップな対応。さすがアメリカ…(全員がそうではないが・笑)。写真を見てもらえれば分かるけど、楽しそうでしょ?奥の一番上にいるMIKEが大変そうでしょ(笑)?電車の中では、ずーっとELIEが話したり、くるくる回ったりしている(決して不快でない。皆を楽しませることが好きなんだろう)。「こいつ、とってもいい奴かもしれない!なんかもっと知りたい」と思いはじめた。もちろん、POGO77 RECORDS、TOM AND BOOT BOYSが大好きで、FACEBOOKのヘッダ写真をずっとPOGO77周辺のレコードで飾ってくれてるし気になってはいたんだ。

TOM AND BOOT BOYS USA TOUR 2014 2日目 SHOW AT THE ACHERON IN NY

サーカス団団長MIKEのもと、金魚の糞のごとくバンで今夜演奏するTHE ACHERONへ連れて行ってもらう。会場は詰め込んで300人程だろうか?そしてアメリカにはよくあるパターンで併設されたバーがあり、こっちは一回り大きいかな?いずれにしてもいい雰囲気。MIKE曰く400位来るかな?って言ってたけど、「MIKE社長!入りませんよ!」。

さて、今夜は僕らが出演するから、楽器、ア

ンプ、ドラム・セット、物販等々、搬入作業開始。三好君もTAKA-44もいつものようにテキパキやってくれる。僕は基本見てるだけ(笑)。さて、そんなことをしている内からもうお客さんは入口に並んでいる。何故かというと、先着入場82名に新作TOM AND BOOT BOYSの7"が無料配布されるからだと思う。それを見て僕は嬉しかったけど、こんなクズ・バンドにごめんって本当に思った。できるなら全員にあげたいんだけど。

物販の準備もしなくちゃ!MIKEがばっちり現地で作ってくれてた、あんた凄いよ。Tシャツ3種類(色複数)、タオル、シルクスクリーン・ポスター、これだけあれば僕らが送った細かな商品(TOMのデッドストック品やKILLERSさんからのカンパ的なTOM商品とか)と並べればすごく様になると思って嬉しくなった。物販はTAKA-44が責任者なので、彼に並びを頼みつつ、さすがに彼は初アメリカなので、とりあえず横にぼんやり立って呑んでた(笑)。隣ではひっそりとPRIMITIVE PACTが。スペース沢山もらってごめん。

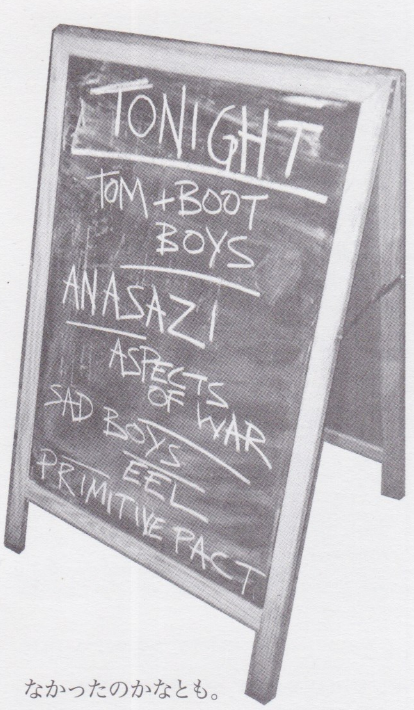
物販準備も終わったから、あとは呑んで、テンション上げて、最高で最低のパフォーマンスをやるだけになった。ってことでバーの方へ行き、三好君とビール、TAKA-44は呑まないからコーラ、あと生ポテトを揚げたバスケットを注文。タバコは店内で吸えないから外のテーブルをチョイス。まだパンクスが溢れかえる前に日本人でひっそりと(笑)。

三好君とTAKA-44がボードを指さして「ノリさん、TOMの名前が間違ってる」「え?あ〜TOM+BOOT BOYSね。+はANDって意味があるんだよ」みたいな会話もあったな。まったり話すこと1時間程、リハで呼ばれた。2人にはリハは無いか、あっても1曲だよって言ってあったので、その通り、1曲でお終い。TAKA-44が悩ましい目で僕を見てましたが、無視しました(笑)。郷に入れば郷に従えだからね(都合いい時に使う)。

外も暗くなりパンクスもウジャウジャ集まって来ました。のんびり呑んでいる暇はなく、急いで酔っぱらわないと…照れくさくて演奏できない。バーで注文しようとしたら、「ノリ〜(笑)」。昨夜に続きJAKE(THE CASUALTIESギター)がブルーのモヒカン立ててバー・カウンターに。MEGGERS(THE CASUALTIESドラム)も別の席に。「嬉しいな〜」って思ったけど決して口には出しません。沢山奢ってもらいました。知らないパンクスやお兄さんや、ほんとに、ビール沢山奢ってもらいまくってへろへろです。三好君も同様だったと言ってた。TAKA-44はコーラ死ぬほど奢ってもらって苦笑い状態(笑)。

開場前、沢山話かけられて「18年前のライヴも見たよ!」「イギリスから来たよ!」「カリフォルニアから来たよ!」「明日も行くよ!」「わざわざ来てくれてありがとう!」等々、僕たち、ウレション状態で下半身ビショビショ。

ちょいと話ズレルが、入場料$15で平均よりかなり高い設定ってのが気になってた。通常、ローカル・バンド/アンダーグラウンドは、アメリカでは$8以下。強気な金額をMIKEとTIMが設定したんで、僕はひやひやしてたよ。でもこれだけ沢山かなり早い時間からお客さんが来てるってことは彼らの設定が特に問題なかったのかなとも。



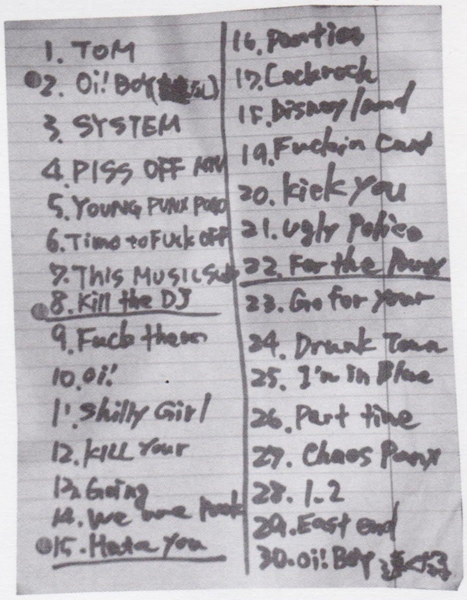


さて、開場が始まったようなので僕らは物販へ。それなりには売れると自負していたんだけど、それ以上のバカ売れ状態。昔、LOFTのTHE CASUALTIESで鬼売れた時を思い出した位、次から次へとみんな買ってくれる。嬉しい(お金が欲しい訳ではない)。ツアーTシャツを主に全種類買いしてくれる人も沢山、モヒカンや鋲ジャンでないパンクス、普通の人も「来てくれてありがとう！」「昔ボストン見に行ったぜ！」とか。そんな会話をしてる横で三好君、TAKA-44全力で物販中。値段設定なんだけど、スーパーマンMIKEに任せた。Tシャツは$10/$12/$15、シルクスクリーン・ポスター$5、ツアー・タオル$5。他のPOGO 77 RECORDS関係も同じ設定に合わせてみた。アメリカはこんなもんだよね。

ライヴも始まりだし1バンド目、PRIMITIVE PACT。今回チェックしたかった最重要バンドの1つ。UK82直系サウンドで渋線なんだけど渋過ぎない一歩手前。日本には今いないタイプだね。ライヴも派手なアクションはないけど、とってもUK82直系っぽい感じ。UK82好きはチェックしてみて。

2番目はEEL。こちらも音源はチェック済みで楽しみにしていたノイズ・コア。サウンド的にはSTAGNATIONみたく初期ノイズ・コアが進化した感じ。あ、物販がひっきりなしに忙しくてちゃんと見れてない部分もある(同じ空間だが)。

そして今回のツアー代表MIKEがベースをとるSAD BOYS!ヴォーカル、ドラムが女性という外見だけでびびび!と来る素晴らしいステージ。会場のパンクス、POGO STICKを握りしめたかのようにPOGO嵐!90年代のポゴ・パンク・バンドに影響を受けているけど若干ノイジーで独特さも持っていて活動があまりで



きなくなるのがとっても惜しい。ちなみにMIKEは新バンドPOXを組み、デモ製作の直前。

4番目はASPECTS OF WAR。これもチェック済みで期待してた。クラスト系なんだけど、ルックスも狂ってて、いいお兄ちゃんが揃っているいいバンド。轟音でかっこいい。来年SYSTEM FUCKERと日本ツアーをやるそう。

そしてトリ前のANASAZI。パンクというかニューウェイヴ/ポスト・パンクよりの80年代に日本であったアバンギャルドなバンドっぽかった。僕には難しかった。

そしてそして飛び入りなのか計画的なのかは分からないが、WHO KILLED SPIKEY JACKET?が演奏開始!ドラムがどってんどってん連打!かっこいい!と思ったら、会場中央で打ち上げ花火やりやがった(大汗)。会場内噴煙。客電上がって、クラブの店長が激怒して「もうライヴは終わりだ!何があっても終わりだ!」と。「ちょ(笑)。僕たちTOM AND BOOT BOYSは?」と茫然となる。お客さんもとりあえず外へ出る。

しばしして、「ごめんよ。君たちは何も悪くない。頭冷えたよ。せっかく日本から来たんだ、俺も君たちのステージを見たいからスタンバイしてくれ。さっきはごめんよ」と言いに来てくれた。ただWHO KILLED SPIKEY JACKET?には激怒継続中(笑)。

良かった、演奏できる(笑)。できなくても僕ら自身はいいんだけど、せっかく来てもらったお客さんに…ね。そそくさと楽器の準備をして、あんまり酔ってないから結構冷静に。TOM AND BOOT BOYSはアメリカで人気があるの分かってたし(自分で言ってすまん)、聴きたい曲も古いの多いだろうからそこら辺をどばーとやった。"Oi! BOY! Oi! GIRL!"、"SYSTEM REVENGE"、"PISS OFF MTV PUNKS"、"KILL THE DJ"、"1 2 SONG"等々。お客さんも大分盛り上がってくれたようで(ステージからだとあんまり見えない)、良かった良かった。

演奏中、ドラムが動いちゃってTAKA-44が大変そうだったな。三好君は変わらないいつものニコニコ演奏。そして僕もしっかり「ノリ・コール」に応えて全裸で演奏し、「妻に、僕のおちんちんが今までで一番小さかったと言われた」とMCしたらうけて嬉しかったです。さて、今回作ったセットリストは30曲。まぁワンマンで65曲やったからできるだろうと安易に思ってたんだが、できなかった(笑)。結局20曲弱かな。そんなで演奏終わってすぐに物販へ(涙)。売れ続けて最終的に7割の商品が売れた。

TOM AND BOOT BOYS USA TOUR 2014 3日目 NYからボストンへ

株式会社SAD BOYS社長MIKEの家で昼過ぎに起床。周りには10数人のパンクスが寝てる。なんなんだ…(僕がボストンに住んでいた頃はほぼ毎日リビング・ルームで誰かしら寝ていたから平気だけど)。「5、6時間かかるし、何があるか分からないから早めに行こう!OK!レッツ・ゴー!ガイズ!」とMIKE運転手の一声。みんな動かない(苦笑)。1時間程経ちようやく出発!

車内にはロスから見に来たというパンクスが6人、TOM AND BOOT BOYSの3人、そして運転手MIKE、〆て10人でボストンへ。車中ではスパニッシュ系パンク・バンドがずーっと流れてた。同乗していた6人がスパニッシュ系だから。そいで、MIKEがかけてくれたBOG PEOPLEが最高!!もう解散しているけど。ポンコツ・アメリカ・パンク+ドランク・パンクってな感じ。TOM AND BOOT BOYSやアメリカの80年代初期好きは聴いてみてくれい!途中休憩、軽く休憩なのに三好君が全然帰って来ない。またブラブラしてたんだろ〜って思ったら、大便で30分…。あんたおかしいよ。再出発。北へ北へ。お!知ってるビル群。ボストンの街並みが見えてきた。まさかまた演奏でボストンを訪れるとはとキャラ違いだけど感慨にふける(ほんの少し・笑)。あ、MIKE運転手、ありがとう(笑)。

TOM AND BOOT BOYS USA TOUR 2014 3日目 TOTAL FUCKER本拠地を訪れる

あれ?こんな住宅街に車を止めてどこへ?超体格のいい金髪の人がいるし。え?家?誰の?赤いモヒカン、ブリーチ・ジーンズ、ロール・アップ、コンバット・ブーツ、背も高い、かっこいい…あんた誰?と思って挨拶をする。「え?TIM?誰?」「え?TOTAL FUCKERのオーナー(苦笑)?初めまして、NORIです(笑)」。

TOTAL FUCKERとPOGO77は長年良好な関係で、お互いもの凄く信頼しているんだけど(SAD BOYS/WHO KILLED SPIKEY JACKET?の絵葉書SPLITをPOGO77で流通したり、逆ではTOTAL FUCKER仕様、TOM AND BOOT BOYS/THE CRAPを出したり)、いっつもメールでは「GHOST」って名前だったから、どんな人やら知らなくて(わざわざ聞くのも馬鹿げてる)、きっとオタッキーなんだろうな〜って思ってたから、かっこいいルックスにかなりビックリ(笑)。

部屋にはかっこいいパンクのライヴのフライヤーやポスターが。トレードしたPOGO77



のレコードも無造作にある。何だかとっても嬉しい。そう、TOTAL FUCKERのTIMが今夜のボストンの企画者。THE UNSEEN、AUGUST SPICEという僕がボストンに住んでいた頃ツルンでいた連中、そしてWHO KILLED SPIKEY JACKET?と、現在もっとも影響力のあるバンドも混ぜてのライヴ。「あんた、とっても分かっている!愛情沢山」とフライヤーを見た瞬間思った。お話沢山したいんだが、お酒がない(苦笑)。照れ屋の僕は無口(涙)。宇宙船船長MIKE「そろそろ行くぜ!飯でも食いにまずは会場へ行こう!」。今回はすんなりみんな動く。

TOM AND BOOT BOYS USA TOUR 2014 3日目 ライヴ前に飯へ

会場へ到着。今回初めてやる場所ということだそうだ(理由は…笑)。大きな警察署が斜め前に(苦笑)。今回は物販のみ下ろして、みんなでスパニッシュ系レストランへ向かう。お!!初めてナイスなレストラン!僕は美味しいハンバーガーが食べたくて狂いそうだったから、料理長MIKEに「ハンバーガーみたいの注文してくれい」とオーダー。そして、うまいスパニッシュ・ハンバーガーに感動してビールをたらふく呑んでテンションを上げる。この頃にはもうTAKA-44も三好君も積極的に現地のパンクスとコミュニケーションをとっている。僕は嬉しい。演奏やるだけがバンドの仲間じゃない。限られた時間を共有している以上、お互いに勉強できることも大事だと思っていて、何でも彼らに教えていこうと思ってる(上から目線・笑)。

しかしTAKA-44はお酒呑まないのによく話そうとするよな。あんた偉いよ。あ、書き忘れてた、多分現在のボストンで一番頭の悪いパンクスであろうSHAMUSは初日NYからずっと酔っぱらってて沢山話しました。KILLERS企画を見に日本に来たね。僕はSHAMUSが大好き、きっと普段は無口なんだろう(笑)。OUTSIDERってかっこいいパンク・バンドをやっています。

TOM AND BOOT BOYS USA TOUR 2014 3日目 昔一緒に住んでたルームメイトや仲間達

会場に戻ると、入り口に長蛇の列。そう、今日も先着82名へTOM AND BOOT BOYSのレコード・プレゼント。物販の準備をして(ボストンでもニューヨークと別途、独自で物販製作してくれていて。ボストンのフライヤーのデザインのTシャツやポスター等)、TAKA-44、三好君に、「すまん。今日はボストンの古い仲間が結構来るからお話させてもらいに行くことが多くなると思う」と許可をもらう。

物販では、1996年にTHE DISCOCKSとTOM AND BOOT BOYSのライヴに来たというお客さんが数十人いて、それにもびっくりやら嬉しいやら。「今でもパンクを聴くんだ?」って思った(笑)。その間に、今回ボストンのフライヤーをデザインしてくれたMIKE(LIFE IS POSER)と初めてのご対面。彼は、LIFE IS POSERというパンクスが沢山出てくるマンガを描いたり、WHO KILLED SPIKEY JACKET?のアルバムの絵を描いてる人。POGO77でも大量に彼の作品をディストロしてました。両腕に入れ墨いっぱいの小柄でスキニーなナイスガイ。

そして、ウロウロしてると、「おぉ!!JASON、CARRY、そしてTONY!!」。JASON、CARRYは元ルームメイト。TONYは毎週末、呑んで泊まって、日曜朝に必ず近所のレストランへ朝食を食べに行ってた。来てくれたのか!ありがとう!感動(珍しく今回は本当に感動)。思い出は多過ぎて書けないけど、1個あげれば、JASON、CARRYはモヒカン立ててハーバード大学の前のコンビニの夜勤やっていて、僕は夜な夜な「紙」を喰って飛んで遊びに行ってたもんだ(笑)。そんな毎日遊んでいた彼らも家族・子供を持ったのにわざわざライヴに顔を出してくれた。今でも3人でG.B.H.を見に行ったり、VIBRATORSを見に行ったりしているそうだ。なんかいいじゃん、20年近く経っても仲良くしているなんて。僕も仲間に入れてくれ(笑)!来年プライベートで来るからキャンプでも行こうぜ!と軽く口約束(笑)。

そしてMARK THE UNSEENが、物販の隅っこでニヤニヤしている。MARKのことは彼が高校生の頃から知ってて、THE UNSEENが子供バンドだった頃に練習も見たり。かっこ悪かったな〜、激初期(笑)。MARKも家族がいるようで、そして介護関係の会社を立ち上げて日々忙しいそうだ。THE UNSEENはたまに大きなイヴェントに出るくらいで、今回は、もちろんTIMからのオーファーで即返事してくれたそう。サンキュ。

そういえば90年代に、SHIT-FACEDとTHE UNSEENで初めての全国ツアーを企画したな。普通乗用車ブルーバードとマーチで9人移動という完全に狂った素人のツアー(苦笑)。他のメンバー、TRIP(ベース)、SKA(ギター)も元気だ。元メンバーも来てたり。無茶苦茶みんなにお酒奢ってもらった(歓喜)。

今回は150人で打ち切りってことで(300は来ると思っていたけど、色々理由があったんだろう)入れなかった仲間も沢山いただろうと思うと申し訳ない気持ちになった。

TOM AND BOOT BOYS USA TOUR 2014 3日目 SHOW AT ITAM Post 6 IN BOSTON

昨日来てくれたパンクスもちらほら。ボストンはパンクスが派手だな。NYは洗練された感じ、ボストンはヤンチャな感じ。面白い。今夜もソールド・アウト。頑張ろって少し思う。会場は、ステージがなく、お客さんとバンドは同じ高さ。TAKA-44がそういう場所でやりたいと日本でしきりに言っていた。よかったね、やれて。でもお客さんが雪崩になって来て演奏できないぞとは言っておいた。それが後で現実になる(笑)。

さて、ライヴは1番目、DISIPLINEから。すいません、物販が超忙しくてチェックできず(涙)。今回物販はバー・スペースだったんで、店番やりながらライヴを見ることができず。

そして2バンド目はTOTAL FUCKERのTIMがヴォーカルをとるSADIST。彼はかなりのレコード・マニアなのでどんな音をやるのか期待。ストレートなパンクでないことは確かだろうと思っていたが、まさに(笑)。なんだかわかんない被り物で叫んでるし(笑)、あんたかっこいいんだから…。しかし音は抜群のセンス。80年代中期の日本のハードコアの影響が強いか?KUROとかZOUOとか。おっと、KOWARD(DISCHARGE臭も若干あるクラストよりの緊迫度の高いハードコア)ってバンドがこのバンドの前身。つか、物販やりながら、色々な人と話しながら、後ろで見てるから見えん!!

んで、WHO KILLED SPIKEY JACKET?の出番。会場爆盛り上がり!やっぱ人気あんだな〜。ちなみに僕が現在のバンドの中で一番好きなのが、WHO KILLED SPIKEY JACKET?です。ぐっちゃんぐっちゃん。メンバー



全員気合い入っているし歌っている内容(TOM AND BOOT BOYSに近い)が解り易いし曲ポップだけどハードだし盛り上がるわな。余談だがヴォーカルの方は僕位の年齢かな?と思っていたんだけど(髪型で・苦笑)、30ちょい過ぎなんだね。いいわ。B級で。

さて、後半戦は90年代からやっているおっさんバンド達。まずはAUGUST SPIES。当時からしょっちゅう見ていたバンドの1つ。あんまりかっこよくないんだけど(仲はいいよ)、何かといえば対バンで出てたもんで(苦笑)。はい、今回は5年ぶりにTOM AND BOOT BOYSが来るからってことで演奏したようだけど、今回もいまいちピンっとこないライヴでした(笑)。懐かしかったけど。

トリ前は、思い出もいっぱいのTHE UNSEEN登場。流石に、僕も最前列隅へ行きじっくり見る。MARKがちらちらこっち見て歌っているのがどーも暑苦しい(苦笑)、と思ったらマイク持って来るし(大汗)。しかしやった曲が昔の1st/2ndアルバム中心でちょいと涙が出そうになったり出なかったり(笑)。正直、昔ほどかっこよくなかったけど、それは思い出が思いっ切りカヴァーしちゃって、感動して見てました。お客さんはそこまで盛り上がってなかったけど、どんな気持ちで見ていたんだろう?

さてさて最後に登場、TOM AND BOOT BOYS。THE UNSEENのギター、ベースをそのまま借りて、演奏開始。さすが、お客さんと同じ高さのステージ。いっぱいのパンクスの威圧感が凄い。時間があまりないということで、「ショートで頼むぜ、ノリ!」とTIMから。よし、30曲から10曲へ変更だ(笑)!お決まりの"TOM AND BOOT BOYS"、"Oi! BOY! Oi! GIRL!"、"YOUNG PUNKS POGO"と初めてリリースしたレコードの曲をやる。お客さん、爆ノリ。ぐちょぐちょ。何度もマイク・スタンド倒れそうになるが、心優しきELIE(WHO KILLED SPIKEY JACKET?ベース)がずっと僕の前でフォローしてくれてる。「やっぱ、あんた、良い奴」。"PART-TIME CLASS"やら"KILL THE DJ"やら"PISS OFF MTV PUNKS"やらやっててお客さんもひっちゃかめっちゃかに盛り上がっている中、クラブの店長?責任者?が、「はい、もう終わり!」とちょっと怒った雰囲気(大汗)。そか、んなら、最後の1曲。"DISNEYLAND GET OUT PUNKS"。

え?って感じなんだけど、何故これをチョイスしたかというとELIEが、「この曲をどうしてもやってくれ」「なぜ?」「この曲からWHO KILLED SPIKEY JACKET?のロゴをディズニーにしたんだよ!」「おぉぉぉ!気がつかなかった」という具合にELIEはとってもTOM AND BOOT BOYSが大好き。今回も色々細やかな面を見たしね。最後は彼の好きな曲をと。ELIEに肩車されてギターをかき鳴らし、パンクスの群集の中へ…。



TOM AND BOOT BOYS USA TOUR 2014 4日目 ボストンからNYへ そして日本へ

ライヴが終わり、物販にてお客さんと色々話す。ほとんど物販残ってない状況。97%売り切れた。サンキュ。時刻は22時。軽く呑んでいたら、運転手MIKE(笑)が「ノリさん!もうちょいしたらボストン出るよ」「OK。MIKEは大丈夫かい?24時間寝ないで運転になるけど…」「大丈夫大丈夫!」という会話があったが、MIKEは今にも撃沈しそう(笑)。MIKEのバンに乗り、必死で起きていようとしたが(僕、助手席だった)、撃沈。気がついたら、もう、朝日を浴びてるJFK国際空港。「MIKE…ごめん、そしてありがとう」。

あっという間のアメリカ滞在も終わりの時、飛行機出発まで3時間程あったけど、MIKEに「本当にありがとう!」と手短に挨拶して(僕は大袈裟が大嫌いなんで)、彼を眠らしてあげるべく、逆お見送り(笑)。今回のアメリカ・ツアーの1番の成功は、MIKEがしっかり段取りしてくれたから。感謝で一杯。

さて、「ビールでも呑みに行こうぜ、三好君、タカ!」とバーへ行く。呑みながら、2人に感想をじっくり聞きたくて。2人ともかなり刺激を受けたようで、普段あんまり感情を出さないTAKA-44が興奮しているのにはちょっと驚いたし嬉しかった。彼から「ノリさんがちゃんとレーベルやっているから、アメリカでTOM AND BOOT BOYSが人気あるし、裏方の人からも凄い良くされ過ぎなんですよ。普通ここまでされませんよ。ありがとうございます」と言われた時は、僕…泣きそうになった(笑)。2人とも、新しい仲間や知らない環境を知ったり、人生の糧になったと思う。三好君は…変わらないか(笑)?帰りの飛行機も、北京経由だったんだけど、台風で北京から出国できず、1日だけ中国に入国して、豪華ホテルにて一泊という落ちがついて、この素敵なアメリカ・ツアーは終了しました。あ、収支は見事プラスでした。

TOM AND BOOT BOYS USA TOUR 2014 総括

今回のアメリカ・ツアー、わずか3ヵ月足らずで、マーチャンダイズ、日程、レコード・リリース多数等、色々な人の協力で準備出来ました。出来すぎでしょう。

各会場82枚レコードばら撒きという素晴らしい企画をくれ、ボストンのやんちゃなメンツを仕切ってくれたTIM(TOTAL FUCKER/SADIST)、フライヤー、マーチャンダイズのデザインをしてくれたMIKE(LIFE IS POSER)、5インチ・レコード会場限定発売という意味不明なことやってくれたRICHARD(HUMAN DOUBLE FACE RECORDS)、今回間に合わなかったけど、カリフォルニアから援護してくれて「OLD PUNK GENERATION」7"をリリースしてくれたADRIAN(FEAR OF WAR)、そして何といってもMIKE(SAD BOYS/POX/CRY AND POGO)。たった3ヶ月でニューヨーク企画、ボストンとのパイプ役、82枚ばら撒き、運転手、総合仕切り、お手伝いさん(笑)、等々本当にありがとう。真面目に人の倍以上やっていれば誰か見てくれているし、しっかり音も拘って愚直にやっていれば聴いてくれるし、TOM AND BOOT BOYSはいいバンドと自分で思っているけど、あらためて自信になりました。これからも仲間、関わった人々、ファンになってくれたパンクスを大事に、絶対変わらずに同じパンクをひたすら続けていこうと思っています。ありがとうございました。



DISC REVIEW

音源紹介：今回のツアーで世話になったパンクス達の音源を軽く紹介。探してみてね

①PRIMITIVE PACT/END OF THE WORLD (TAPE) 2012
東海岸を中心に活動しているUK82スタイル・ハードコア・パンク・バンドの初作品(この前話したらボストンの田舎に住んでるって言ってたけど)。90年代・00年代の影響ほぼ無。愚直にUK82。もうちょい言うと、RONDLET/BEAT THE SYSTEM。どったんばったんの演奏に合わせてリバーヴをかけたヴォーカルをやや前面に出した録音。最近のバンドではあまり見ない。ルックスもUK82で凄いかっこいいぞ。最近NIGHTRIDER RECORDSよりリリースされた7"レコードは若干やかましさが消えたがまだまだかっこいいUK82でした。ちなみにヴォーカルとギター(?)が兄弟で揃ってかっこいいパンクスです。

②ELL/ENDLESS FUCKER (7") 2014
こちらもニューヨークを中心に活動してるノイズ・コア・バンド。日本語がジャケットにあるのを見て分かるように日本の古いノイズ・コアの影響が多大。それゆえか、とっても聴きやすく、ここちよいノイズ・コアの単調なリフの繰り返しが気持ちいい。今回見たライヴでの印象はもうちょい凝った進化ノイズ・コアという印象だったが、音源の方が僕は好みです。日本のバンドの影響が大きい海外のバンドって今、本当に多いね。

③ROTTEN UK/BLOODY HELL (7") 2013
バンド名、ロゴだけ見て、UK82系のノイズ・コアかな？って思ってたんだけど、実際聴くと、UK82系ミドル・テンポの曲が中心。バンド名でいうとVIOLATORS、ATTAKに近いものを感じる。渋い。あと、ポスト・パンク/ゴシックの影響も若干感じてて、実際ライヴを見たら、ヴォーカルの方の服装、やっぱりという感じで、ポスト・パンク/ゴシックちょっと混じってる。こういうバンドも日本では見ないな。

④SAD BOYS/ST (7") 2013
日本ツアーもやっているから知ってる方も多いと思うSAD BOYSの1st 7"。THE DISCOCKSとVICE SQUADを足して、ノイズ・コア振りかけて、SAD BOYSカラーで染めました的な(笑)、超ポップでハードな激POGO PUNK NUMBER満載の一枚。超最高です。どっかのZINEのインタヴューで読んだけど、THE DISCOCKSやTOM AND BOOT BOYSから影響受けたみたいなこと書いてあったね。いやいや、SAD BOYSの方が数段クリエイティヴでカッコいいですよ。今後は活動があまりできなくなるようです、残念。

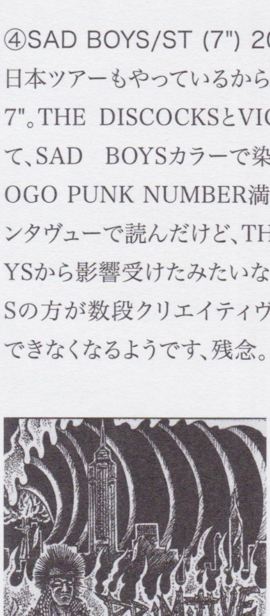
⑤SAD BOYS/WHO KILLED SPIKEY JACKET?
WISH YOU WERE BEER! (POSTCARD FLEXI) 2014
TOTAL FUCKER(USA)、NOISEPUNK RECORDS(UK)、POGO77 RECORDS(JAPAN)という共同で流通された絵葉書5"フォーマット。我が家に無造作にぐるぐる巻きでラップに包まれた100枚の絵ハガキ(レコード)が封筒で届いたときには正直「おいおいっ(汗)」と。日本流通100枚担当したけど1日で終了。さて内容。超POGO PUNK SAD BOYSと攻撃的かつポップ・センスありのWHO KILLED SPIKEY JACKET?抜群の内容。しかし、これちゃんと聴けた人が何人いたのか…(笑)。

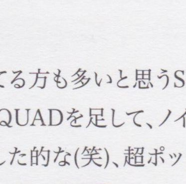
⑥ASPECTS OF WAR/IN ORDER TO SATISFY THEIR MANIA FOR CONQUEST PUNKS ARE SQUANDERED (TAPE) 2011
このバンドもボストン。しかしボストン、相変わらずパンク・バンド多いな。さて、来年SYSTEM FUCKERとの日本ツアーも控えている猛爆撃D-BEAT CRUSTバンド。かっこいい。この作品は初期の方で、DISCHARGEなんかもろカヴァーしてる。音はオーソドックスなCRUST/DISCOREだけどその部類の中でも上位に来る。ヴォーカルのお兄さんも話したけど、なんかひょっこりしたいい感じの人でした(笑)。最近でたシングルは聴いてないや。

⑦WHO KILLED SPIKEY JACKET?/ST (12") 2012
FUCKING DRUNK AND STUDS PUNKS!って表現で足りるはず。極初期THE CASUALTIESにも通じるものはあるが、それに若干POGO77 RECORDS/TOM AND BOOT BOYSのおふざけを塗した感じかな。とりあえず、FUCK/Oi!/PUNKS/GLUEというキーワードを主に歌詞・訴えをガナリ立ててる。どっかのバンドみたいだが(苦笑)、ライヴもひっちゃかめっちゃかで、僕が現役で1番好きなバンド。

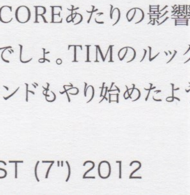
⑧KOWARD/ST (7") 2012
ボストンのTOTAL FUCKERレーベル・オーナーTIMを中心に活動しているバンド。DISCORE型ハードコアだけど、他色々なバンドの要素を吸収してて飽きない。流石、パンク・マニアTIM。90年代USA CRUST/HARDCOREあたりの影響が一番かな、やっぱり。爆撃型が好きな人はいいでしょ。TIMのルックスもいいし(笑)。現在並行して、SADISTというバンドもやり始めたようで音源気になる。

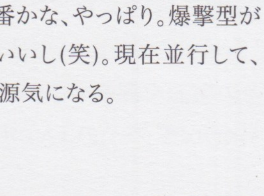
⑨RAT RACE/ST (7") 2012
WHO KILLED SPIKEY JACKET?のメンバーもかぶっているボストン・ストリート・パンク・バンド。現在はあまり動いてないようだが、こういうバンドが現在でもいるというのは嬉しい。音は90年代の影響下で、THE UNSEENのMARKの歌い方に若干似てたり。音は速めなのでセッカチなパンクスもばっちり聴ける。ちなみにバンドの自主リリースなんだけど、作りもチープでなかなか好感もてますな。

①


②


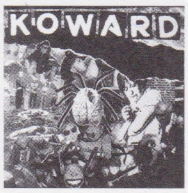
③

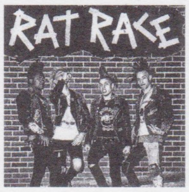

④


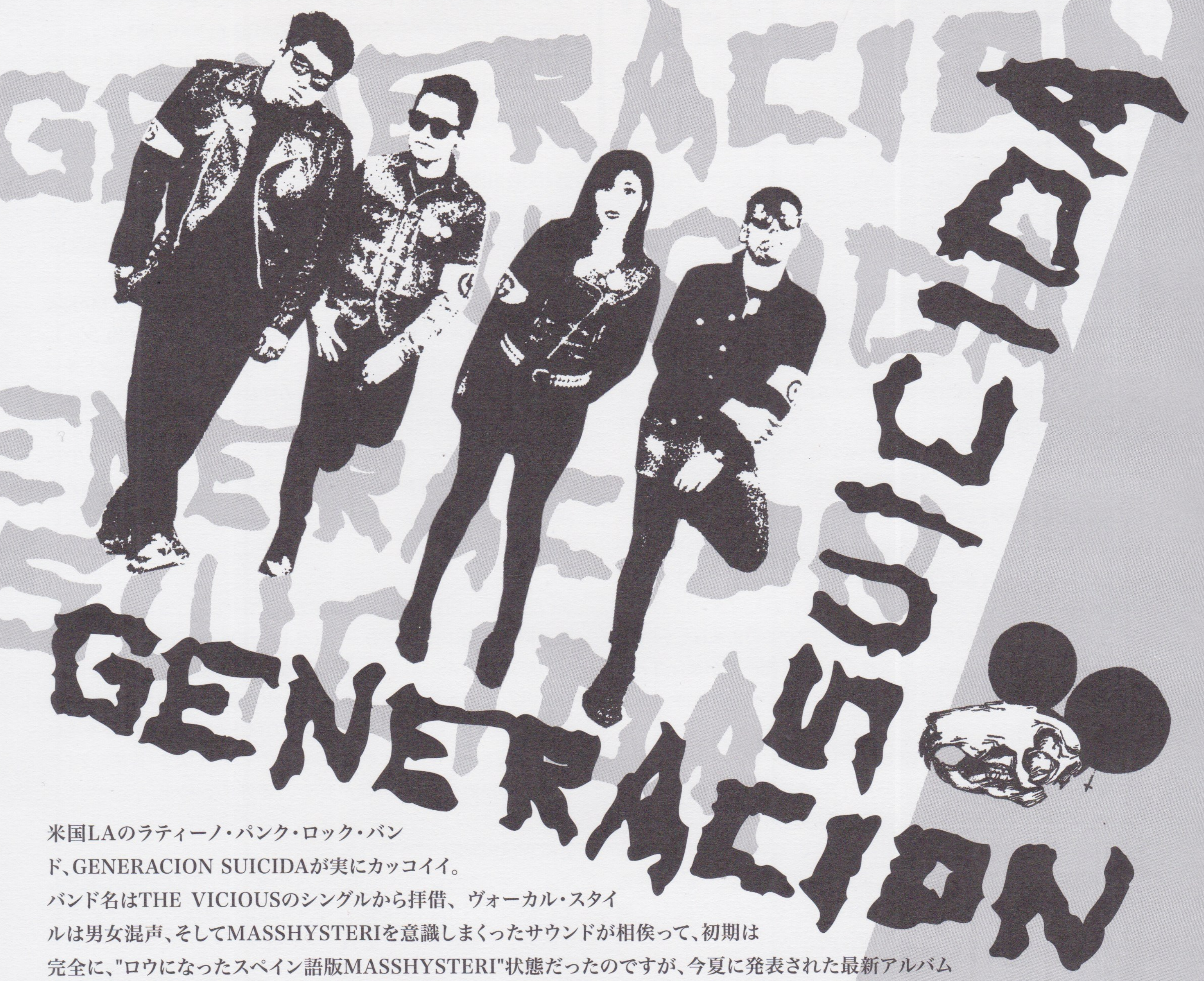
⑤


⑥


⑦


⑧


⑨




米国LAのラティーノ・パンク・ロック・バンド、GENERACION SUICIDAが実にカッコイイ。バンド名はTHE VICIOUSのシングルから拝借、ヴォーカル・スタイルは男女混声、そしてMASSHYSTERIを意識しまくったサウンドが相俟って、初期は完全に、"ロウになったスペイン語版MASSHYSTERI"状態だったのですが、今夏に発表された最新アルバム『Todo Termina』では、一皮も二皮も剥けた深化(真価)を見せています(それでも充分にマスっていますが…)。その実態を探るべくインタヴューのオファーを出したところ、メンバーのうち、Tony(ギター&ヴォーカル)、Kiwi(ドラム&ヴォーカル)、Mario(ギター)の3人が応じてくれました!

■まずは、皆さんのパンクとの出会いについて聞かせてください。

Tony「13歳くらいの頃だったよ、俺が初めてパンク・ミュージックを発見したのは。初めて聴いたバンドはRAMONESにTHE SEX PISTOLSだね。大好きで未だに聴いているバンドでもあるよ」

Mario「僕の姉のCDコレクションだった。ろくでもないCDばかりだったけど、RAMONESにはヤラれたね」

Kiwi「私が12歳の頃、ママはディスコ・ミュージックに夢中だったの。そんなママがCDを注文する際に使っていたカタログにRAMONESの『Rocket To Russia』も載っていてね、あるときママが注文したディスコのCDのオマケとして、その『Rocket To Russia』が届いたのよ。あっという間に夢中になっちゃって、それから色んなバンドを発見するようになっていったの」

■最初に組んだバンドのことは覚えていますか?その当時、何歳でしたか?

Tony「俺が初めてプレイしたのはVAKRAANTってバンドで、14歳だったよ。DISCHARGEとフィンランドのハードコア(RATTUSやKAAOSみたいなバンド)にのめり込んでいてね。そのバンドが本当に俺にとっての初のバンドさ。ひどいもんだったし、ろくすっぽ活動もしていなかったくせに、誰も聴きゃしない曲を作りまくっていたな(笑)」

Mario「ムカムカしてたんだ、僕たちはクソだったからな。それでLA VOZを始めた。LENGUA ARMADAから1枚リリースしているぜ」

Kiwi「GENERACION SUICIDAが私にとって唯一のバンド。21歳の頃からプレイしているわ」

■GENERACION SUICIDAにはRAYOS Xをやっていたメンバーもいるんですよね?

Tony「VAKRAANTが解散して、別の奴らとRAYOS Xを結成したんだ。で、RAYOS Xも解散しちまって、ドラムのKiwiと一緒にGENERACION SUICIDAを始めた。その頃、Kiwiは学校に通うために地元を離れていたから練習も全然できなくてね、それで彼女が学校から一旦戻って来たのを機に、もっと真剣にこのバンドに取り組むことにした。なにせLAのパンクはその頃、最高潮を迎えようとしていたからね。たくさんのバンドがいたし、多くのキッズが企画を始めようとしていて、シーンにもっと関わろうと動き出していたんだ。俺たちは、俺の両親のガレージの片隅でスリー・ピース・バンドとして練習を始めた。すごく狭くて

ね、Kiwiとドラムとアンプだけでもういっぱいになっちまった。だから残りのメンバーは外で練習しなくちゃならなかったよ」

■GENERACION SUICIDAというバンド名は誰がつけたのですか?

Tony「俺がこの名前に決めたんだ。THE VICIOUSのファンだったから、彼らのシングル「Suicidal Generation」からとったのさ。このバンドに完璧にフィットする名前だと思ったしね」

■MASSHYSTERIを想起させるサウンドですが、GENERACION SUICIDA結成当時はやはり意識していましたか?

Tony「正直に言えば、イエスだ。結成した当初はMASSHYSTERIから影響を受けていたよ。メロディックなタイプの何かを、スペイン語でやろうというアイデアがあったんだ。だけど、時間とともに俺たちは俺たち自身のサウンドを作り上げていった。近頃じゃ、みんな俺たちのことをMASSHYSTERIやTHE VICIOUSと比べてばかりだよ。そういったバンドが好きだと俺たちが公言したからさ。正直、もう似ていないと思うんだけどね…」

Kiwi「MASSHYSTERIは大好きよ。だけど、私はもっと尖ったサウンドを念頭に置いて、このバンドを始めたの。RIPやESKORBUTO、それにGORILLA ANGREBといったバンドが近いかな。私はこのバンドに、より独自性を感じさせるような要素をもたらしていると思っているけどね(笑)」

■Dangerhouse Recordsがリリースしていたようなバンドはどうです?どんなバンドをこれまで聴いてきましたか?

Tony「実際のところ、Dangerhouse Recordsがどんなバンドをリリースしていたか俺はよく分かっていないんだけど、KBDと呼ばれる初期のパンク・ロック(THE WEIRDOSやTHE DILS、THE ZEROSとかみたいなね…)について君が言及しているなら、イエスだね。その手のバンドは大好きだよ。中でもTHE DILSがリリースした全てのシングルは格別さ。"Mr. Big"と"Tell Me What I Want To Hear"がお気に入りの曲だね!」

Mario「僕はパンクよりメタルを聴いて育ったんだよね。主に80年代のスラッシュ・メタル・バンド、SLAYER、MEGADETH、RAZORみたいなやつだよ」

Kiwi「私はストリート・パンクの大ファンだった。その一方でRAMONESとTHE GERMS、それにICONS OF FILTH、DISCHARGE、THE VARUKERS、THE ADVERTS、X RAY SPEX、GBHを聴いてきたわ。今でもそういったバンドは聴き続けているわね」

■歌詞についても教えてください。

Tony「歌詞は全部、俺が書いているよ。俺の書く歌詞はすごく個人的なものになりがちでね、そのほとんどが実際に起こったことがもとになっているんだ。同時に、他者の視点から歌詞を書く傾向もあるように思う。それに大抵の歌詞は、それぞれ密接に関連づけすることもできるんだ。自暴自棄、愛/失恋、警察による残虐行為、そして孤独について、俺は多くの歌詞を書いてきた。境界性人格障害についての曲もいくつかあるけど、それは俺たちが生きているこの日常の現実でもあるんだ」

■メンバー全員がラティーノなのでしょうか?スペイン語で歌うことについては重要視していますか?

Tony「このバンドのメンバー全員がラティーノだよ。俺たちにとってスペイン語で歌うということは大切さ。ある意味で反抗のもう一つの形なんだよ。アメリカでは、多くのコミュニティが"アメリカの"スタンダードに同化しようとして、自身の言語と文化を忘れてしまうという事態がしばしば起こるんだ。俺たちはそういったスタンダードなんてものに屈することなく、このアメリカで生き抜くことができると信じているんだよ」

It's another form of rebellion

■気を悪くさせてしまったら申し訳ないのですが、アメリカ国内にはラティーノに対する差別というのはあるのでしょうか?

Tony「アメリカには、明らかにラティーノに対する差別があると個人的には感じているよ。大きな意味での差別(書類なしに渡航してきたラティーノに対する大規模な国外追放とかね)と、もっと個人間レベルでの差別もあるよ。多くの白人のアメリカ人は、彼らのスタンダードとは異なる、もしくは従わない存在によって脅かされている、と感じているからね」

■Going Undergroundからリリースされた新しいLP、『Todo Termina』のレコーディングに際して、一番気を使ったところは何ですか?

Tony「新しいレコードに関して、目標としていたことの一つに、よりアグレッシヴな作りにしようというのがあったんだ。メロディックな特質は維持したままでね。仕上がりには満足しているけど、もっともっと良くすることもできたと思っている。その反面、これまでのレコーディングに関しても、納得したってことは一度もないんだ。今でも『Con La Muerte A Tu Lado』(※1st LP)を再録したいと思っているくらいだしね。そういったこと以外に関しては、今回のレコーディングは実に順調だったな。週末を3回使ってレコーディングしたんだ」

Mario「そうだね、順調に行ったけど、ライヴ・レコーディングは僕らにはかなりキツかったよ」

Kiwi「すっごくスムーズで、ライヴで録音するっていうのも含めて楽しいレコーディングだった。私たちのサウンドがどんな風に発展したか、その進化を表現できていると思う。仕上がりには大満足しているわ」

■CATHOLIC SPITとのスプリットEPも過去にはリリースしていますよね?



Tony「CATHOLIC SPITは俺たちの友達でね、ドラマーのNickはGENERACION SUICIDAのレコーディングにも参加してくれたんだ。だから彼のバンドを聴いたとき、自然とスプリットを出そうぜって話しになったのさ」

■昨年にはヨーロッパ・ツアーも敢行しましたが、印象深かった出来事はありますか?

Tony「ヨーロッパは、俺の人生における最高の経験だったよ!今でも本当に行ったなんて信じられないくらいさ。9カ国を廻ったんだけど、それぞれ異なるパンクの文化とライフ・スタイルを体験することができた。そして、これまで読むことしか叶わなかったことをこの目で見られたんだよ。ほとんどのショーが大盛況だったから、もし再び行くことになったら、また燃え上がるぜ!」

Mario「ドイツで過ごした大晦日を、僕は決して忘れないだろうね。家族と一緒ではなかったけど、知らない者同士がパンクを聴きながらビールを飲みまくって、花火が光り輝いていたあの大晦日をね」

Kiwi「書き切れないほどあるわ!海を渡って、地元をあんなに離れたのは、私たちにとって初めてのことだったから!それに、こんなに遠くまで私たちの音楽が伝わっていることが知れて、すごく嬉しかった。私たちのショーにはそれほど人が集まらないだろうと思っていたから、毎晩たくさんの人たちが詰めかけてくれたのを目にして感動したわ」

■今年の8月に3日間に渡ってニューヨークで開催された、"NYC Latino Punk Fest 2014"にも出演しましたが、どうでしたか?フェスの感想を聞かせてください。

Tony「"NYC Latino Punk Fest"はかなり最高だったよ。俺たちが出演したのが初日の夜だったのも良かったね。フェスの残りをリラックスして楽しむことができたからさ。そして、こんなにも多くのラティーノがイースト・コーストに集まったという事実もすごいことだよ。ニューヨークにはラティーノによる(LAみたいな)パンク・シーンが圧倒的に不足しているから、俺たちみんなでラティーノ・パンクの盛り上がりを見せつけたという事実がね」

Kiwi「Latino Festはとても楽しかった。新しい友達がたくさんできたし、ラティーノが一つになって積極的にこのフェスを成立させたことには胸を打たれたわ」

■LAは巨大な都市だから、ハードコア/パンク・シーンもそれぞれ分かれているのでしょうか?最近のLAのシーンについてはどう思っていますか?

Tony「LAはデカイから、ありとあらゆる色んなシーンがあるんだ(俺が全然知らないところだってあるよ)。イーストLAには若いストリート・パンクのキッズがいるし、サンタ・アナ(LAから40分ほど行ったところ)にもパンク・キッズがいる。それにサウス・セントラルLA(俺たちの地元でもある)にもパンクスがいるからね。昔はシーン同士、全然うまくやっていけていなかったんだ。例えば、イーストLAのキッズがサウス・セントラルのショーに来るなんてことは絶対にできなかった。でも近頃じゃ、パンクスは自由にこの都市の中を行き交っているよ。それにLAから少し行ったインランド・エンパイアみたいなところにもシーンがあってね。インランド・エンパイアにはAUSENCIAやABORTION REELS、BED BUGSといったグレートなバンドがいるぜ」

■では、LAのライヴ会場やレコード・ショップ、レーベル、ディストロ、ファンジンなんかはいかがですか?

Tony「LAにはそれほどないんだよ。俺たちのレコードをリリースしているレーベルはベーカーズフィールド(LAから北へ2時間ほど)にあるしね。 ハリウッドにあるHeadline Recordsは俺が童心に戻る店だね…」

■今後の予定について聞かせてください。

Tony「今年も終わろうとしているけど、年末にはコロンビアに行きたいと思っているんだ。来年の夏にはチリへのツアーも計画している。いつか日本にもツアーで行けたら最高だね。どんな機会であれベストを尽くすさ。来年には3rd LPをリリースできればと願っているよ」

■インタヴューさせてくれてどうもありがとうございます。日本の読者にメッセージをもらえますか?

GENERACION SUICIDA「インタヴューを読んでくれてどうもありがとう!日本に行ける日を楽しみにしているよ!」











GERM ATTAKで来日経験もあるJo氏がまた新たなバンドを結成したと、EPがリリースされるずいぶん前から一部で既に話題になっていたバンドがこのZEXです。レコードを発表するよりも先に、始動してまずすぐに取りかかったのがプロモ・ビデオの制作で、女性メンバー2人を含むグラマラスなルックスのパンク・バンドということもあって、このビデオの拡散は見事に効果をもたらしました。IRON DOGS、BASTARDATOR、GERM ATTAK、TRIOXIN 245、BLUE CROSS、etc、パンクとメタルのさまざまなスタイルのバンドを始めては止めてきたJo氏ですが、このZEXは一癖あるJo氏に負けない強烈なキャラクターを発揮する女性ヴォーカルGretchenもバンドの中枢となっているので、過去にJo氏がやってきたバンドとは違う活躍が期待できるでしょう。恐らくJo氏も今までのバンド以上に手応えを感じているのではないでしょうか。周囲をハッピーにするようなパーティー・パンクスとはちょっと違う、シニカルなキャラのJo氏だけど、僕の経験上、めんどくさい奴とかちょっとイヤな奴くらいの方が、状況を冷静に分析して判断する能力に長けているような気がします。週末のライヴでバカ騒ぎするために平日を適当に過ごせる奴よりも、ライヴの数日前には姿をくらまして山籠りしてるようなミュージシャンやバンドこそ、アーティストと呼ぶにふさわしいはずです!!まぁでも、Jo氏もZEXも別にそんなミュージシャンってわけじゃないと思いますけど。

INTERVIEWED:大倉　了(RECORD BOY)

■まずはZEXの結成時について教えてください。Joが始めたバンドですか?Joが他のメンバーを募集したり、またはもともとの知り合いや友達だったんでしょうか?

Gretchen「私とJoが求めるバンドの明確なヴィジョンを持っていて、それを実現させるために始めた。ZEXは完全にオリジナルな私達自身の構想から生まれたのよ」

■各メンバーについてもう少し詳しく教えてください。メンバーはみなさん、過去や(現在も)他のバンドでプレイしてきたミュージシャンですか?

Jo「ドラムのTashaはたくさんやってたよ。主なところでは、GONE DRINKIN'、GET WRECKED、THE NUKES、SLUMLORDなど。ベースのGabは、REVENGE OF THE MORMONS、DICK FISTER、SHIT HEADっていう、どれもおかしな名前のバンドをいくつかやっていた。ヴォーカルのGretchenを除いて、バックの3人はみんな2000年代初め頃からたくさんのバンドでプレイしてきた」

Gretchen「私は友達に手伝ってもらって自分でやってたバンドがいくつかあったけど、どれも陽の目を見るような活動には至らなかったわ。本気で一緒に音楽に没頭してくれるメンバーに出会えたことがなかったの。学校、仕事、地域の付き合いとか、普通の生活を送ってたらそっちを優先しなければならないのは仕方ないからね。JoとはZEXの前にも一度プロジェクトをやってたことがある」

■Jo、あなたはBASTARDATORとGERM ATTAKをやっていましたし、IRON DOGSもまだやっていますよね?どのバンドも全部違った音楽性を持ってるけど、ZEXで目指すところは70'sパンクとNWOBHMのミックスといったところですか?ZEXの音楽性に影響を与えたバンドなどを教えてください。

Jo「新しいバンドで今までと同じようなことを繰り返したって面白くないしね。ZEXは今までなかったような、本当に新しいスタイルの音楽をやろうとチャレンジしているわけだけど、でも、SHAKIN' STREET、CORBEAU、RUDI、SCREAMING SNEAKERS、LIGOTAGE、BRATS、VICE HUMAN、HEAVY LORDみたいな個性的なバンドからのインスピレーションはある」

■私達のショップには「Savage City」と「Wanderlust」の両方の7"EPがほぼ同時に入荷してきて、どっちが1stでどっちが2ndなのかよくわかりません。それと、その2枚は良く似た雰囲気のアートで統一されてますよね。違う2つのレーベルから似たようなルックスのシングルを同時にリリースする目論みだったんですか?



Jo「「Wanderlust」の方がリリースされたのは数週間先だったけど、どっちのシングルも同じ時にレコーディングした。その日は北欧神話Ragnarokの終末の日と予言されてた日だったから、"Ragnarok Session"と銘打ってあの2枚のEPは録音したんだ。こういう音楽をやってても、そういうファンタジーっていうか、芸術的センスのあるシャレみたいな部分は持っていたいと考えている。IRON MAIDENもBLACK FLAGにもそういうセンスはあったからね」

■「Savage City」をリリースしたElectric Assault Recordsのことは良く知っていましたけど、「Wanderlust」をリリースしたWired For Sound Recordsについては全く知りませんでした。あのレーベルはいろいろ他のリリースもあるんですか?それと、あなた達の方からElectric AssaultとWired For Soundの2レーベルにEPのリリースを依頼したんですか?それともレーベル側からオファーしてきたんですか?

Jo「Wired For Sound Recordsは、BEN DISASTER、HARPER SS、RHYTHM OF CRUELTYなどをリリースしてるCrude City Recordsっていうところのサブ・レーベル。Wired For Soundにも、Electric Assaultにも、ZEXが初めてスタジオ・レコーディングしたテープをプロモーションで以前送ってたので、それで彼らが気に入ってくれてリリースのオファーをしてきた」

■1st LPの『Fight for Yourself』はJo自身のレーベルCapitalicideからのリリースですが、「Wanderlust」と「Savage City」のように、他のレーベルからではなく、自分自身で出したかったということですか?確か、IRON DOGSにはCapitalicideからのリリースはないですよね?Joはメタル・バンドもやってても、Capitalicideでのリリースはパンクで統一したいのかな、って思ったのですが。

Jo「いや、"Capitalicide Records And Tapes"はBASTARDATORの「Power of Death」7"や日本のPARASITEの1stデモもリリースしてるから、メタルの作品もある。ZEXの1st LPは、FLYING FORTRESSやGOAT HORNなんかをリリースしているオタワのUncle D Recordsというところとの共同リリースだし、他のレーベルからのライセンス・リリースも俺は大歓迎だよ」

■"Buy or Die"や"Fight for Yourself"にはIRON DOGSとの共通性を感じましたし、"Screaming at the Wall"なんかは、さっき名前の出たLIGOTAGEやVICE SQUAD風ですよね。曲は各メンバーが持ち寄って作っていますか?それともJoがほとんどの曲を書いていますか?

Jo「俺がバッキングとメロディーを作っている。確かにそのへんの曲("Buy or Die"と"Fight for Yourself")は、HELLOWEENやREX INFERIっぽいメロディーだから、IRON DOGSとの共通性という意見は間違ってないかな」

Gretchen「"Fight for Yourself"の歌詞は私の日常生活から生まれたもの。常にギリギリの生活で、平穏な時なんて一度もなかった。人生には学習が必要だというメッセージが込められた曲」

■IRON DOGSでも作ってたけど、ZEXはプロモ・ビデオがありますね。アンダーグラウンドなDIYパンクやメタルでプロモ・ビデオを作るバンドはあまりいませんが、これはJoのアイデアですか?IRON DOGSで作ってた2014年カレンダーはケッサクでしたが、ZEXでも画期的なマーチャンダイズなどはありますか?

Jo「カレンダーはバカバカしかったけど、面白いでしょ!俺のアイデアを楽しんでもらえれば嬉しいよ」

Gab「IRON DOGSもZEXも、プロモ・ビデオは俺が監督して編集もしたんだ。ちょうどIRON DOGSのビデオを編集してる時に、Joが新しいバンドを始めようとしてる話をしてきて、数曲入ってたデモも俺に送ってきた。そして俺もZEXに加わることになった」

Gretchen「グッズやビデオ、面白いマーチャンダイズの計画も考えてる。まだどうなるかわからないけど、楽しみにしててくれていいわ」

Tasha「確かにDIYパンク&メタルのシーンではプロモ・ビデオって珍しいのかもしれないけど、世界中のあらゆる人々がYoutubeやオンライン・ビデオを見ている今、自分達の音楽を拡散するのにこんなに有効な手段はそうはないでしょ?Gabが勤めている会社のBilly Darts Productionsでビデオの作り方を教えてもらったから、私達みたいなDIYシーンのバンドでもプロモ・ビデオを作ってみたら?って彼が提案してくれたの。私達も全員最初から凄く乗り気だった。ほとんど全部自分達だけで出来たし、私達の場合はラッキーにもそんなにコストも掛からなかったし、やってて凄く楽しかった」

■カナダのパンク・シーンについて聞かせてください。モントリオールとオタワは大きな一つのシーンとして機能していますか?それともそれぞれで独立した別のシーンなんでしょうか?オススメのバンドがいましたら教えてください。

Gab「オタワとモントリオールは完全に違うシーンとしてそれぞれ存在してるけど、2時間ほどで行き来できる距離だから、たくさんのバンドがお互いのシーンで演奏しているよ。俺のオススメは、DAGGER EYES(モントリオール/オタワ)、THEE NODES(モントリオール)、NEW SWEARS(オタワ)、SLUMLORD(オタワ)、ASILE (オタワ)かな」

Tasha「モントリオールとオタワのパンク&メタル・シーンは最高!オタワ、トロント、モントリオール、そして時にはバンクーバーのシーンのバンドも一緒になって様々なフェスが開かれているわ。Spider Fest(オンタリオ)、Bleak Life Fest(オタワ)、Varning(モントリオール)なんかや、各都市のシーンでアメリカのパンクス・ピクニックみたいなのも毎年夏にやっている。オススメのバンドは、SEX FACE(モントリオール)、PROXY(モントリオール)、ASILE(オタワ)、NAPALM RAID(ハリファックス)、WHISKEY SHITS(モントリオール)、ALCOHOL FUELED(オタワ)、SHACKLES(オタワ)、METALIAN(モントリオール)、THE TERMINALS(トロント)、LIFE CHAIN(ハリファックス)、THE RIPCORDS(モントリオール)、CHLOROFORM(オタワ)、SKULL FIST(トロント)、SILENT ORDER(オタワ)」

■強く印象に残ってるライヴはありますか?NYのROTTEN UKや、ANGRY SAMOANSとも共演したんですよね?

Tasha「いくつものインパクトのあるバンドと共演してきたけど、私はANGRY SAMOANSとINFEST。だってティーンエイジの頃から聴いてきたバンドよ。長年やっていて、多くの人々に影響を与えてきたようなバンドと私達が共演できるなんて、本当に感激だった。うん、やっぱり私はその2バンドだわ。TOKYO BLADEともブッキングして楽しみだったんだけど、キャンセルになっちゃった」

Jo「ROTTEN UKとは最高に盛り上がれるな。連中は本物のパンクスだよ!」

■ZEXは来年に東南アジア・ツアーを予定していますよね?どうやってブッキングしたんですか?

Jo「そう、2015年の2月に東南アジア・ツアーをやる。DIYパンクのネットワークの力でブッキングすることができた。日本もツアーしたいんだよ。誰か手伝ってくれる人がいればいいんだけど。パンク・ロッカーもヘッドバンガーも、日本にはカッコいい奴がたくさんいるからな!」

Gretchen「どのライヴに来てくれた人達もみんなが楽しんでもらえるようなツアーにできるよう頑張るわ」

■何か日本のバンドは知ってますか?好きなバンドとかあれば教えてください。

Tasha「私が好きなのは、ACUTE、DISCOCKS、THE 5,6,7,8's、GALLHAMMER、GAUZE、FRAMTID、LIP CREAM」

Jo「SKIZOPHRENIA、THE STICKYS、VESPERA、INTRUDERS、あと、ハードロック・マスターズ、G.A.T.E.S.!」

■最後に、インタヴューを読んでくれてる日本のパンク・ファンにメッセージをお願いします。

Jo「誰か、日本ツアーをブッキングしてくれよ!」

Gretchen「パンクとポルノは最高!ヤバいことには恐れず首を突っ込んでいきな。あと、ヴィーガン・アイス食べたい!」





KNAVE（ネイヴ）は2005年に活動を始めた大分拠点のトリオ・バンドである。今年7月にリリースした作品『Regeneration Of Darkcore』は彼らの定義だとファースト・ミニ・アルバムだが、本編10曲＋新曲デモ3曲の約30分のCDと2014年の別府市でのライヴを約26分10曲収めたDVDの2枚組で、ヴォリュームたっぷりだ。ハードコア・パンク、クラスト、グラインドコア、デス・メタル、ブラック・メタルが融合され、"Darkcore"を掲げるKNAVEの魅力が凝縮されており、個人的にもド真ん中の作品で心底ヤられてしまった。これはメールで質問を送り、Masashi（Vo）、Shinnosuke（Gu）、Shota（Dr）に回答してもらった文章である（無記名の回答はMasashiがバンドとしての発言で書いたもの）。訊きたいことがありすぎて質問数が膨大になってしまったにもかかわらず、ひとつひとつ丁寧に書いていただき、KNAVEの表現同様に誠実な姿勢が伝わってきて作品同様に打たれてしまった。内容も実に興味深い。ではノーカットの超ロング・インタヴューをどうぞ。

INTERVIEWED:行川和彦

■まず現メンバーに固まるまでの変遷を教えていただけますか。メンバー・チェンジが激しかったようでしたら当時のメンバー名を省略してそのことを簡潔にまとめて、現在のメンバーがKNAVEに入った時期を教えていただくだけでも結構です。

「2004年にメンバーが集まり当初はパンク・バンドとして結成、翌年の春から活動を開始しました。現在オリジナル・メンバーはVo.のMasashiのみで、2008年まで音楽性の変化やメンバーの流動が絶えず、思うように活動出来ない時期が有りましたが、2009年に現Gu.のShinnosukeが加入。2010年のBa.の脱退により3人体制となり、2013年に現Dr.のShotaが加入し、現在に至ります」

■結成当初はどういう音楽性でした？目指していた方向性は？ハードコア/クラスト、グラインドコア、デス・メタル、ブラック・メタルから影響を受けているようですが、そのへんの音楽スタイルを時期によって少しずつ取り入れていった感じなのか、それとも最初から融合していたのか、音楽的な変遷も含めて教えてください。

「結成当初はSOBUTやBALZAC、LAUGHIN' NOSE等の国内パンク・バンドの影響が強かったものの、メンバー・チェンジを繰り返す過程でDISCHARGEやDISORDER、EXTREME NOISE TERROR、DOOM等のUKハードコア・クラスト寄りのスタイルへ変化していきました。2008年までは方向性をハードコア・パンク路線としつつも、よりエクストリームな音楽を追及していく中でグラインドコアやデス・メタル、ブラック・メタルと出会った事でそちらのシーンも意識し始めるようになりました。2009年に現Gu.のShinnosukeが加入して以降、グラインドコアやブラック・メタルの要素が強まり、"ダークコア"というスタイルでバンドを一新しました」

■KNAVEとして特に影響を受けた/インスパイアされた/触発されたバンド、そしてメンバー個々が特に影響を受けた/インスパイアされた/触発されたバンドを、それぞれ具体的に教えてください。

「KNAVEとして影響を受けたバンドは時期により変化しています。初期：SOBUT、BALZAC、LAUGHIN' NOSE、SA、FUNGUS、RANCID、MISFITS、SEX PISTOLS、CLASH、RAMONES、DAMNED。中期：DISCHARGE、DISORDER、EXTREME NOISE TERROR、EXPLOITED、THE VARUKERS、FINAL CONFLICT、ANTISECT、DOOM、AMEBIX、ANTI CIMEX、DRILLER KILLER、FRAMTID、DISCLOSE、CONFUSE、BASTARD、G.I.S.M、悪AI意、WARHEAD、GASTUNK。現在：屍、NAPALM DEATH、NASUM、REPULSION、INSECT WARFARE、S.O.B、324、SWARRRM、ANNAL NATHRAKH、MARDUK、DARK FUNERAL、MAYHEM、DARKTHRONE、GORGOROTH、EMPEROR、SSORC、

CATAPLEXY。そのように、初期はパンク・ロック、中期はハードコア・クラスト、現在に至るまではグラインドコアやブラック・メタルからの影響を取り入れています」

Masashi(vo)「個人としても上記と同様です」

Shinnosuke(gu)「僕はジャンルの枠をはみ出すようなバンドが好きで、特に人間椅子はKNAVE加入前最初に始めたバンドの直接のきっかけにもなりました。今では活動していませんが、念仏ユートピアという名前でデス/ブラック/グラインドコアなどのサウンドで昭和アングラ世界観を表現するといったバンドでした。ギタープレイやステージに関しては元MAYHEMのBlasphemerやIMMORTALのAbbathのような邪悪で寒々しいコードワーク、MANOWARのJoey De Maioの力強いアクション、フォークシンガーの友川カズキ氏の破滅的なまでに激しいストローク、アコースティック・ソロでの遠藤ミチロウ氏の締め上げられるようなコーラス・ワークなどのプレイを、全て自分なりに解釈して取り入れています」

Shota(dr)「MATRYOSHKA、VAMPILLIA、CORRUPTED、CHOUCHOU、高木正勝。良く聴くやつでまとめました」

■KNAVE独自のジャンル名とも言える【darkcore】という言葉の由来を教えてください。

「現在のKNAVEの音楽性を既存のジャンルで形容するならば、ハードコア・パンク、クラストコア、グラインドコアを主軸にブルータル・デス・メタル、ブラック・メタル等の要素を取り入れたものです。その根底として"より重く""より速く""より暗く"に重点を置いた上でジャンルに囚われない独自の音を目指し、自他共に印象を強く見せる為に命名しました」

■【darkcore】についてです。オフィシャル・サイトでも"KNAVEが独自に掲げるExtreme Style。hardcore、crust等から来る「メッセージ性」、grindcoreの「破壊性」、death metalの「残虐性」、black metalの「暗黒性」、これ等を取り入れた「より重く」「より速く」「より暗く」独自の音を追求する。"と掲げていますが、こういうことは活動当初から標榜していたのですか？途中からだとしたら、こういう方向性に至るようになった経緯を教えてもらえますか。前記の質問の回答とダブるようでしたら、簡潔に答えていただいて構いません。

「"ダークコア"というスタイルを掲げ始めたのは2009年からになります。音楽性の変移の大きな流れに関しては前述の通りですが、より具体的に述べますと東京の(バンドの)屍の影響が特に大きいです。速くて攻撃的なハードコアなサウンドの中に陰鬱な旋律を絡め、人間の内面に潜む憎悪や絶望を表現した歌詞とヴォーカルを乗せた屍の世界観は当時の自分の精神状態と共感出来る部分が非常に多かったです。その後、屍から感じ取られた"暗さ"や"激しさ"を求める中でグラインドコアやブラック・メタルと出会い、更には2007年当時、地元で多くのデス・メタル・バンドが活動していた事にも影響され、自分の中での音楽性が徐々に広がっていきました。2007年～2008年頃に「Bullshit Everyone」等のそれらを意識した楽曲が出来始め、2009年に現Gu.のShinnosukeが加入後にブラック・メタルの要素をより強く表に出す為にコープス・ペイントを始め、その時点でバンドの方向性をはっきりとさせる為に、自分達を"ダークコア"と標榜するようになりました」

■そういう定義の【darkcore】を名乗るようになったのは、クラストやデス・メタルなどそれぞれの特定のジャンルに所属するような感じになることを拒む気持ちもあったのですか？既成のジャンルに留まらない意志も感じられます。

「ここ数年の大分のエクストリーム・シーンではハードコア、デス・メタル共にバンド数が少なく、特定のジャンルではライヴ・イヴェントが成り立たない為、他のジャンルと共演する機会が多いのが現状です。しかし、良くも悪くもそういった環境で育った事から自分達の中ではジャンル間の壁がほとんど無く、それぞれの良い部分を楽しむことが自然に出来る様になったと思います。その中で自分達がバンドを続ける上で特定のジャンルや既成のジャンルに囚われる事自体が不自然だと感じた為、ジャンルという概念を乗り越え、独自の音を追及する意味で"ダークコア"と名乗っています。ただし既成のジャンルを拒絶するのではなく、それぞれのジャンルで通用したいという気持ちが大きいです」

■それぞれのジャンルのスタイルをそのままやるのではなく、自分たちがイイと思うところをブレンドしている感じですかね。それぞれのジャンルが、分かれているようで実は接点があってそこを凝縮しているようでもありますが。

「仰る通りです。激しく攻撃的である事は上記のどのジャンルにも当てはまる部分だと思います。更に思想的に共通する部分や、それぞれの特色を自分達の中で解釈し表現しています」

■昔からスウェーデンのバンドをはじめとして他にいないとは言いませんが、世界的に見てハードコア/クラスト、グラインドコア、デス・メタル、ブラック・メタルを混ぜた感じのバンドはそれほどいないと思います。元々、個々のジャンルにこだわる発想はなかったのですか？

「個人的にはそういったクロスオーヴァーしたバンドは好きですし、個々のジャンルを追及するバンドも非常に格好良く、大好きなバンドばかりです。結成当初は完全に国内パンク路線でしたが、バンドが変化していく中で自分達が目指すスタイルを確立させる為には既成のスタイル、一つのジャンルで固定するのは得策ではないと判断しました」

■好きなジャンルを既成概念に囚われずに素直に自分たちの直観を信じて融合しようとした感じですか？

「仰る通りです。ステージも楽曲も理論ではなく直観でやっています」

■たとえば、いわゆるNS(national socialism)系のブラック・メタルはクラストと思想的には真逆なところも多いですが、どちらにも惹かれる部分があるということですね。僕も両方好きなので気持ちはわかりますが、KNAVEとして、どう折り合いを付けているのか、KNAVEとしての言葉で語っていただけるとさいわいです。

「思想に関してはハードコアやクラストからの影響が強いです。ブラック・メタルはサタニズム(悪魔崇拝)やNSブラックの国家社会主義、民族社会主義の印象が強いですが、共感できたのは上記の思想ではなく、宗教支配や統率されたシステム・権力に対するアンチズムや無神論などの部分です。これはパンクにも共通するアティテュードだと解釈しています。確かに歴史の上で宗教が人を統率するのに必要であった時代も有りますが、同時に侵略戦争などの血みどろの歴史も存在しますし、権力や政治とも繋がっています。宗教間での争いも絶えないにも関わらず正義を振りかざす姿勢は偽善に他ならないと考えています。そういった意味でも宗教や権力に対しては徹底的に異を唱えるのが現代の無神論であると考えていますし、KNAVEとしても重点を置きたい思想です」

■歌詞の内容で初期から変わった点はどういうところでしょうか？それとも基本的には変わってないですか？

「初期と比較して大きな変化は有りませんが、抽象的な表現が増えたと思います」

■歌詞も"一つのジャンルみたいなもの"に留まらず、特定の対象を糾弾するような調子ではないですよね。ナイーヴでもないですし。音や曲と同じくクラストとデス・メタルとブラック・メタルのニュアンスが混ざったようにも思えます。歌詞を書くにあたって意識していることを教えてください。政治的なニュアンスを

滲ませつつ自分自身や人間そのものに向き合っているようにも感じる歌詞なので。
「権力や宗教に対するアンチテーゼもありますが、歌詞を書く上で最も重視しているのは“人間性”の否定と肯定です。自身や他人に対する負の感情や、行き場のない不安、総ての人間の中に有る善も悪も受け入れ人間の本性に向き合った上で、自身に対して嘘偽りのない精神を築き上げる。そういった内容を意識しています」
■歌詞の大半は英語ですが、曲によって日本語も使っていますね。そのへんは、曲に合うように使っている感じですか？あと、なるべく英語、もしくは、なるべく日本語にしたい、というような気持ちはありますか？
「先ず日本語で歌詞を書く上で、曲調をあまり意識していない為、英語に直す時点で曲に合わせています。その為英語曲が多くなっていますが、曲によっては日本語の方が合う場合はそちらを採用しています」
■丸で囲った“A”と“E”もジャケットにデザインされていますが、その意図は？そのデザインにはアナーコ・パンクからの影響も感じられますが、CRASSやその影響下のバンドからの影響はありますか？あるとしたらどういう点でしょうか？
「多くのパンクスがそうである様に、CRASSのスタンスには多大な影響を受けています。DIY精神やアナーキズムは最もパンクらしい表現方法であると解釈しているので、音楽性が変化しようともその初期衝動を忘れない意味でもアートワークに使用しています」
■みなさんの服装や髪形やメイク、CDのアートワーク、あとロゴなど、ヴィジュアル・イメージも大変大切にしている印象です。そういったことも一種の自己表現と考えているからだと思いますが、実際そういう意識は持っていますか？
「バンドとは音だけではなく、視覚に訴える部分が非常に大きいものだと思います。ヴィジュアルやアートワーク、パフォーマンスの全てが音に対しても直結していると考えています」
■オフィシャル・サイトのギャラリーのメンバー写真を見ると、初期からMasashiさんはずっと派手なヴィジュアルですが、そういうメイク、髪型、服装をするようになったきっかけを教えてください。
「やはり、パンク・バンドのファッションに憧れていましたし、今でも一番好きなスタイルです」
■いわゆるロンドン・パンクから始まって、イギリスや北欧や日本の80年代初頭のハードコア・パンクを踏まえて、VENOMや初期SLAYER、伝統的なブラック・メタルの流れを感じるヴィジュアルです。ヴィジュアルに気を使うようになるにあたってインスパイアされた人やバンドも教えていただけるとさいわいです。
「やはりDISCHARGEからの流れを経たハードコアやクラストの影響が大きいです。ヘアスタイルはMISFITSやBALZACの影響もありますが、ルックス全体としては特筆して影響を受けた人物はいません。コープス・ペイントや腕のロング・スパイク等は勿論ブラック・メタルからの影響ですが、初期GASTUNKのBAKIなどの80年代パンクのヴィジュアルも一因です。パンク・ハードコア・メタルそれぞれの邪悪で攻撃的な要素を自分の中で整理して出来あがったものだと思っています」
■いわゆるヴィジュアル系や映画に限らず、ヴィジュアル要素は大切だと思います。それはKNAVEとは逆の意識だとは思いますが、いわゆるアメリカン・ハードコアのカジュアルなスタイルもそうだと思います。KNAVEは服装やメイクも一種の自己表現と思ってずっと実践しているように見えますが、実際そういう意識はありますか？もしかしたら単に目立ちたいだけという気持ちもあるのかもしれませんが。
「コープス・ペイントを施し、鋲ジャンを着るスタイルにはハードコア、ブラック・メタルの双方から賛否両論ありますが、個人的にパンクの原点は自分のオリジナリティを追及する事だと考えてます。現在、ジャンルとして定着している中で“これはパンク”“これは違う”という閉鎖的・排他的な意識が強くなっているように感じます。確かに閉鎖的で排他的な一面が硬派な印象を強め、格好良さを際立たせるのも事実です。ですがやはりパンクは自由であるべきですし、新しいスタイルを追及して確立していく事が面白いと思います。そういった意識を持って自分達なりに自由に表現しています」
■80～90年代前半までぐらいのバンドは、雑誌/ファンジンやレコード/CDのアートワークなどの限られた情報の中でヴィジュアル・イメージやファッションも模索して自分たちなりに取りこんだ感じだったと思います。しっかり作られたオフィシャル・サイトからも察せられるようにKNAVEはインターネットも駆使したバンドだと思いますが、ネットの情報を要領よくミックスした感じではなく80年代前半の日本のハードコア・パンク・バンド、特に東京以外のバンドを思わせるプリミティヴな過激さを追求したファッション・センスとステージ・アクションを感じます。メンバーのルックスや作品のアートワークも含めて特定のジャンルの様式美に囚われず、ある意味クレイジーなセンスを感じます。ステージでのルックス（普段もそうかもしれませんが）や作品のアートワークで意識していることはどんなことですか？
「メンバーの見た目に関しては先述の通りです。アートワークには音楽性やメッセージを表現する事を意識しています。クラスティーかつサタニックな意匠が主ですが、今回（のミニ・アルバム『Regeneration Of Darkcore』）だと“再生”を意識して折込みのアートワークには胎児のポーズをとった白骨死体を見立てに使用したり、テーマに沿ったデザインを意識しています」
■ステージでの服装や髪形、メイクなどについて、かつてGUITAR WOLFが言っていた発言の「革ジャン、革パンでキメればどうにかなる」じゃないですが、服装や髪形などビシッ！とした格好をするには気合いがいるし、そういう格好をするだけで気合いが入るというのもあると思います。KNAVEのみなさんはメイクも含めてかなり手が込んでいそうなので余計そう思いますが、実際どうでしょう？少なくてもKNAVEのステージでのルックスは仕込みにも相当時間と気合いが必要だと思いますので。
「ライヴ、ステージは日常とは異なる空間だという意識があります。意識を切り替える上でもメイクや衣装は重要な要素ですし、やはり気が引き締まります。何より一番好きな格好ですので、手を抜きたくない部分です」
■『Regeneration Of Darkcore』のDVDでMasashiさんが着ているレザー・ジャケットはビスや釘がかなりの数打ち込まれていますね。自作なのですか？
「勿論自作です。自分でペイントし、鋲を打っています」
■そのレザー・ジャケットにはVARUKERSがペイントされていますね。普段着るものにペイントするということはかなり思い入れがあるバンドと想像できて、KNAVEの音楽性からするとVARUKERSは微妙に意外に思えるストレートな印象のバンドですが、どういったところが好きなのですか？
「現在の音楽性とは確かに異なりますが、自分がハードコアを通ってきた中で欠かせないバンドの一つです。DISCHARGE直系のバンドの一つですし、『ANOTHER RELIGION, ANOTHER WAR』以降の作品やアートワークには特に影響を受けました。基本的にストレートなリフを多用したバンドが好きなので、VARUKERS以外にもEXTREME NOISE TERRORやANTI CIMEXも思い入れが強いバンドです」
■同じくそのレザー・ジャケットには“Fuck The World”ともペイントされていますね。

そのフレーズはやっぱり自身の基本的なメッセージですか？CHAOTIC DISCHORDというバンドのデビューEPのタイトルでもありましたが。

「CHAOTIC DISCHORDやDRILLER KILLERなどは作品のタイトルにもしていますが、基本的にパンクのアティテュードだと考えています。その意識を常に持つ意味でペイントしています」

■Shinnosukeさんのリスト・バンドに長い釘を無数に打ちつけたようなものもありますが、あれは自作ですか？参考にしたバンドがあったら教えてください。

Shinnosuke(gu)「衣装は全て自作です。釘リスト・バンドや釘ニーパッドに関しては初期SLAYERのKerry KingやIMMORTALなどの衣装を参考にし、より過激さを追求してこの形になりました。またハーネスはフェティッシュ/ゴス系ファッション・ブランドのZana Bayneの作品からのインスパイアです。ハーネスの前面にアレイスタークロウリーの六芒星と背面にカバラの樹をモチーフにしたデザインは悪魔的で神秘的な力の象徴を表しています。またクロウリーが後年バフォメットを自称していたことから、邪悪さのシンボルであるバフォメットそのものを自分なりの解釈で体現しようとしました」

■そういったメンバーのルックスはVENOM～初期SLAYER～初期デス・メタル～ブラック・メタルと初期UKハードコア・パンクのミックスのように見えますが、実際そのへんのバンドのルックスを意識したところはありますか？

Shinnosuke(gu)「メタルやハードコア・パンクからの影響はもちろんありますが、ゴスやフェティッシュなどのファッションの要素も取り入れてます。メタルやハードコア・パンクのルックスの融合というよりはディストピア的世界観、具体的に言うと北斗の拳やマッドマックス2のような無秩序で破壊的暴力的な世界の表現を意識して様々なものを取り入れた結果かもしれません」

■『Regeneration Of Darkcore』のDVDで観られるライヴも当時（昔）の日本のハードコア・パンクの空気感が漂っていますね。ヴァイオレンスをしなくても、気が引き締まる緊張感があります。いわゆる暴力行為をしなくても緊張感は高まると再認識させられますが、ライヴで意識していることはどんなことでしょうか？みんなが一つになって楽しむというノリとは違う印象で、そのへんの80年代前半の日本のハードコア・パンクに通じると思ったのですが。

「暴力は怒りや狂気の表現方法として非常にストレートで伝わりやすいものだと思います。当時そういった表現がパンクを周知させた一因だと思いますし、事実、自分もその影響を受けています。何処か殺伐として緊張感のある空間に魅力を感じますし、自分達のステージでその空間を作り出す事を常に意識しています。しかし飽くまでバンドとしての表現を行う上では暴力には限界が有りますし、我々が伝えたい事そのものではありません。多くのバンドと同様に、そういった模索を繰り返した結果出来たスタイルだと思っています」

■話は前後しますが、ヴォーカル・スタイルは初期も今と基本的には同じでした？変わっていったとしたら、どういう感じででしょうか？ブラック・メタルな金切り声とデス・ヴォイスの組み合わせの発想は、どういったところから生まれました？クラスト的な曲にこのヴォーカルは、ある種ありえない発想で痛快かつインパクト強いです。

「ヴォーカル・スタイルは初期とは全く異なります。国内パンクからの影響が強かった2005年～2006年頃はメロディラインが有りましたが、2007年頃からハードコア・クラスト系の歌い方に変化し、グロウルやガテラル、金切り声を徐々に取り入れていきました。同時期にKNAVE以外でデス・メタル系のコピー・バンドに何度か参加していた事も大きな要因ですが、UKのブラック・メタル・バンドANAAL NATHRAKHや東京のゴア・グラインド・バンドABORT MASTICATIONからの影響が



最も大きいです」

■『Regeneration Of Darkcore』のCDの1曲目「再生」のSEみたいな音声は何かから引用したのですか?差し支えなければ教えてください。

Shinnosuke(gu)「逆再生した般若心経に航空機墜落事故とビル爆破解体事故の現場の音声、さらに新生児の産声をミックスしてます。多くの人間が死んだ場面と一人の人間が生まれた場面をリンクさせることによって仏教的輪廻転生観を表現しています。また人が死ぬ瞬間の叫び声と生まれた瞬間の叫び声により、死と生の間にある"叫び"そのものを浮き彫りにする狙いもあります。"叫び"とは僕らの表現方法の一つでもありますし」

■『Regeneration Of Darkcore』のCDはアルペジオを使った静かなパートもいくつか設けていますね。その発想の基はどこからでしょうか?ミニ・アルバムという意識らしいですが、アルバム全体の流れの静と動の対比を意識して、ドラマチックな流れで進める一環という感じですか?

「曲の収録順に関しては仰る通り、アルバムの流れを意識して作っています。静から動への移り変わる瞬間、無常感が怒りに変わる様子を表現し、ハードコアなどに見られる泣きの要素を曲に取り入れています」

■スタジオ・レコーディングではShinnosukeさんがギター以外にベースの音を重ねているようですが、『Regeneration Of Darkcore』のDVDなどの映像から察するに、現在基本的にライヴではベース・アンプを駆使してベースの音域も出している感じのようですね。その発想はどんな感じで出てきたのですか?

「元々2010年まではベースも在籍していたのですが、脱退後なかなか後任が見つからず、やむを得ず始めたものです。ただ、ベースレスのスタイルというのも同郷のゴア・グラインド・バンドVISCERA INFESTを始め多数のバンドが行っていましたし、自分たちとしては特別だとは思っていません」

■『Regeneration Of Darkcore』の体裁やリリース方法などにも打たれました。まず、666枚(666セット)限定にした、その666という数字に対するこだわりについて聞かせてください。

「深いこだわりはありません。前回のデモと同様、500枚程度の数量で考えていたので単に邪悪な雰囲気を出す為に666枚としました」

■そのうち400枚(400セット)をMCRカンパニーにディストリビュートをまかせたようですが、MCRに一部の枚数の配給をまかせた理由を教えてください。MCRはレーベルを始めた80年代前半から日本の地方のバンドをサポートしてきていますが、そういったことも意識してのことですか?

「大分のバンドも含め、MCRでは多くのバンドがリリースされていますし、屍をはじめ、自分が影響を受けた作品が最も多いレーベルです。デモの流通先を探していた際に一番初めに委託させて頂いたのですが、全く無名で面識が無いのにも関わらず、非常に丁寧に対応して頂きました。その後一度お会いした際もとても良く迎えて頂き、そういった経緯から最も信頼がおけるレーベルだと判断し、流通を委託させて頂きました」

■『Regeneration Of Darkcore』をCDとDVDの2枚組にした理由も教えてください。アルバムとして作りこんだ作品と、ライヴ映像を一緒に感じてほしい意図もありますか?

「仰る通りです。また、アルバム製作時にエンジニアの方との打ち合わせの中でライヴ・レコーディングの話が上がった事も要因です。様々なタイミングが合わさってこのような形でのリリースを決めました」

■『Regeneration Of Darkcore』はパッケージ全体の作りも素晴らしいです。こういう系統の日本のバンドには少ない紙質にも気を使った二つ折り紙ジャケットでのリリースで、裏面がポスター状の六つ折り歌詞カード封入というところにも、自己表現に隅々まで気を使っていることが感じられます。やはり単に音が聴けるだけでいいわけでなく、ヴィジュアルやジャケットの手触りも大切で五感を刺激するリリース作品のパッケージを意識しているように思えますが、どうでしょう?

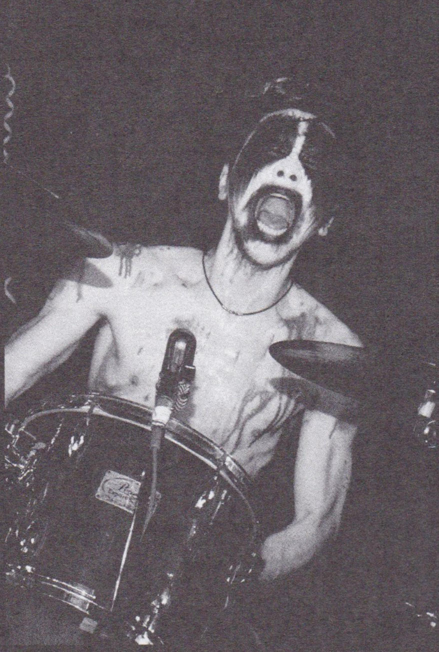
「アートワークは音や歌詞だけでは表現できない部分を自由に描ける手段だと思っています。また、音を聴く前に触れる部分でも有るのでバンドの第一印象としては重要な部分です。その為、KNAVEでは総てのアートワークを自身で行っています。製作費の関係等でアートワークを簡略化させた作品も見かけますが、個人的にはこの部分は妥協なく表現していきたいと考えています」

■本編のCDも粗削りながらこういう系統の日本のバンドのCDに陥りがちな立体感に欠けた平板な音の仕上がりになってないですし、DVDのライヴ映像もしっかりした作りになっていて、それでも税込1000円で売る心意気にも打たれました。いわゆる"安かろう悪かろう"という感じのものと一線を画したビシッ!とした作りですが、これだけしっかりした作りにしていて1000円で売ることにした意思みたいなものを聞かせてもらえますか?

「前回のデモは、とにかく無名だった為インパ







クトを最優先して25曲入り¥500で発売しました。結果として予想以上の反響が有りましたが、今回の作品では収録曲数や前回のデモと重複する曲も有ることから、一般的な価格ではインパクトが弱いと感じた為、あまり値段を上げたくなかったのが大きな要因です。最終的に上記の経緯でライヴDVDを追加で収録する事となり、この価格に決定しました」

■そのへんはリリース方法の話にもつながると思います。MCRカンパニーにディストリビューションで協力してもらっていますが、レーベル名が見当たらないとはいえ基本的にリリース自体は自主制作ですか？レコーディング代やプレス代、ジャケット制作費用なども、基本的に自分たち持ちですか？

「リリースは自主になります。製作費も自分達持ちです。MCRとは委託流通という形でディストリビュートして頂いています」

■そういう感じでの自主制作だとしたら、やはりDIYの制作姿勢に対するこだわりも感じますが、実際はどうでしょう？あまり他者の手を借りたくない気持ちもあります？

「基本的には自分達で作った方がイメージに近いものが作りやすいと思います。しかし、知識や技術では専門職の方には必ず劣りますし限界が有ります。今回は大分のRiz-LABELのエンジニアである土屋さんとじっくり時間を掛けて製作させて頂きました。結果的に双方の意見が生かされた納得のいく内容に仕上がったと思います。流通に関してもそうですが、必ずしも他者の手を借りない事が正解とは考えていません」

■『Regeneration Of Darkcore』のDVDのライヴ映像は"Sabbat Ⅳ oita city extreme gig"とクレジットがありますが、それはライヴ企画名ですか？KNAVEのシリーズ企画ライヴの一環のようですが、その企画はどういう系統のバンドと一緒にライヴをやっているのですか？

「2012年から地元大分で行っている自主企画になります。地元からはハードコアやゴア・グラインド、メタル・バンドと共演する機会が多いです。県外からのゲストは主にグラインドコアが現在は多いですが、将来的にはブラック・メタル等のバンドも招致したいと考えています」

■一時期よりはかなりジャンル間で重なってきてはいますが、バンド数が多いだけに逆に東京では、やっぱり似た系統のバンドが固まりがちで、たとえばハードコアも特定の系統のバンドでのライヴが多いです。パンクもハードコアもメタルもその他のジャンルも関係なく対バンすることが普段は多いですか？だとしたら、そういう環境ならではの"雑種感覚"みたいなものが育まれるというのは感じますか？

「大分では先述の通り他ジャンルで対バンする機会が多いです。その為ジャンルに対する隔たりはほとんど有りませんが、他の大分のバンドの殆どが個々のジャンルをしっかりとリスペクトしていて、各々のシーンを理解し合っていると感じています」

■大分も以前から様々なバンドが活動してきていて、こういう音楽のシーンが育まれてきていると思いますが、今現在、実感としてどう思っていますか？パンク/ハードコア、エクストリーム・メタル、その他のバンド、様々な人が活動していると思いますが、シーンみたいなものを感じていますか？それとも、シーンみたいなものがあるかわからないけど、刺激的なことをしている人が色々な系統にいると感じていて、一緒にライヴをやる機会がある感じですか？

「大分だけではシーンは物凄く小規模ですが、密度は濃いと思います。ジャンルの隔たりを超えてライヴ以外で交流も有りますし、仲間意識は強いと感じています。エクストリーム・シーン自体、近年は若い層が少ない事が問題視されていると思いますが、田舎は特に顕著です」

■オフィシャル・サイトなどに2013年の大分での路上ライヴの映像もアップされていますね。80年代から東京でも路上でパンク/ハードコア・バンドのライヴもありましたが、少なくても今東京でこういう系統の路上ライヴはほとんどないと思われます。ギター弾き語り等ならともかく、大通りの歩道でこういう系統のバンドがライヴをやることはほとんどありえないのでインパクトあります。しかもビシッ！としたヴィジュアルでやっていますし。このライヴをやった動機、きっかけみたいなものを教えてください。ドラムやアンプなどの機材も設置して、よくやれたな…と思いもしますが、特に許可を得ずにゲリラ的なライヴだったのですか？

「路上ライヴについては良く尋ねられるのですが、これは自分達主体ではなく、当時大分市の都市開発の一環として路上パフォーマンスやカフェ、展示スペースを設けて活性化を図るといった趣旨で行われたものです。そのバンド枠を大分のイヴェント業者が請負い、出演バンドを探す中で自分達が普段利用しているスタジオに声が掛り、1週間前のオファーでしたが、出演可能なバンドが複数出演しました。ゲリラと言った方が格好良いのですが…(笑)」

■勝手な想像として、やはり東京とは比べ物にならないほど活動を続けるのは大変と思ったりもします。だからこそという感じで、ハングリー精神みたいなものが活動継続のモチーフになっているところはありますか？

「東京と違う意識は特に有りません。確かに大変な部分もありますが、地元でも多くの先輩方が続けていますし、結果を残してきたバンドが多いので、それに追いつけ追い越せという気持ちを常に持ってやっています」

■拠点を大分から移す考えは今のところないですか？ないとしたら、大分に対するこだわりゆえでしょうか？

「拠点を移す考えは有りません。大分でのシーンというか、バンドを通して繋がってきた仲間は代えがたいものです。ただ、活動範囲としては大分に留まらず、様々な場所でライヴしていきたいです」

■海外のシーンとのやり取りはしていますか？されているとしたら具体的に教えていただけますか。

「現在、海外とのやりとりは有りません。今後ディストリビュートの機会が有れば実践していきたいです」

■『Regeneration Of Darkcore』のCDのシークレット・トラック的に追加されているデモ音源の3曲、より激烈になっていますね。今後の方向性を示唆しています？

「ドラムが交代後に作った曲でもあります。これまでは主にVo.のMasashiが楽曲を担当していましたが、今作よりデモ曲を含めてGu.のShinnosukeが作曲した曲も収録しています。今後の方向性として、より広い視野で"ダークコア"を表現していくつもりです」

■今後の抱負を語っていただけるとさいわいです。具体的なリリース予定やライヴ予定でも構いません。

「リリース予定は有りませんが、曲が溜り次第レコーディングはしたいと考えています。ライヴは11月23日に佐賀でCHOKEの15周年企画に出演させて頂きます。2015年の春には大分にてKNAVEの10周年ライヴも予定しています。宜しくお願い致します」

■最後に、KNAVEというバンド名の由来を教えてください。あまり一般的に使われない言葉なので、込められた思いも含めて教えてください。"悪党、ならず者"という意味合いでKNAVEの表現にピッタリで、善人や正義の味方みたいなのとは違うプリミティヴなパンク・アティテュードを感じさせますが、そういった姿勢は大切にしていきたい感じですか？

「仰る通りで、悪漢、ならず者というパンクなイメージを意識しています。また、覚えやすく1つの英単語である事、5～6文字である事を条件に初期Ba.が提案したものです」

TOM AND BOOT BOYS VS BEER BELLY

UP THE PUNX!

新旧ポゴ対談

NEW AND OLD GENERATION POGO CONVERSATION

リリース・ラッシュにイヴェント開催、更には自身のバンドTOM & BOOT BOYSではアメリカ・ツアーも敢行し(P2から掲載)、この数年来とっても活発な今村さん(TOM & BOOT BOYS[Vo&Gu]/ASUKA AND THE BUM SERVANTS[Gu]/POGO 77 RECORDS)と、先日1st 7インチ「SUPER NONSENSE POGO ATTACK!」を自主でリリースした期待の新星BEER BELLYのきづくさん[Vo&Gu]による対談～合同インタヴュー的な記事でございます(終盤からBEER BELLYのマイさん[Ba]も参加)。
当日は新宿・歌舞伎町の居酒屋に集まって頂いたのですが、例によって泥酔して収拾がつかなくなるかと思いきや、今村さんは風邪で完全にシラフ状態。そのため発言が大層マジメです。ドランク度ゼロという、ある意味レアな新旧ポゴ対談、どうぞお楽しみ下さい。



■ここ数年、今村さん調子いいですよね。リリースもイヴェントもバンバンやってて。

今村「そうなんですよ。理由がいくつかあるんですけど、まずは妻が応援してくれている。僕にはパンクしかないので、パンクをやっていないと死人みたいな顔になっているって、妻にも言われたんですけど。こう、忙しければ忙しいほどエナジーが湧いて来て頑張れるから。あとは、若い頃は酔っぱらってリリースを延ばしたりディストロを怠けたりしていたんですけど、ここ5、6年はリリースもそうだけど、すごいディストロを頑張ってて。そうするとちゃんと数字もついてきて、全部売れても赤字の作品もあるけど、ちゃんと廻せていけているから。それはマメに買ってくれているお客さんとかディストリビューターの方々とかパンクのお店のおかげかなと思っていて。それを肝に銘じて頑張ってる。…超マジメなんだけど(笑)」

■すばらしい(笑)。

今「若い頃は本当にいい加減だったから。あれはあれで、TOMのドランク度っていうか、よかったんですけど、今は恩返ししたいのが強いので。鋲ジャンとか、自分が育ってきたパンクに対して。そんな感じですね。でもライヴでは記憶なくしていますけどね(笑)」

■レコードが売れないとか、景気の悪い話しばかりの中、反比例するかのように今村さんドンドンやってますよね。

今「でも、プレス数はバンドによって違うけど、400～600枚で。現在はほとんど売り切れてますけど、まぁ、出して2ヵ月か3ヵ月でなくなるくらい。日本で7割か6割で、海外で3割か4割が売れている感じ。で、面白いというか、知っている現象でしょうけど、アメリカのパンクスはCDを絶対に買わないから。極一部、100人中1人買うか買わないかくらいで。でも日本ではCDのほうが売れるのかな?最近、出していないから分からないんですけど今度実験で、自分のバンドなら実験できるので、TOMのベスト盤をCDで出してみようかなと。どのぐらい動くかを。でもレコードのほうが好きですけどね、個人的には(笑)」

■新バンドも始められて。ASUKA AND THE BUM SERVANTS。

今「新バンドはドラムのシンちゃん、あと元BEER BELLYのASUKAちゃんに機会を作ってあげようかなと思って。シンちゃんはやろうとしていたバンドがナシになっちゃっていたから、ドラムも一から始めて、今はもう叩けるようになっているし。え、暑苦しい?」

■なんか世話焼きのおばさんみたいな(笑)。

今「そうそう、本当にそんな感じ。だから僕は新しいバンドをどれだけやれるか分からないけど、もっていけるところまでもっていこうかなと」

■女性ヴォーカルというのも初めてですよね。

今「うん、初めて。あのルックスですからね。言い方は悪いですけど、リキさん(EXTINCT

GOVERNMENT)と僕がいるのでネーム・バリューはあるし、その分ちゃんとしたものを作らないと"何だこれ"となるので」

■どんな音ですか?

今「そうだな、UK82+ポゴ・パンク」

■そのまんまですね(笑)。

今「でもTOMではないですね。僕は極力、曲作りにはタッチしないようにはしている」

■誰が主に作っているんですか?

今「ドラムのシンちゃんとリキさん。僕も1曲くらいは作っているかな。でも僕がやるとどうしてもTOMになっちゃうので」

■初ライヴ(2015年1月10日〜11日/新大久保EARTHDOM)を大きなイヴェントにして。

今「そう。僕がレーベルと企画をやっている強みなんですけど。僕は2、3年一生懸命地道にやってからリリースするっていうタイプではないので、そういうバンドでもないから、勢いで」

■そのライヴでまたトレーディング・カード(パンクスがプリントされたオリジナル・トレカ)を配るんですか?

今「結構色んなバラまきをやりましたけど、これが一番お客さんが楽しんでいたような気がしたので、しばらくはお客さんの反応を見ながら続けようかなと」

きづく「ノリさんのなら、今持ってますよ。(ライヴで行った)栃木でも欲しい欲しい言われて」

今「怪獣カードを意識して作ったんですけどね」

■アイドルからじゃないんですね。

今「あ、違います。僕アイドル嫌いですから」

■パンクの間でも何だか流行ってません?

今「全く好きじゃないです。申し訳ないです。すみません」

■謝るところじゃないです(笑)。アメリカ・ツアーに関しては別で原稿を書いて頂くので軽く感想みたいなのだけ。

今「本当、ソールド・アウトばかりだったんですよ。ボストンの会場とかキャパが150人くらいだったから、(狭すぎて)無理だって感じだったんですけど。それには理由があって、(一緒に廻った)WHO KILLED SPIKEY JACKET?が(他の会場から)出禁をくらっていたんですよ。凄いですよ、もうライヴがメチャクチャ。それで見られないお客さんがたくさんいたから、申し訳なかったなって。ニューヨークは350〜400人くらいは来たのかな。面白いのが、ニューヨークのお客さんは洗練されてて東京みたく全身黒で、20代から40代まで。ボストンはグチャグチャ、僕らみたいな。WHO KILLED SPIKEY JACKET?は(UK SUBSの)「Warhead」をパクったジャケのシングル、「Gluehead」が850枚プレスですからね。すごいですよ。ニューヨークでもWHO KILLEDは出たんですけど、客席でデカイ花火を打ち上げて客電があがって会場の店長が激怒して。そりゃ激怒だよね。火事になるかもしれないし、お客さんも何人か火傷しているし。面白いけど、それが許せる人はいいけど、真面目なパンクスもいるからね、僕は好きだけどやり過ぎかなって(笑)」

■POGO 77からのリリース予定も目白押しで。直近がBEER BELLYのカセット(今年の8月にイタリアのTHE DEFECTIVESとのミニ・ツアーで販売した)の再発。

今「おかげさまで、好きなバンドがみんな一つ返事ですからね。3日間のツアーでこいつらも、あ、ごめんね、こいつらなんて言って。ツアーで、ちょっとでも1万円でも2万円でも回収できるようにと思って。BEER BELLYは7インチを300枚売って、海外には90枚流したんですけど、でもまだ欲しい人がいっぱいいるから、(ツアーのときに持っていった)テープは50本だったけど、(再発すれば)7インチくらいの数は売れるだろうから、それでギャラを渡そうかなと。…暑苦しい(笑)?でもそうやって恩を返さないとって。で、BEER BELLYを出して、プレスに廻しているのがBLACK AND WHITEとRECONSIDERATION。まぁ、BLACK AND WHITEはテッパンだと思うんですよね」

■RECONSIDERATIONは若いバンドですよね。

き「僕らと同じくらいで、ヴォーカルは2歳下ですね」

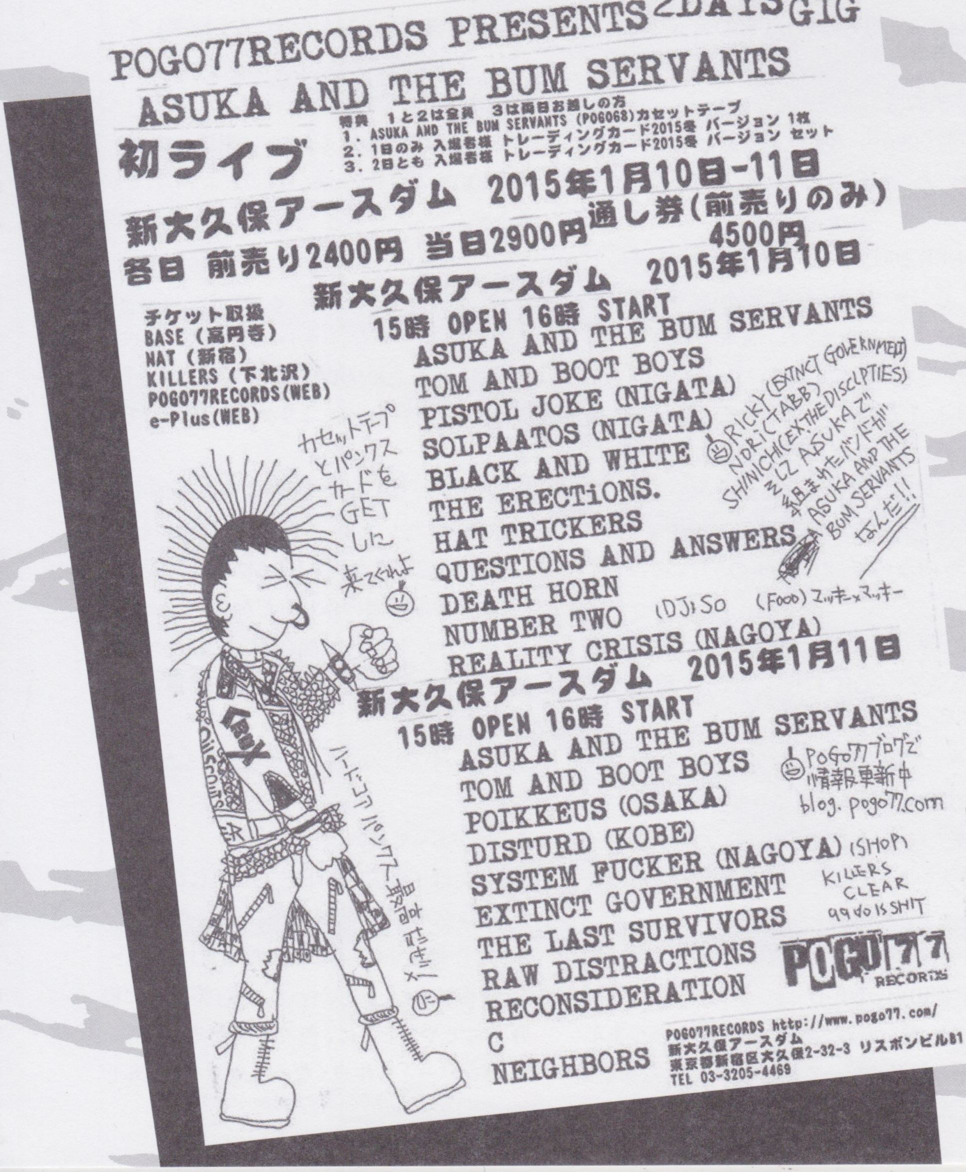
今「音的にはもう僕好みで、格好も僕好み。音はCONFUSEとCHAOS CHANNELとSWANKYSを足した感じ、かな。ちょっと鼻にかけた、ニラくん(CHAOS CHANNEL)みたいな歌い方で。音は単純なCONFUSEみたいな。大推薦ですね。けどそのくらいかな、あとはさっき言ったTOMのベスト盤も出ますけど」

■気になっていたのが、BEER BELLYの7インチをPOGO 77から出さなかったのは、あえて?

今「きづくくんから、"自主でやりたい"って聞いていたので、僕からは言わずに。その代わり掩護射撃はしてあげるねとは言って」

■今村さんが「いいよ、出してあげるよ」って言うのは簡単ですけど。

今「そう、だから一回はね、勉強になるから。



流れをつかんでほしかった。でも気合い入ってますよ、20歳違うから、色々あるけど、僕が若い頃よりもよくやっていると思います。ギターもうまいし」

き「(笑)」

■今村さんが42歳で、きづくさんが。

き「24になりました」

今「よくやったよ。売れてよかったよ。これで大コケしたら悲しいですもんね」

■今村さんが少しずつ、表舞台から裏方に徹しようとしているようにも感じますが。

今「それはあえてですけど、半年に一回は2 DAYS・3 DAYSの企画を、それは僕がやれる限り続けていきますね。POGO 77はアンダーグラウンドでは知名度がどうしてもあるから、やらないといけないという責任感はありますね。リリースするバンドも、レーベル買いして"あ〜、なにこれ"みたいなのは出せないなと。ライヴに出てもらうバンドはもう少し幅を広げますけど、リリースするバンドに関しては、肝に銘じて。で、来年はPOGOが(カタログ・ナンバー)70番台に入るので、77から82は僕のメモリアル・ゾーンに入るから、そこは昔の仲間たちを。ラスサバ(THE LAST SURVIVORS)とかハットリ(HAT TRICKERS)をタイミングがよければ出していきたいなと」

■なんだか、今村さんすっかり大人になられて(笑)。

今「本当はね、昔からこうやっていればよかったんでしょうけど(笑)」

■じゃあ、今度はきづくさんの話しに移行させてください。まずはパンクはどんな風にして入ったんですか?

き「兄がいるんですけど、兄がブルーハーツのMDを貸してくれて、そこから入りました」

■こういう(今村さんみたいな)パンクには?

き「2009年のCASUALTIESの来日のときに、(新宿)ロフトに見に行って。パンクスがたくさんいて、格好良いなって。あのときはERECTIONSも出ていて、ERECTIONSも格好良いなって」

■CASUALTIESの来日といっても、もう98年の初来日のときではないんですね。

今「その頃は幼稚園とかでしょ?」

き「いや、小学生くらいです(笑)」

■で、バンドをやろうと?

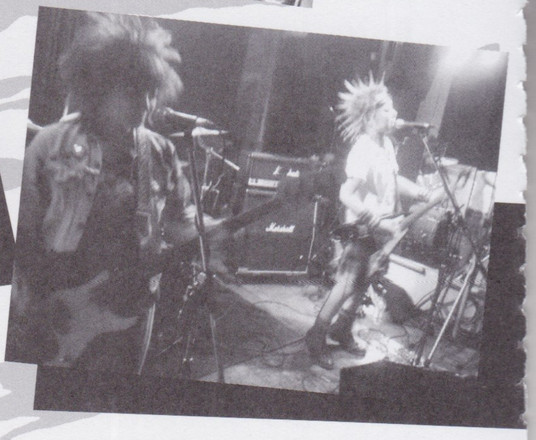
き「当時は別のバンドをやっていて、大学のサークルで先輩と。アメリカン・ハードコアみたいな速いのを。BEER BELLYを始める前くらいまでやっていて」

■サークルでバンドをやっていたときには、TOMとかは好きだったんですか?

き「もう好きで。まわりがTシャツに短パンのなかで、僕だけ髪を立てて鋲ジャン着てギター







弾いて」

■それから自分のバンドをやろうと。(BEER BELLY結成当時の)メンバーは今とは全然違う?

き「ベースだけ代わっていて。今、ノリさんとやっているASUKAがベースだったんですけど、ドラムは代わっていないです」

■今村さんとはどうやって知り合ったんですか?

今「酔っぱらっているからな〜」

き「多分、僕が一方的に話しかけていたんですけど、ライヴのときだから覚えていないです(笑)」

今「BEER BELLYをいつ知ったかも覚えていないしな。(きづくさんの名字が)年見っていうのをあとで知って、"あれ、通販のお客さんに年見っているな"って気づいて。それで聞いたんですよ、"兄ちゃんいる?"って。親近感は湧きましたけどね、お兄ちゃんが通販でずっと長いこと買ってくれているから」

■BEER BELLYの結成自体は何年ですか?

き「2年前なので、2012年の5月くらいですね」

■7インチの前には、オムニバス(『YOUNG PUNX GO FOR IT!』)に参加していますよね。

き「そうですね、イギリスのConnor(POGO PUNX RECORDS)に出してもらって」

■デモ・テープとかは?

き「初ライヴのときにバラまきで。ノリさんの企画で」

今「えー、そうだっけ?記憶にない」

き「(早稲田)ZONE-Bで」

今「あー、言ったね、演奏するだけじゃつまんないから何かやれって」

き「それで(テープを)作って。あと自主企画でCDを配ったりはしていました」

■自主で7インチを出そうと思ったのは?

き「初めて出すなら自主で7インチって、組んだときから決めていたので。なんか出したかったんですよね」

■POGO 77から出してもらいたいなとかは?

き「いや、まだうちらは早いだろうと(笑)。やっぱり一枚目は絶対に自主で出したくて」

■300枚プレスですよね。

き「はい、枚数とかはノリさんに相談して」

今「300枚ならサクッと、ちょうどよくいけるかなと読んだんですけど。もっと人気が出たら再プレスしてもいいしね」

き「あー、そうですね」

今「僕はしないけどね(笑)」

■(笑)。出来上がりに関してはどうですか?

き「いいんじゃないでしょうか(笑)。満足しています」

今「このジャケを見たら、年寄りの外国の連中が感動していたよ。"古いタイプだね"って。SHIT FACEDとかPOGO MACHINEとか、TOMの初期の頃の作り方だから」

き「作り方もノリさんに聞きましたもん」

■今や、パソコンで作ったほうが簡単でしょうに。

き「僕がパソコンが使えないっていうのもあって」

今「味があっていいよね」

■8月にはイタリアのTHE DEFECTIVESとのミニ・ツアーも経験されて。

き「大分刺激的で楽しかったですけど、うーん、そうですね、楽しかったです(笑)。次に自分たちでやるときに、色々と活かそうと思って。メンバーとも仲良くなって今でもメールし

たりして」
■その縁でオムニバスを?
き「(THE DEFECTIVESの)ベースが"VAを作りたい"と言ってきて。収録曲は先週レコーディングして音源は送ってあるので」
■なんて曲ですか?
き「"POLICE SHIT"っていう(笑)」
■(笑)。じゃあ、今後はテープ(POGO 77からの再発)とそのオムニバスが。
今「テープは11月に出るよ」
き「オムニバスも11月に。多分、CDだと思うんですけど、詳しいことは聞いてなくて。"作るから曲を送って"って」
■そもそも、今村さんがBEER BELLYとTHE DEFECTIVESのツアーをセッティングしたのはどうして?
今「やっぱりツアーだと車の運転とか物販のやり方とか、人との付き合いもあるから、そういうのを一通り教えてあげたいなというのがあって」
■それだけ期待させる何かがあった?
今「若いバンドがものすごくいればチョイスできるけど、今はBEER BELLYとRECONSIDERATIONが僕の中では育ってきていて、特にBEER BELLYはちゃんとやっているので。もうやらないですけどね、あとは自分たちでどうぞ、と」
き「それは前から言われていますね」
■同世代のバンドはたくさんいますか?多少ジャンルは違っても。
き「結構、いるっちゃいますね。ここいらのシーンじゃないところでも、話してみると、"お前とタメだよ"と言われたり。あまり(ジャンル)関係なく、同じ世代とやっていきたいというのはあるので。固まらずに」
今「そのほうがいいと思う」
■でも、パンクだと30代〜50代のバンドばかりで、20代のバンドがいるっていうのが驚きというか。ライヴのお客さんとかどうですか?
今「POGO 77は若いほうだよね。もちろん年齢が上の人が多いですけど、他のライヴだと若い人が全くいないとか聞きますし。(若い人はシーンから)消える確率も高いですけど、就職したり田舎に帰ったりで。でも、もうちょっと若い人を増やしたいと思って。10代の人が40代の人に憧れは持たないと思うんですよね。もう、お父さんじゃないけど、なんか"昔からやっているバンドだな"くらいで。僕らが若い頃に感じた、"痺れちゃうな!"、"アニキ〜!"っていうのは、そういうのは僕にはできないので、だからBEER BELLYとかに頑張ってもらって」
■世代間のギャップなんかは感じますか?
今「ツアー中に感じたね。もう若すぎて疲れる、正直(笑)。悪い意味じゃないよ、元気だから」
■きづくさんは、"このおじさん何を言っているんだろう"とか、ないですか?
き「いえ、全然、ノリさんは」
今「注意しようと思っても、昔の自分を思い出すと、"ダメだ、注意できない!"って(笑)。物販の並べ方とか"ちゃんとしろ!"って言いたかったけど、"いや、僕は酔っぱらって放置してどっか行ってたな"って」
き「けど名古屋で怒られましたよ。"帰る"って言われてもまだ打ち上げで飲んでいたら(笑)」
今「もう全員グデグデで。"いい加減怒るぞ!"って、怒っちゃった。でも、ツアーは各地に仲間がいて、そういう人がいるからこそツアーができるっていうのを見てほしくて。媚びるわけではなくて、ちゃんとやっている人たちは、こっちがちゃんとやっていれば見てくれているから」
■きづくさんのほうから、上の世代に対する苛立ちとかはないですか?
き「苛立ちはないですね(笑)。ノリさんから、盗めることは盗んでいこうと思うくらいで」
■再発されるカセットの話しに戻りますけど、収録される"SMASH THE SOBER PUNX"は初期の曲?
き「そうですね、初ライヴのときに配ったテープにも入っている曲なんですけど、50本だけツアーで売るから、"再録でいいかな"って思っていたらPOGO 77から再発されることになって。ちゃんと作ればよかったかなって。いや、ちゃんと作っているんですけど(笑)」
■それとBUZZCOCKSのカヴァー("I DON'T MIND")で。
き「うちのベースがBUZZCOCKSが大好きなので、ちゃんと歌っている曲もやってみようかなと(笑)。テープも余ると思っていたんですけど、意外とはけて」
■7インチにしろテープにしろ、反応というか、手応えは感じました?
き「そうですね、意外とすごいなって(笑)。ブログとか一応やっているんですけど、たまにアクセス数を見ると、"こんなに見られているんだ!"って。逆に怖くなって。だからちゃんとやらないとなって思います」
■ちなみにBEER BELLYってバンド名は?
き「SHIT FACEDの曲から。POGO MACHINEの曲で"BEER KIDS"って曲があって、BE



ER BELLYと迷ったんですけど(笑)」
■今日もSHIT FACEDのTシャツを着てますね。
き「これ3枚持っているんです、色違いで(笑)。結構、上の人からもらえるんですよね、"もう着ないからあげる"って」
■ポゴ界隈だとSHIT FACEDが一番好き?
き「そうですね、BEER BELLYなので(笑)。POGO MACHINEも大好きで、初期POGO 77のバンドやオムニバスに入っている曲、バンドがメッチャ好きなので」
■色んな人たちから期待されていると思いますが。
き「そうですかね(笑)。本当にありがたいです。やらないといけないな、と。でも自分がやりたいことをやっているだけなので。来年、再来年と7インチを出していきたいです」

※ここで電話がかかってきて中座していた今村さんが戻ってくる

今「財布をなくしたんですけど、今、警察から電話があって小田原で見つかったみたい。たまたま職質した人の財布の中から僕のカードが出てきたみたいで。ごめんね、"POLICE SHIT"なんて曲作ったのに」
き「僕も7インチのジャケを警察に拾ってもらったので(笑)。酔っぱらって(下北沢の路上で寝てて)バッグとか全部取られて、ジャケの原本をなくして。(警察の)みんながみんなSHITじゃないです、悪い警察に対するSHITです」
今「バカだ(笑)」
■最後に何か格好良いことを言ってください(笑)。
き「格好良いこと…うーん、頑張って増やします、パンクを。BEER BELLYをやっていくので、よろしくお願いします!」
今「今まで何人も若い人がいて、きづくくんと同じように色々教えたけど、ことごとくパンクを辞めているから。残っている連中ももちろんいるけど、きづくくんはできる限り、パンクを辞めてもいいんだけど、できる限りやって欲しいなと思います」

※今村さんは風邪が酷いのでここで帰宅〜マイさんが加わってBEER BELLYのみのミニ・インタヴューへ

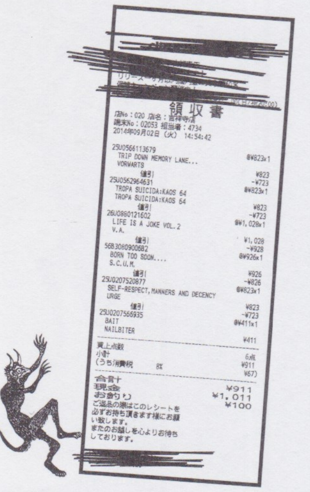
き「まさかこんなに早くPOGO 77から出せるとは思っていなかったです。いつか出してもらえたらいいなと思っていたので」
マイ「好きな日本のバンドがPOGO 77から出していたからね。自分がバンドをやってそこから出せるなんて思っていなかった」
き「ありがたい、頑張ります。企画ももっとやりたいよね。年内になんかやりたい。目標を決めないとメンバー的にダメになるから(笑)。でもスパイキー・パンクだけとかで固まりたくはないよね」
マ「(他ジャンルの)そういう人たちからライヴに呼ばれたりもするし」
き「固まっていたらあんまりやる意味ないじゃんって」
マ「それは一番思うね」
き「鋲ジャンでスパイキーが一番格好良いとは思うけど、同じ年代の人たちとも」
マ「格好良いと思ったらね」
き「お客さんの立場で見てて、"またこのメンツか"って、それだけはイヤだったから。出ているバンドが格好良くても、"この前と一緒だな"っていうのは」



マ「自分が見に行っていたときのことを思い出して、なぁなぁにならないように。初めて見るバンドがいたほうが面白いし」
■マイさんは津山からこっちに出てきたんですか?
マ「はい、そうですね」
■バンドがやりたくて?
マ「そうですね。津山に友達がいて、その子と一緒に(東京に)行こう!みたいになって」
■その頃はSKIZOPHRENIAを見に行ったりとか?
マ「していましたね」
■きづくさんは、地元は東京ですか?
き「僕は千葉の田舎のほうで。高校のときとかライヴにも行ったことなくて。ブルーハーツばかりだったので(笑)、本屋でヒロトのインタヴューを読んでROLLING STONESとかBEATLESを知って」
マ「こんな子になるなんて(笑)」
き「本当、CASUALTIESを見たから(笑)。18歳くらいのときに、マイとバンドをやっていたんですよ、RAMONESのカヴァー・バンドを」
マ「一回くらいしかスタジオ入ってないけどね(笑)」
き「それで、BEER BELLYのベースだったASUKAが抜けたときに、次の週に名古屋のライヴが決まっていたからマイに、"ベースを弾いてもらえる?"って頼んで、"いいよ"って」
マ「一回だけスタジオ入って名古屋に行って(笑)」
き「でも今村さん、BEER BELLYのこと、音的にはあんまりかもだよね(笑)。いつか推薦されたらいいな」
マ「今村さんがブログで、"BEER BELLYはオススメしません"とか書いているのはそういうことかな(笑)」
■それは愛情の裏返しなんじゃないですか(笑)。
き「あ、たしかに(笑)。"君たちは売れない"とか言われますけど、やはりなんか嬉しいです(笑)」
マ「でも海外の人が7インチを買ってくれるのも、今村さんがそうやって書いてくれているからで」
き「たしかに。いつか7インチを出してもらえたらいいよね」
マ「4枚目くらい?」
き「5枚目で(笑)。それまでは自主で出して」
■では、最後にマイさんも何か格好良いことを。
き「僕は何も言えなかったから、代わりに」
マ「困っちゃうな〜(笑)」
き「…すみません、本当に僕たち口下手なバンドなので(笑)」

SEN RECO センレコ 第二回

WHAT YOU CAN BUY WITH 1000 YEN?



Vol.13でやってみた『センレコ』の第二回目となります。Vol.13発売後に友人から、「あれってやってみると面白いもんなの?」と訊かれたので、僕は正直に「欲しい新譜の7インチを1枚買ったほうが満足度が高い」と身も蓋もない現実を突きつけてしまったのですが、懲りずにもう一度やってみます!
「センレコって何?」という方に簡単に説明しますと、「千円札一枚を持ってレコード屋に行って中古盤を漁る」という、子供が百円玉を握り締めて駄菓子屋に行ってやりくりする行為の大人版みたいなもんです。

さぁ、今回も前回と同じく、"首都圏を中心にチェーン展開している某レコード店の都内某店"でお買い物です。

中古盤の12インチが詰まった段ボールから、機械的に「値段だけを見て」ドンドン引っこ抜いていきます。まず目に留まったのがTROPA SUICIDAとKAOS 64とのスプリットLP、100円。両バンドとも80'sのブラジル・ハードコアでしたっけ?なんだかとってもお買い得な気がします。次いではSCUMというバンドのLP。85年にリリースされたみたいですが、どんな音なのかサッパリ想像がつきません。これも100円だからイっときましょう。「よく分からないバンドなら買え!」の精神に基づいて、THE URGE(ドイツのINCOGNITO RECORDSからのリリースなのでドイツのバンド?)とVORWARTS(ラモーン・パンク?)のLPも確保。どっちも100円です。

ここで以前からちょっと欲しかったNAILBITERの『THE BAIT』LPを発見!やったね!411円也。さて、これまでの合計金額が811円。200円のレコードを買うと千円を超えてしまいます。なので100円、100円で何かないか?と見ていくと、ありました!VA『LIFE IS A JOKE Vol.2』!しかも2枚組!なので1枚あたりたったの50円(なんだその計算は…)。これにて911円のお買い物は終了。帰宅してさっそく実聴です!

で、帰宅後、レコード・プレイヤーの前に鎮座して、まずはTROPA SUICIDAとKAOS 64とのスプリットLP(DEVIL DISCOS/87年)を取り出します。かなりジャケにダメージがあるのでこんなお値段なのでしょうが、それでも安いな〜とTROPA SUICIDA側にソッと針を落とすと、これが期待を裏切らない崩壊南米ハードコア・サウンド!ヘロヘロのギターに投げやりなヴォーカル、全てが不調和で素敵です。対するKAOS 64は前者より性急感と統合性があって(一般的に見れば同レベルですが)、こっちのほうが格好良いかな。

お次はSCUM『BORN TOO SOON....』(PSYCHE INDUSTRY RECORDS/85年)。調べてみたら80年代のカナダのバンドで『P.E.A.C.E.』コンピにも参加しており、2006年には音源集CDもリリースされた…みたいなんですが、うーん…。ヴォーカルが黒人ということでも有名みたいですが、ちょっと全編に渡り退屈な曲調です。

THE URGE『SELF RESPECT, MANNERS AND DECENCY』(INCOGNITO RECORDS/91年)。70年代に活動していたバンドが再結成して当時のナンバーを再録したのが本作。"LURKERSみたい"と評しているサイトがありましたが、言い得て妙!なメロディーのあるパンク・ロックでなかなか良いです。VORWARTS『A TRIP DOWN MEMORY LANE...』(ZURICH CHAINSAW MASSACRE RECORDS/2002年)は聴いてみたら全然ラモーンじゃなくて甘ったるい旋律がこれでもか!と押し寄せてくるポップなパンク・ロック。79年〜83年にかけてスイスで活動していたバンドで、昔の曲を近年になって再録したという(オリジナル・トラックも3曲収録)、THE URGEのLPと似たような作品でした。

そうしてこうして、目玉のNAILBITER『THE BAIT』(LA VIDA ES UN MUS/2012年)です!ブラジル&イタリア人らによるロンドン拠点のハードコア・バンドで、これまでも"ジャパニーズ・ハードコア+スカンジ+モーター・ロッキン"な感じでしたが、今作では四の五の言わずにDEATH SIDEからの影響を丸出しにしており、これがもう痺れる格好良さ!ラストはANTI CIMEX"SISTER DAYLIGHT"のカヴァーでシメ!好きなものは好きだと隠さない姿勢が潔いのです。

いよいよ最後はVA『LIFE IS A JOKE Vol.2』(WEIRD SYSTEM/86年)。たくさんのバンドを集めた(10カ国16バンド)ゲートフォールド仕様の2枚組で、作るの大変だったろうなぁ…と感謝しながら聴きます。けど最初のBLUT+EISENってバンド全然格好良くないなぁ(泣)。1000枚限定プレスで、僕のはナンバー0357でした。中途半端な番号だなぁ(泣)。

恐らくNAILBITER以外のレコードはそのダメージ具合を見る限り、新品で買われた後に売られ〜買われ〜また売られ〜を幾度か繰り返したに違いありません。人間だったら心身ともにボロボロです。僕はまずレコードを売らないタチなので、彼ら(100円の価値しかないと宣告されてしまったレコードたち)には、我が家の棚をその歩みの終着駅にしてもらい、安らいでもらおう、そんなことを思った今回のセンレコでありました(シンミリ)。





旧ユーゴスラビア連邦の一国、スロヴェニア。1991年にユーゴからの独立を果たした人口200万人ほどの小さな国です。そのスロヴェニアの首都、リュブリャナ(UBRの出身地でもある)で活動中のバンドがこのDORNATA。ルックス通りのUK82なロウ・ハードコアが基本ですが、"西側"の優等生的音楽大国のバンドには出せない"独自解釈"がやはり一番の魅力。何がイケているのか?ダサいのか?そんな知識と情報ばかりが先走った現代において、"ゼツミョー"に垢抜けない、この"ビミョー"な感じが心地良くも好ましいのです!ベース・ヴォーカルのDanとギターのLiskoの2人が回答を寄せてくれました(無記名の回答はバンドとしての発言となります)。

■バンドの結成はいつのことですか?皆さん長いキャリアがあるのでしょうか?

「メンバー全員で最初のリハーサルをしたのは2012年9月1日のことさ。バンドはベーシストでヴォーカルでもあるDanとドラマーのKwpaで始めたんだ。そのちょっと後にギターのLiskoが加入した。DanとLiskoはWASTE LANDという別のプロジェクトでも一緒にプレイしていたことがあったんだ。Liskoの音楽的なキャリアに関してはこれで全部だな。Kwpaも別のバンド、PSIHOZAで2009年からプレイしているぜ。Danに関して言えば、彼は音楽にもっと長く関わっているな。スロヴェニアで最初のグラインド/クラスト・バンドの一つに挙げられるTNTでプレイしていたんだ。そしてTNTの後にも、色んなバンドを結成、プレイしてきてて、(少しだけ名前を挙げるとするならば)HELL PATROL、GLAVE、BAR FLIESといったバンドでね。最近になって俺たちはドラマーをKwpaから、より音楽経験の豊富なPodaに替えたんだ。Podaがプレイしていたバンドで最も有名なのはPATARENIだね」

■このバンド名はスロヴェニア語ですか?どういう意味?

「スロヴェニア語じゃなくてイタリア語なんだ。元々はイタリアとの国境沿いで使われているスロヴェニア語の方言、"giornata"という単語からきている。その意味は英語で"a day"。だけど、一日の中でお前がした事柄の全てを意味している言葉でもあるんだ」

■DISORDERや初期のCHAOS UKを連想しますが、ベース・ラインが独特だったりと曲調も面白いです。影響を受けたバンドを挙げると何になりますか?

「たしかにDISORDERは俺たち全員が愛しているバンドさ。影響を受けたバンドを少しばかり挙げるなら:ENT、DOOM、MINISTRY、DISAFFECT、UBR(そしてほとんどのスロヴェニアの80'sハードコア、または世界中の多くのオールドスクール・ハードコア・パンクとクラスト・バンドから影響を受けている)。俺たちの音楽的な嗜好はパンク(及びパンクに関連した音楽)だけじゃなく、ニューウェイヴからレゲエまでといった感じで幅広くてね、そのどれもが影響として現われていると思うぜ」

■やはり80'sのUKハードコアが基本的には好きだとは思うのですが、具体的にはどんなのが好きですか?

Dan「若かった頃にはSEX PISTOLSにTHE CLASH…DAF、MINISTRY、THE CURE なんてバンドを聴いていたな…」

Lisko「初めて聴いたパンク・バンドはSEX PISTOLS、THE EXPLOITED、THE CLASH、NIET、HLADNO PIVO、HOČU?NEČU!、THE PARTISANSだったね…。そういったもののほとんどをカセット・テープで聴いていたよ。今じゃmp3とインターネットがメインになっているから、聴いても聴いてもキリがないよね。今でもハードコア/パンクを主に聴いていて、DISORDER、KAAOS、TERVEET KÄDET、UBR、CHAIN REACTIONとかだね。それとVOMIT PUNXみたいな初期のストリート・パンクも好きだよ」

■では、歌詞のテーマは?

「俺たちの歌詞は戦争、政治、俺たちの日々、そしてパンクスの自由についてさ!!!イエー!」

■みなさんの地元、リュブリャナのパンク/

ハードコア・シーンはどんな感じですか?バンドやレーベル、ジンなんかは?

「今となっては、それほど多くのパンク・バンドはここリュブリャナにはいないね。AKTIVNA PROPAGANDA(アナーコ・ハードコア・パンク)、GUŽVA U BAJT(Oi!パンク)に俺たちくらいさ。もちろんスロヴェニアはすごく小さな国だから、リュブリャナ近くの町、トルボブリエのDATURAやジェレズニキのTRI FOR 60、KRIK DISNEYLANDA(メンバーはスロヴェニア中から集まっている)、ノヴァ・ゴリツァのBEER FOR BREAKFASTとかがいるのを知ってるけどな。ここのパンク・シーンにはレーベルなんてないぜ、それにファンジンもな…」

■70's〜80'sのクラシックなスロヴェニアのバンドでオススメを挙げてもらえますか?

「いくつかクラシックなスロヴェニアのパンク、ハードコア・バンドを挙げてみるぜ。UBR、TOŽIBABE、III.KATEGORIJA、STRES D.A.、NIET、2227、S.O.R.、KUZLE、Oi! KULT、PANKRTI、OTROCI SOCIALIZMA、PANIC OVERDOSE、HELL PATROL、TNT、BAKA YARO、ANUS…」

■AKC Metelkova mesto(※自主的なセンターで、アーティストのためのクラブや美術館、図書館など7つの建物で構成されている)でギグをやったりするのでしょうか?大きなスクワットなのですか?パンクスにとって重要な場所なのでしょうか?

Dan「俺は現在に至るまでMetelkovaで12年以上働いているんだぜ。そしてその通り、Metelkova mestoはパンクスにとって非常に重要な場所なんだ。俺たちのクラブ(Klub Gromka)にたくさんのバンドを招いているけど、実際のところスクワットではない(不法占拠されてはいたけどね。元は軍隊の兵舎だったんだ)。今では、まぁ、半分は合法みたいな場所さ。多くの建物があってね、クラブが2つだろ、あとはアーティストのためのスタジオに、団体のためのスペースなんかもあるんだ」

■どんなバンドに対してシンパシーを感じますか?

Dan「MINISTRY、DISORDER、WARCOLLAPSEみたいなバンドかな…」

■ところでみなさん年齢はいくつですか?スロヴェニアの独立/十日間戦争"Slovenska osamosvojitvena vojna"(※1991年、スロヴェニアの独立宣言を受けてユーゴスラビア連邦軍が侵攻するも、10日間ほどでスロヴェニアが勝利し終結した)については覚えていますか?

Dan「俺は32歳だ。あの戦争のことは覚えているけど…そのことについては話したくないな(悪気はないよ)」
Lisko「俺は27歳だから、戦争が始まったときは4歳くらいか。だから戦車と飛行機の姿以外は、全然覚えてはいないね…」

■どういう日常を過ごしていますか?一番好きなアルコールは?

Dan「MetelkovaのKlub Gromkaで働いて、そして音楽をやる…。酒は何でも飲むぜ(笑)!」
Lisko「ちょうど社会福祉士になるための教育を受け終えたところでね、実際に職を得られるよう願っているよ(笑)。だから、まぁ、今のところやることがほとんどないんだ…。好きなアルコール飲料は赤ワインにビール、そしてテキーラだな」

■日本について何か知っていますか?

Dan「GASMASKは知っているぜ!!!!イェー、大好きなバンドさ。時々日本の映画も観ているんだ(笑)」
Lisko「スターリン、G.I.S.M、GAUZE、DISCLOSE、SOB、DEATH SIDE、DISCOCKSは知っているよ。日本のアニメと映画もいくつかは知っている。だけど日本の文化についてよく知っているとは言えないな」

■では、あなたにとっての"パンク"とは?

Dan「パンクは俺の人生そのものさァァァ!!!!」
Lisko「自分を表現する方法であり、生きるための考えでもある。でも、なんて言ったらいいか分からないね(笑)」

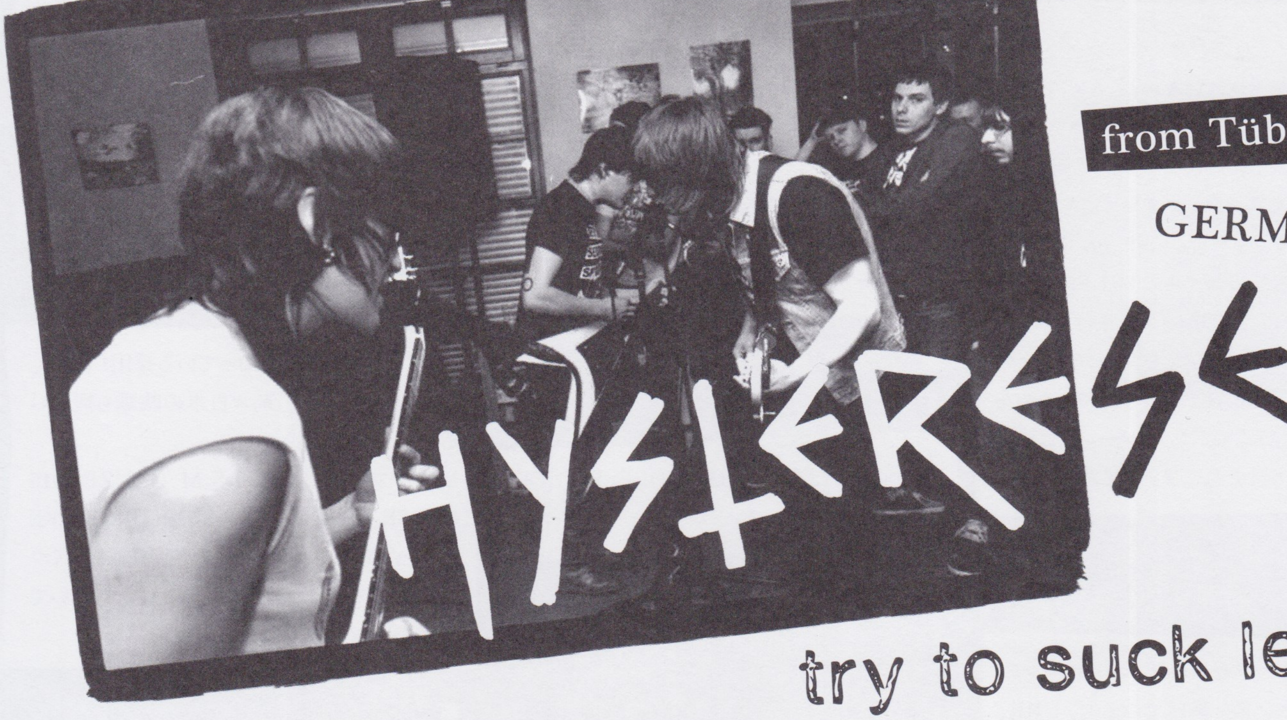
■今後の予定を聞かせてください。

「今後の予定は全くないな…。俺たちはプレイしたいだけさ。飲んで楽しみたいんだ(笑)!!」

■最後に一言お願いします!

「Stay punk and be strong!!!!」





from Tübingen
GERMANY

try to suck less!

**これまでに1本のカセット・テープと2枚のLPをリリースしているドイツのHYSTERESE。
このバンドもGENERACION SUICIDA(P11に掲載)同様、男女ツイン・ヴォーカルでちょぴっとマスっています。ただ、基本は欧州産らしい湿った旋律のメロディック・パンクでして(たまに、"ザ・メロコア"なアッパー・チューンも飛び出しますが)、ドイツらしい堅牢性と、どこか厭世観も漂わせるスタイルが最高に渋いのです。尚、HYSTERESEに"ヒステリー"的な意味合いは全くなく、"履歴効果"というエレクトロニクスな専門用語です。インタヴューにはギターのMoritzがシニカルな感じで応じてくれました!**

■HYSTERESEの始まりはどんなものでしたか?

「Helenと俺とで、新しいバンドを始めようって動き出したのが2010年のことだね。俺たちは何年もの間、他のバンドでも一緒にプレイしていたんだ。それで、ギターを弾きながら歌う、よりダークでクソッタレな新バンドを結成したかったってわけさ。まず俺たちは、Haugにベースを買ってバンドに加わるように頼んだ。そしてDavidにはドラムを叩いてもらった。けど彼は辞めちまったから、今ではCIVIL VICTIMのKaiがドラムを担当しているよ」

■結成当初はどんなバンドから影響を受けていましたか?

「実際のところ、どんなバンドから影響を受けたのかを話すのはとても難しいよ。俺はおうちで座って練習したり、他のバンドのために楽器を演奏するようなミュージシャン気取りじゃないからね。近頃は、シンプルなリフを時々は思いついて喜んでいるよ。自分自身のために演奏しているようなものだからさ。
俺が思うに、MASSHYSTERIは俺にとってかなり重要なバンドだね。それにAUTISTIC YOUTH、COLA FREAKS、MARVELOUS DARLINGS、HEX DISPENSERS、そしてもちろんMARKED MEN。あとはAlicja TroutとJay Reatardが遺した作品にLOST PATROL BAND、GHETTO WAYS、SEDATIVES、CRUSADESなんかもね。だけどもっとロックなやつだったり、ラジオから流れてくる大量のポップ・チューンなんかからも影響は受けているよ…」

■子供の頃はどんな音楽を聴いていましたか?パンク/ハードコアにのめりこんだきっかけは?

「そうだな、一番最初に自分で見出したロック・バンドは2つ。HELLACOPTERSとTURBONEGROだ。それ以降は、自分の好みを狭く限定することはなくなった。格好良いレコードを聴くことが好きなんだ。それがSCHLEIMKEIM(※東ドイツのパンク・バンド)だろうがElton Johnだろうが構わないのさ」

■HYSTERESEとは英語で"hysteresis(履歴効果)"の意味ですよね?

「その通り!Haugが思いついたんだ。彼はメカトロニクスの仕事をしているから、彼の専門分野なのさ」

■あなたたちの1st LPも2nd LPもセルフ・タイトルですが、これはどうして?

「タイトルにワケなんて一切ないよ。10曲のパンク・ロック・ソングがある、それだけ。今後出すレコードに関しても同じさ…」

■2nd LPのジャケットではLED ZEPPELINの1stアルバムと同じく、"ヒンデンブルク号爆発事故"の写真を使っていますよね。

「これまでに撮られた写真の中でも、最高の一枚だからさ。特に、ドイツのパンクのレコードにとってはね。ドイツの誇りが空で燃えているんだから!」

■2nd LP収録の"k-141"はロシアの原子力潜水艦クルスクの沈没事故(※2000年8月、潜水艦クルスクは演習中に爆発事故を起こし沈没。西側諸国にクルスクの情報が漏れることを恐れたロシアは自国だけで救助活動を行うも難航し、事故発生から9日後になり、ようやくイギリスとノルウェーに救助を要請した。しかし、そのときには既に艦内は海水で満たされ、事故発生時には生存していた乗組員含め、全員が死亡した)についてですよね。どうしてこの事故を歌詞に?

「俺は恐れや痛みについて書くことが好きなんだ。クルスクの沈没事故は、絶望の淵に立たされ、徐々に死んでいくしかないという事実が、良いメタファーになっていると思う。希望もなく、残酷な恐怖に充ちた現実。そこから、システムであったり、個々人のおかれた状況、もしくは人間の生命といったものをイメージできるだろうね」

■歌詞にはポリティカルな要素は感じられませんが、パンクと政治の関係についてはどう考えていますか?個人的には、政治的な



■メッセージというのはお持ちですか?

「好むと好まざるとに関わらず、万事がポリティカルであると俺は思っている。俺の気に入っている政治的なメッセージは:
"try to suck less!"
"decelerate!"
"love and reason instead of faith!"」

■ドイツ語ではなく、英語で歌っているのはどうしてですか?

「ドイツ語ってさ、ロック・ミュージックに対してはちょっとばかり意地悪な言葉だって言えるよね」

■HYSTERESEの曲調はヴァラエティに富んでいますよね。それに、あなたたちのコーラス・ワークは最高だと思います。

「Helenが2つの声質を使ってメインのヴォーカルをとっていて、俺がリフと歌詞の大部分を担当している。Helenと俺は一緒に暮らしているから、自宅で巧い具合に曲をアレンジできるんだよ」

■活動拠点のテュービンゲンについても知りたいのですが、学生街みたいですね。良いバンドはいますか?パンクスのためのスクワットはあるのでしょうか?

「テュービンゲンは小さな学生街だよ。絵に描いたように美しく、そして豊かなね。緑の党が管理している巨大なスクワットがあって、そこはまるで学生でいっぱいの団地みたいなところさ。遊園地みたいに賑やかでね。そして、この街はある意味、生活するにしても、ショーをやるにしても、バンドを始めるにしても、非常に快適だ。テュービンゲンは良い本拠地だよ。退屈で、締まりのない、無味無臭の街。洗練とは無縁だね。

シーンは小規模さ。学生が25000人いようがね。彼らの大部分は、パンクは言うまでもなく、アンダーグラウンド・カルチャーに興味を持っていないんだ。パンクスにしても、パンクとアンダーグラウンド・カルチャーにほとんど興味がないんじゃないかな(笑)!ここではみんなバカバカしいほどにマッタリしちまっている(俺も含めてね)。何があっても、安全地帯から去る必要なんてないのさ。そうしてたくさんの飛び地が集まって、一つのデカイ飛び地ができあがるんだ…」

■最近のお気に入りのCD/レコードは?

「WEEZERの新しいレコードにはぶったまげたね!!SKULL FISTの最新アルバムも聴きまくっている。TOTAL CONTROLの2nd LPもメチャクチャ素晴らしかったし、最近リリースされたWAR ON DRUGSのアルバムはまさにマスターピースだ!先月よく聴いていたお気に入りのバンドはCALIFORNIA XにBEAST MILK、CLOUD NOTHINGS、WHITE LUNGかな…」

■HYSTERESEとはあなたにとってどんな存在ですか?

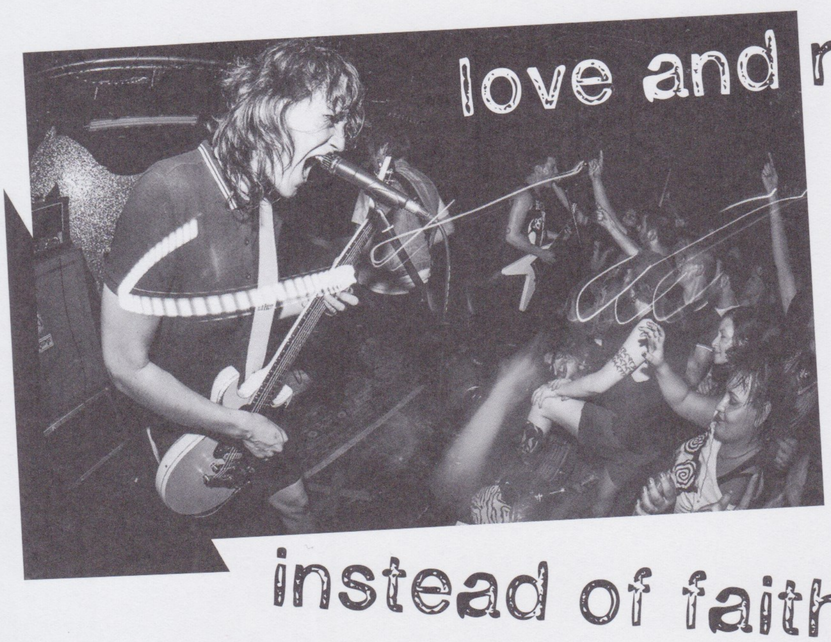
「このバンドでたくさんの場所を訪れ、多くの人たちと出会った。それこそヨーロッパ中のね。様々な場所を訪れては、夜な夜な自分のギターを粉砕するハメになるなんて、これっぽっちも思っていなかったってわけだ。でも、パンク・ロック・ミュージックを通して自分自身を表現できるなんて、ありがたいことだよ。そして俺の人生において最も大切な人と、一緒に音楽ができている。だからこのバンドはとても俺にとって大事なんだ」

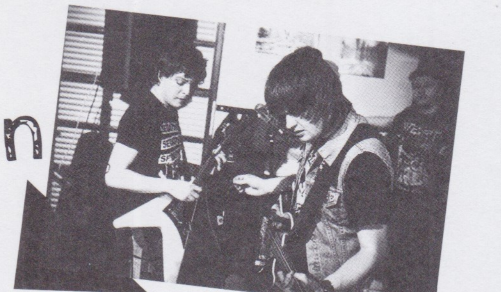
■今後の予定を聞かせてください。

「2015年の6月にアメリカ・ツアーを予定している。成功させたいね!」

■最後に、日本の読者にメッセージをお願いします!

「ケンジ、質問をありがとう!俺の回答が退屈でなければ幸いだ。どうせ死ぬんだから急ぐことなく、ゆったりと生きよう!」







シンガポールのダーク・クラスト・コア・バンドPAZAHORA。来日経験もあるので、ご存知の方も多いのではないでしょうか。そのメンバーでもあるZhafranが主宰しているレーベル/ディストロが4490 Recordsです。
東京のENSLAVEとPAZAHORAとのスプリットLP(CDはMCRよりリリース)の他にも、当地の"motorcharged"なメタル・パンク・バンドSNAGGLETOOTHや、ソリッドなダーク・パンク・バンドDAILY RITUALといった、これまでのシンガポールでは見られなかった新しいスタイルのバンドの作品も手掛けているレーベルです。
まだまだリリース・タイトルも少なく、"これから"の存在ではありますが、シンガポール・シーンの現状も含めて色々と質問してみました!

■パンクと初めて出会ったのはいつで、そのときどのように感じましたか?
「ハロー、インタヴューありがとう。僕が思うにハードコア/パンクとの最初の遭遇は僕が12歳くらいのときだったね。僕の兄がすでにハードコア/パンクにのめり込んでいたから僕はついていたよ。ハードコア/パンクのアルバムやコンピのテープやCDがたくさんあったんだからさ。僕の記憶に間違いがなければ、初めて聴いたミックス・テープにはRAMONES、SEX PISTOLS、VICE SQUAD、THE AVENGERS、BLACK FLAG、MINOR THREATとかが入っていたな。もっと他にもパンク/ハードコアのコンピがそのテープには収録されていたんだけど、今でもよく思い出せるのはDESPERATE FIGHT Records(※AC4などでお馴染みのDennis LyxzénがUmeåで主宰していたレーベル)がリリースしたコンピだよ。本当に素晴らしいコンピだった。自分の音源を買えるようになるまでは、ずっと兄のポータブルCD/テープ・プレイヤーを持ち歩いては聴いていたよ。僕と兄では6歳の年齢差があったから、それで僕は早い時期から兄の持っていたハードコア/パンクの音源に触れることができたってわけ。ラッキーだったね!
ショーに行くようになったのは15歳のとき。小さなパンク・ロックのショーでね、その後に僕はもっとハードコア・パンクのショーに足を運ぶようになって、今でも付き合いが続いている仲の良い友達もできたんだ。新しいバンドのことはチェックし続けているし、昔のクラシックで有名なバンドも掘り返しているよ。ローカルなバンドも海外のバンドもね。これを止めることは決してないよ。
ハードコア/パンクを初めて聴いたときは、とにかく興奮した。当時はラジオから流れてくるガキ臭い音楽しか聴いたことがなかったからさ。そして歌詞を読んでまた興奮させられたんだ。こいつは単なる音楽じゃないぞ。これはバンドの周りや世界で起こっている事柄に対する意見や視点であり、同時にライフスタイルでもあり、バンドが自身を表現したり、自己実現したりする手段でもあるんだってね」
■バンドは何かやっていた/いますか?
「イエス、いくつかのバンドでプレイしていたけど、今はPAZAHORAでだけプレイしているよ」
■いつ、どうしてレーベルを始めたんですか?
「2013年に始めたんだ。いくつか理由があるんだけど、第一の理由としては、僕の友達でもあるギリシャのバンドにSARABANTEっていう良いバンドがいるんだけど、彼らのアルバムのテープ・ヴァージョンをリリースしたかったってのがある。LPヴァージョンはすでに完売していたから、色んな地域のキッズがこのアルバムをチェックして手に入れられるようにするため、テープ・ヴァージョンを出すことに決めたんだ。第二に、格好良くて真面目に頑張っているシンガポールや色んな地域のバンドを、できるだけヘルプしたいっていうのがある。音源のリリースやディストリビュートに関してね」
■参考にしたレーベルや好きなレーベルはありますか?
「真似しようとしたレーベルはないかな、バンドとレーベルにとって、良いことをやるだけだよ。好きなレーベルはFeral Ward、Partners in Crime、Trujaca Fala、Prank、Havoc、Deranged、Finn、La Vida Es Un Mus、Yellow Dog、La Familia、Putrid Filth Conspiracy、D-Takt Rapunk、Hardcore Holocaust、Stonehenge、Nada Nada、Trabuc、Alerta Antifascista、HG Fact、Devour、MCR Company、Straight Up、Hardcore Survives、Iron Lung、Lengua Armada、Beach Impediment、Grave Mistake、Contrasztとかかな。今、この瞬間に思いついたものを挙げてみたよ」
■リリースする際に一番重視していることは何ですか?レーベル・ポリシーは?
「格好良くなくても、ちゃんと頑張っているバンドと一緒にやるのが好きなんだ。ショーやツアーを企画したり、リリースのプロモーションをしたりね。それと、バンドには、彼らの歌詞やイデオロギーに人種差別、性差別、ファシズム、同性愛に対する嫌悪がないことを確認しておきたい。そして全て100パーセントDIYであるってこと。最後に、僕は威張り散らしたくはないんだ。だから友達と一緒になって作るっていうアイデアが好きなんだよね」
■個人的な意見なのですが、シンガポールにはクラストやグラインド、Oi!、ブラック・メタルのバンドはこれまでにもいたと思うのです。だけど、SNAGGLETOOTH(メタル・パンク)やDAILY RITUAL(ポスト・パンク/ダーク・パンク)といったバンドはこれまでいなかったんじゃないでしょうか?彼らは新しい世代のバンドなのですか?

IV.IV.XC
4490 RECORDS

「そうだね、君の言う通りさ。SNAGGLETOOTHやDAILY RITUALみたいなスタイルでプレイしていたバンドはこれまでにいなかった。何をもってして新しい世代というのかが分からないけど、シンガポールのハードコア/パンクは近隣諸国のそれと比較してもまだ若く、小規模なんだ。だからバンドはいつも同じようなメンバーで新しいバンドを結成している。パンク・ミュージックの新しいスタイルを試みようとするとそうなってしまうのさ。そしてその結果がSNAGGLETOOTHとDAILY RITUALだね。新しくバンドが結成されれば、僕はそのメンバーのうち1人か2人のことは知っているだろうね。そのくらい小さいシーンなんだよ。しかしながら、SNAGGLETOOTHやDAILY RITUALみたいな新しいバンドがあちこちで話題になっていることが、僕はとにかく嬉しいんだよ」

■シンガポールのシーンについても知りたいです。会場やレーベル、ジン、レコード・ショップとかについても。

「話したように、最近のシンガポールのDIYハードコア/パンク・シーンは小規模なんだ。だけどアクティヴだね。シーンには活気があるから、君がここでのショーにやってくれば、それを目の当たりにすることができるよ。小さいことの利点としては、みんながお互いのことを知っているから、そのおかげでここのシーンは特別なものになっていると思うんだ。そしてこの小さなシーンにとっては、近隣諸国のマレーシアやインドネシア、フィリピンのシーンと良好な関係であることが重要なのさ。各々の国からリリースすることによって、レーベルやディストロの名前が至るところで知られるようになっていくし、海外のバンドが東南アジア・ツアーを企画しやすくなっていくからね。

会場:近頃では、パンク/ハードコア・ショーによく使われる会場が2ヶ所あるんだ。SUBSTATIONは15～20年も前からパンクスがショーを企画している。1990年頃にインディペンデントなアート・センターとして設立されたんだ。お次ぎの会場はPINK NOIZE。2014年にオープンしたばかり。リハーサル・スタジオ、小さなタトゥー・スタジオ、そしてショーの会場から成り立っていて、パンクスによって運営されている。

レーベル:Epidemic Records、Adzhagei Records、Prohibited Projects、Blackhole 212、そして4490 Recordsだね。

ジン:今のシンガポール・ハードコア/パンク・シーンに欠けているのはジンだよ。

レコード・ショップ:実際のところ、ハードコア/パンク/メタルのレコード・ショップはシンガポールにはないね。普通の、メインストリームなものを扱うレコード・ショップは数を増やしているというのにさ。すぐにでもレコード・ショップを始めたいところだけど、時間とお金の問題があるよね、ハハハ…」

■シンガポールのパンクのどんなところに一番魅力を感じますか?

「分からないけど、人かな。いつだって友好的だからね。そして、とても小さなシーンであるにも関わらず、継続できているというところかな」

■昔のシンガポールのバンドについても知りたいです。最初のパンク・バンドというと、80年代のOPPOSITION PARTYでしょうか?

「そうだね、僕も80年代後半に結成されたシンガポール初のパンク・バンド、OPPOSITION PARTYのことは知っているよ。だけど、90年代に入るともっと多くのバンドが登場してくるんだ。僕が知るだけでも90年代にはMINUS、GLOBAL CHAOS、THE JABS、PROTESTなどといったバンドが活動を開始した。東南アジアにおいてパンク・バンド/シーンが進んでいた国はフィリピンだと僕は思うんだ。フィリピンには80年代にDEAD ENDS、URBAN BANDITS、G.I. AND THE IDIOTSなどといったバンドがいたからね」

■パンク以外で好きな音楽は?趣味は何でしょうか?

「パンク/ハードコア以外だと、あらゆる種類のロック(ポスト・ロック、サイケデリック・ロック、ストーナー・ロック、ジャズ・ロック、インディー・ロックとか)を聴くのが好きだよ。それにパワー・ポップ、スラッジ、ポスト・メタル、ドゥーム・メタル、その他にも好きだけど、まぁ、自分の気分次第かな。結局のところパンク/ハードコアが好きだね、ハハハ。趣味はレコードを集めること、旅行してその土地のレコード・ショップを訪れること。あとはドキュメンタリーを見たり、ジンを読んだり、飼っている猫といい時間を過ごしたり、友達と遊びまくったりね。学生時代にはシルクスクリーンでシャツを作るのが好きだったんだ。小遣い稼ぎにもなったんだけど、あまりにも疲れたからやめちゃったよ、ハハハ」

■普段はどんなことをしていますか?仕事は?人民行動党(※シンガポールの独立以来、ずっと与党でいる政党)の統治について思うところはありますか?

「今、僕は妻とバンコクで暮らしているんだ。2016年までの予定でね。僕は失業中で、妻だけが働いているよ、ハハハ…。だから楽しんでやっているディストロ/レーベルだけが僕の"仕事"だね。シンガポールの政治について話すのは酷く退屈なことだよ。良くなることなんて何一つないし、実際のところ年々悪くなっている。いや、日々悪くなっているかな。ただ、僕は今シンガポールにいないから、現地で何が起こっているのか、いくらその最新の情報を得ていたとしても、このことについて話すのは難しいね。だけど、ますます多くのシンガポール人が政府に対して怒りの声をあげているとは言えるね。ニュースやソーシャル・メディア、討論会などで明らかさ。だから2016年の選挙は、シンガポールの政治にとって刺激的なものになるだろう。正直に言えば、シンガポールの政治なんて知ったこっちゃない。だけど、多くの機密や便宜と取り引きしている今の政府/政党よりも、改善を求めて、変化を経験するほうがいいんじゃないのかな」

■今後の予定を聞かせてください。

「4490 Recordsはまだこれまで通りに続くよ。新しい人たちやバンドと出会い、新たな友人となるのは最高さ。そしてレーベルとして一緒に作業をしていく。近々、いくつかリリースする予定があるんだけど、間近なのはSNAGGLETOOTHの新しい7"EPだね。あぁ、2016年にシンガポールへ戻ったとき、ハードコア/パンクのレコード・ショップをオープンさせたいものだよ、ハハハ…。今のところは、こんなところだね」

■インタヴューさせてくれてありがとうございます。日本の読者にメッセージを。

「差異なんてものには構わずに、お互いにサポートし続けていこう。だってハードコア/パンクは、このイカレた世界で僕らが正気を保つための唯一の選択肢なんだから。シンガポールから平和と団結、そしてたくさんの愛を。DIYよ、永遠なれ!」



http://4490records.weebly.com/
https://www.facebook.com/4490Records
4490records@gmail.com

■サシで2人がちゃんと話すっていうのは、これまでにありましたか?

大越「ないですね、初めて。っていうか需要あるの、これ(笑)?」

■僕が、"面白いかな?"って思いついただけなので(笑)。

大越「ドール廃刊のA級戦犯3人のうち、2人を呼んで何を聞くっていうんだ(笑)」

■3人なんですか?

大越「僕らともう一人は塚本さん」

行川「いや、戦犯はトップの3人だよ。森脇と相川と塚本だね」

■あぁ、偉い順ですか(…困る)。

行川「今日は珍しくMOTORHEAD(のTシャツ)じゃないんだね」

大越「散々悩んだんですよ、STOOGESにするか、月野りさ(AV女優)のTシャツにするか」

行川「それ(STOOGES『FUN HOUSE』のジャケットがプリントされたTシャツ)は買ったの?」

大越「これは2004年の(渋谷)AXのライヴで。ライヴが終わった瞬間に物販に一番乗りで駆けつけて。あのときは後ろの方で観ていて、"いやー、STOOGESをこんな後ろでまったり観ている俺がいる。年をとったもんだ"と思いましたけど、あれがもう10年前ですからね」

行川「けどあのライヴはイマイチだったかなぁ」

大越「イギーの昔からのファンで、来日公演を観た人って大体そう言うんですよ。海外で見ている人は、"(日本では)どうしてあんなに過剰なサービス精神があるんだろう?"って」

行川「そうそう、それをどうとるかっていう」

大越「海外だとイギーはもっとカリスマ性を持って、ドーン!と出て来るみたいですけど、日本だと過剰なサービス精神が出ていて」

行川「あれは日本だけなの?アメリカだとそうでもないのか」

大越「でも、『淫力魔人(RAW POWER)』を完全再現したライヴがあったじゃないですか。DVDにもなったやつ(『実演!淫力魔人』)。あれを観ると(客席に)ガンガン飛び込んでますよね」

行川「『BLAH BLAH BLAH』のとき(の来日公演)も見逃したな。チケットが取れなくて」

大越「俺は中野サンプラザの後ろの方で見ましたよ」

行川「で、当時、もうドールで書いていたから事務所に行ったら、"チケット余っていたんですよ"って言われて。"エーッ!"ってなったね」

■それっていつ頃の話しですか?

弊誌読者さまにはもちろんお馴染みでございましょう、ライターの行川和彦氏と大越よしはる氏。
某日、何とはなしに「行川さんと大越さんが対談したら面白いんじゃなかろうか」と思い立ち、9月8日東京は新宿の喫茶店「西武」にて、その対談を執り行ってみましたところ、長い…、実に長い…、3時間3分45秒にも渡る長丁場と相成りました。
30代の若輩者である私は内心、「この2人は一体何の話しをしているんだ…」と思いつつ、フンフン頷いていたのですが、恐らく50代前後の読者さまにとっては、膝を打たずにはいられないネタのオンパレードかと思います(※行川さんは51歳、大越さんは49歳)。
とは言え昔語りに限らず、物書きとしての意識、仕事への取り組み方などなど、種々雑多な話題が無秩序に飛び交いますので、知られざる2人のバック・グラウンド含め、ジックリとご堪能頂けますと幸いです。

行川和彦 VS 大越よしはる
実録！二〇〇〇〇文字対談



行川「86年かな」
大越「えーとね、『BLAH BLAH BLAH』は89年の1月」
行川「いや、86年じゃないかな。僕がドールで書き始めたときだから」
大越「あぁ、89年は『INSTINCT』だ。失礼。『BLAH BLAH BLAH』のときは俺も見てないです。『BLAH BLAH BLAH』のときはラジオで、東京FMで聴いて」
行川「『BLAH BLAH BLAH』は好きだったからね。けどその前の来日公演が最悪で」
大越「初来日でしょ。あれのブート持ってますよ」
行川「イギーのブートは結構持っているの？」
大越「たくさん持っていますよ」
行川「セミ・オフィシャルじゃなくて、ホントのブートも？セミ・オフィシャルのは結構買っていたけどね。今は買ってないけど」
大越「ブートは散々買った。曲目とかもデタラメでいかにもブートっていうやつ。日付とかも間違えているようなの」
■2人に任せておけば、勝手に話しが進みますね(笑)。
大越「いやいや、実のある話しは出ないですよ、これ(笑)」
■今ではドールを知らない若い方もいらっしゃるでしょうから、2人の簡単なプロフィールを押さえたいんですが。…まず行川さんはDAMNEDのライヴ・レポートを86年にドールで書いたのが初めて？
行川「それが6月か7月売りの号で。当時のドールは隔月だったよね。"読者のレポートを募集します"っていうコーナーがあって。それをやってみたら通って。"ちょっとライターをやってみたい"って。それから今に至る。大雑把に言うと」
■専業のライターになったのは95年ですよね。
行川「最初の頃は(あまり原稿を)書いてないしね。2ヵ月に一冊しか出ないわけだし、5年くらいはドールだけで細々と。ミュージック・マガジンとCDジャーナルで書くようになって、そっからだね(専業になったのは)」
大越「俺がGUITAR WOLFを聴き始めたのって、行川さんのミュージック・マガジンの記事がキッカケでした」
行川「インタヴュー？」
大越「いや、自主制作盤紹介のところ」
行川「あぁ、『RUN WOLF RUN』？」
大越「そうそう。それまでも名前は知っていたんですよ。BARN HOMES(西新宿のレコード店)とか行って、"GUITAR WOLF？なんだろう、これ？"って。それで行川さんの記事を読んで、"これは聴かなきゃダメだ！"ってなって。その頃はまだバンドをやっていたんですけど、リハの前にレコードを買って。いつもベースのやつの家に一泊してから翌朝、リハに行くんですけど、ベースのやつの家に帰ってから聴いて、2人してゲラゲラ笑って」
行川「ていうか、バンドの経験はないのかなと思っていたけど、あるんだ？」
大越「あります。90年代前半に、歌謡プログレを」
行川「そうなんだ。パートは？」
大越「キーボードが難波弘之の大ファンで、キーボード・トリオだったんですよ。キーボードとベースとドラム。で、俺がドラム・ヴォーカル」
■音源とかは？
大越「ないです。ライヴもやってない。リハだけやって終わりました。ずーっとリハやってましたね、アレンジが決まらなくて。しばらくやって慣れてくると、キーボードがアレンジを変えて、また覚え直しみたいな。5年くらいリハだけやって終わりました」
■その頃ってLSD(大越さんが発行していたファンジン)は出していたんですか？
大越「出していました」
■ジャケットも手描きで。
大越「そうそう」
■それをドールに送って。
大越「後ろの文通欄(MIXING ROOM)のところに、"ファンジン作りました"って。そうしていたら、CAPTAIN TRIP RECORDSの松谷さんと仲良くなって、その引きでBLUE CHEERとDEVIANTSが来日したときに、"インタヴューやってくれ"って。それがドールでのデビューですね。その前からCAPTAIN TRIPのライナーとか書いてて。文章でお金をもらうようになってから数年後の話ですね」
行川「僕が大越くんを知ったのもそれが最初だったね」
■それは何年くらいの話しですか？
大越「えーとね、BLUE CHEERとDEVIANTSの来日が99年の2月」
行川「LSDはもっと前か」
大越「LSDは89年から。大学生のときから音楽サークルでファンジンを作っていたから。音楽サークルだけど演奏しないでロックを聴いてダラダラとダベるサークル。そこで作っていたんです。卒業して、一人で始めたのがLSD」
行川「お店とかで売ってた？」
大越「(学生時代のファンジンは)売ってたのかな？配布したのかな？学内で売っていたような気がするけど、覚えてないですね」
行川「あとは、ドールの(MIXING ROOMの)"売りたし/買いたし"？」
大越「その頃は全然。LSDを作り始めた頃は札幌で。で、新潟に行って、その頃からドールに送って。(欲しい人には送料分の)切手だけ送ってもらってタダで発送するっていう」
行川「どこ出身なの？」
大越「北海道です」
行川「新潟っていうのは？」
大越「仕事です。新潟、群馬、埼玉と全部仕事で。職場が変わっても引っ越すのも面倒で金もないから、埼玉ではずっと同じ場所に住んでいますね。一時期、都内でも仕事をしていたんですけど、そのときも埼玉から通っていました」
■ライヴとか(電車で来るの)大変じゃないですか？
大越「けど新潟よりは全然いいですよ。新潟、群馬に住んでいたときは泊まりですよ。MOTORHEADを初めて観たときもホテルをとって行って、DEVIL DOGSを初めて観たときもホテルをとって行って。だから埼玉は全然楽勝です」
■2人が初めて会ったときのことなんて、…覚えてないですよね。
大越「なんで会ったのかなぁ。ライヴだったのは間違いないけど」
■お互いの原稿は読まれていたと思いますが、何か感想とかはありましたか？
行川「詳しい人だなぁって」
大越「(笑)」
行川「ファンジンを自分で作るだけはあるなぁって。あと、分かりやすいよね、分野的に。だからさっき言っていた歌謡プログレってのが"エーッ！"って意外だったけど。書いている分野的には王道だと思う」
大越「王道ですかね？」
行川「イギー、MOTORHEAD、BLUE CHEER。どういう王道かは分からないけど、昔ながらのロック・ロックした感じの」
大越「俺は自分ではニッチだと思っていますよ。俺がMOTORHEADを聴き始めた頃って、メタルからもパンクからも相手にされていなかったですからね。80年代。"MOTORHEADが好きだ"って言うと、周りのメタル好きは"あんなのメタルじゃない"って言うし、一方パンクの人は"あんなのパンクじゃない"って。まぁ、パンクではないんですけど、どっちからも浮いていたんですよ」
行川「MOTORHEADは最初はどこから？」
大越「『NO REMORSE』。あの頃にラジオで(『NO REMORSE』に収録されている)"KILLED BY DEATH"がかかって。それが最初じゃないですかね。それから中古レコード屋に行って、『BOMBER』や『ACE OF SPADES』を買って。とにかく若かったので、エクストリームなものを求めていたんですよね。10代だっ

たから。で、すぐにMOTORHEADじゃ物足りなくなって一気にVENOMに行くわけですよ。並行してハードコアも聴いて。ところがそうすると今度はロックンロールに戻りたくなったわけですよ。で、結局MOTORHEADとSTOOGES、あとBLUE OYSTER CULT」
行川「元々はどういうところからロック的なものを聴くようになったの?」
大越「全盛期のYMO。俺、(当時は)モミアゲなかったですもん」
行川「YMOは見たことあるね。まだそんなに有名じゃない頃、79年。アメリカかなんかのツアー終わりで、TUBESの来日公演に出ていたね。あれが僕が初めて見た外タレで。TUBESの前座でYMOがやっていた」
大越「レコード・コレクターズで連載していたアルファ・レコードの歴史で、その頃のことがよく載っていましたね。外タレの前座じゃなくて、(YMOを)スペシャル・ゲスト扱いするよう、アルファの関係者が尽力したみたいですよ」
行川「YMOもアルファだったか。TUBESもアルファだったね」
大越「よくある日本人の前座じゃないように。イメージ戦略みたいな」
行川「ステージも豪華っていうか、よくあるホールのライヴじゃなくてね」
大越「行川さんはその頃YMOを聴いてたの?」
行川「いや、聴いてない(笑)。TUBESを見に行っただけで」
■YMOはどうでしたか?
行川「覚えやすい曲だったね。中国の人民服の格好してて。全然、細野晴臣とか高橋幸宏とかの知識もなかったからね。日本のロック、サディスティック・ミカ・バンドとかはっぴいえんどとかは、名前を知っているかどうかくらいで聴くことはなかった。洋楽偏重だったから」
大越「洋楽偏重と言っても、いきなりパンクから入ったわけじゃなく普通のロック、っていうのも変だけど、そういうところから入ったんですか?」
行川「大元で言えば太田裕美だよね」
大越「やっぱりね、出たね(笑)!」
行川「レコードを買い始めた大元は太田裕美。その前にも山口百恵とかは買っていたけど、集め始めたのは太田裕美」
大越「太田裕美はブログでも炸裂していますよね」
行川「(太田裕美のライヴを)去年見て感銘を受けたけど(笑)、今年の3月に見たのは頂けなかったね。自分が見たくないものだった。あれがDVD化されるというから、値段が下がってから買おうと思っている」
■それでも買うんですか(笑)。
行川「思い切り値段が下がってからね。筒美京平の曲ばかりを歌っていてね、そういうのは見たくなかったから頂けなかった。去年に見たときは、"木綿のハンカチーフ"も"赤いハイヒール"も外して、マイナーな曲をいっぱいやっていたから。LPに入っていた曲をね。だから、当時のLPを聴き込んでいた頃の記憶が蘇ったというのもあったのかもしれない。で、まぁ太田裕美から聴き始めてラジオでFMを聴くようになって、ロックや洋楽、AEROSMITHとかを聴くようになって今に至る」
大越「そう、情報源はラジオでしたね。とにかくラジオ」
行川「80年代前半くらいまでかな、音源を入手するのがまず難しかったから。エア・チェックだったね」
大越「レコードを買う金もなかったし」
行川「80年代半ばになるとテープ・トレード。ドールで結構コネクションが出来て」
大越「ラジオって、メインストリームしか流れない印象があるけど、一日かじりついていれば何でも流れてきますよね。俺、PISTOLSもCLASHもSTRANGLERSも、最初は全部ラジオで聴きましたよ」
行川「番組は何を聴いてた?」
大越「PISTOLSやCLASHを聴いたのは、FM東京系で平日の夕方にやっていた、クラリオン提供で麗美って娘がパーソナリティをやっていた番組で。本当、選曲が幅広くて。STRANGLERSの初めて聴いた曲が"NO MORE HEROES"、CLASHは"反乱ワルツ(REBEL WALTZ)"だったんですよ。"これがCLASHなのか?"ってなりましたけど。PISTOLSは"PRETTY VACANT"でしたね。何の番組だったかは覚えていないけど、レコードを買うのはそれよりも後ですね」
行川「80何年くらい?」
大越「85〜6年くらい。レコード持ってなくて、レコード・プレイヤー自体持ってなかった」
行川「大越くんは今、何歳?」
大越「49」
行川「49?!2つしか違わないんだ。そのわりには世代的なギャップが」
大越「ずっとYMOでしたからね。YMOが終わっちゃったときに、ファッション雑誌を読んでいたら、"モテる/イケてる条件"として"ベストヒットUSAに出て来る程度の洋楽の知識が必要"って書いてあったんですよ(笑)。"そういうもんなんだ"って、ベストヒットUSAを見たら、いきなりそこでMIDNIGHT OILの"POWER AND THE PASSION"のPVを見てしまい、人生が狂ったんですよ。ピーター・ギャレットがタコ踊りしているのを見てね。ベストヒットUSAを見ていると何でもかかるから、最初はビリー・ジョエルとかCULTURE CLUBとかを聴いていたんですけど、すぐに泥沼化」
行川「ベストヒットUSAは貴重だったね。まだそんなにテレビで洋楽がかからない時代だったから」
大越「しかも映像が見られるという」
行川「話しが戻るけど、TUBESを知ったのも映像からだったね。78年か79年に、アルファ・レコードが提供/スポンサーをしていた番組で渋谷陽一がビデオ・ジョッキーをしていて。僕は渋谷陽一信者だったからね(笑)。アルファ・レコードの(アーティスト)しか流れないような番組だったけど、POLICEを知ったのも、TUBESを知ったのもその番組だった。映像の力はでかいね」
大越「俺はその頃はまだYMOだったので。洋楽のその辺を聴き出すのはちょっと後なんですよ」
行川「洋楽を聴かなかったのはなんで?」
大越「情報がなかったんですよ。YMOだけを追っかけている分には、テレビで曲が流れていたりしましたけど、洋楽のミュージシャンはそこに出て来なかったので。その頃に観ていた番組が、ブログにも書いたんですけど、2つあって。HOT TVっていう日曜の午前中にやっていた、鈴木ヒロミツが司会の"イカ天"の先祖みたいな番組。前半にPLASTICSとかが出て来て、後半には勝ち抜きバンド合戦があって。その番組で最初のグランド・チャンピオンみたいになってメジャー・デビューしたのがSKIN」
行川「あっ、(その番組)見た!SKINのレコードも持っているよ。ヴィニールの特殊ジャケットみたいなやつ」
大越「前半がニューウェイヴみたいなノリで、後半は日本のアマチュア・バンドが出る。並行してYMOを聴いていたから。で、NHKを見るとYMOのつけ合わせみたいな感じでRCサクセションが出ていたりして、まずそのへんから。もう一つの番組が、同じ頃に平日の夜にハウス食品一社の提供でやっていた、アップルハウスという番組があって。司会が加藤和彦と竹内まりやだったんですよ。全盛期の竹内まりや。そこで毎回、エンディングで加藤和彦と竹内まりやが週代わりで歌うんですよ、生で自分の持ち歌を。そこで加藤和彦を聴いてガーンッ!とショックを受けて。"うたかたのオペラ"とか、一番おしゃれで格好良かった時代の加藤和彦」
行川「加藤和彦が亡くなるちょい前に、HEADPHONES PRESIDENTのヴォーカルのANZAと加藤和彦、あとそのへんの有名な人らによるバンド(VITAMIN-Q featuring ANZA)のライヴを渋谷のAXで見て、(加藤和彦が)

"このバンドはこれが最初で最後のライヴになると思いますけど"って言っててね。自殺する一年くらい前だったのかなぁ」
大越「イヤだなー、イヤなエピソードだなぁ」
行川「でも大越くんは結構オシャレっぽいのが好きな感じじゃない？レミーとかも逆のオシャレだけど(笑)」
大越「当時はYMOと加藤和彦を聴いて、PLASTICSにもヤラれたり、立花ハジメのソロを聴いてライヴにも行ったりしてて。ロックンロールってのは全くダメでしたね。"ハード・ロックなんてもう勘弁して"って。あの頃は、勝手にハード・ロックとかヘヴィメタルに対して、"ステージで猿を殺して脳味噌を喰ったりするんでしょ"って本気で思っていましたから。それは何でかと言ったら、ヤング・ミュージック・ショーでリッチー・ブラックモアがギターをバッコンバッコンぶっ壊していて、"…うわー"ってひいて」
行川「ヤング・ミュージック・ショーってNHKでやっていた番組？あれも貴重だったね」
大越「RCサクセションもロックンロールというよりも、"坂本龍一と一緒にやっている人のバンド"って印象でしたしね。ロックンロールのノリが受け入れられるようになったのはずっと後」
行川「何がキッカケだったの？」
大越「何だったろう？洋楽を聴き始めてすぐにメタルとパンクに行っちゃって。IRON MAIDENで大ショックを受けて、しばらくJUDAS PRIESTとかに行ってて。メタルって白人の音楽じゃないですか。ハード・ロックはブルーズから来ているけど、メタルはそれを漂白して。ブルーズ・黒人色をなくしたのがヘヴィメタル。それに行っちゃってから、黒っぽいのがダメで。黒いのは良いんですよ。ブラック・コンテンポラリー、マイケル・ジャクソンやプリンスとかは好きだったんですけど、WHITESNAKEとかソウルフルなロックがダメで。それがどこで転換したんだか。多分、MOTORHEADを聴き込んでいくうちに段々、白人の漂白音楽の根っこに黒人音楽があることに気がついてからかな」
行川「YMOとメタル、白人音楽って、黒っぽくないというのが共通しているよね」
大越「そうそう、それで黒っぽくない洋楽に入っていって。それが極端を求めるメタルやハードコアへと繋がっていくと思っていて。後に遡って細野晴臣のソロとかを聴くと、真っ黒じゃないですか。ビックリしました。拒絶反応が最初はありましたね」
行川「その辺は全然聴いてないな」
大越「だから年齢は近いけど、バックボーンが全然違いますよね」
行川「70年代の日本のロックものって未だに全然聴いてないね。基本、敵っていうか。ああいうのが嫌だからパンクを聴いていたし。グダグダ感がイヤで」
大越「まぁね、あの頃のテレビで見られた日本のロックって、基本芸能界ノリだったじゃないですか。俺なんか北海道にいて、結局テレビしかなかったですから、FRICTIONなんかも知らなかったですから。行川さんはどうやって情報を手に入れていたんですか？」
行川「ロッキング・オンとかかな。雑誌は買ってなかったの？」
大越「俺は宝島」
行川「やっぱりオシャレだね」
大越「インディーズ・ブームの頃に宝島を買ってて。それでFRICTIONとか知って」
行川「それだとかなり後だなぁ。僕はやっぱりロッキング・オンとか買って、その前だとミュージック・ライフを読んでいたけど、"ロッキング・オンは違う"って思ったね。載っているバンドはQUEENとかだからミュージック・ライフと一緒なんだけど、(ロッキング・オンは)"難しいこと言っているなぁ"って。渋谷陽一はそんな難しいことは言わずに明快で、読みやすかったけどね」
大越「80年代のロッキング・オンは、俺はアンチだったなぁ」
■どんなところが？
大越「読者投稿で成り立っていたじゃないですか。自分語りが過ぎて。何かのバンドについて2ページの見開きがあるんですけど、"彼女とどうしたこうした"が延々と続いて、最後にバンドのことが3行くらいっていう記事が多過ぎたんですよね」
行川「90年代頭に僕は(ロッキング・オンを)買うのを止めたんだ。よく読んでいたのは80年代初頭まで。要は渋谷陽一がよく書いていた頃までってことなんだけど。渋谷陽一はどんどん書かなくなったから。今に繋がる事業を一生懸命やるようになって(笑)」
大越「あと架空インタヴューが大嫌いで」
■え、架空ですか？やってもいないのに？
大越「勝手にミュージシャンの発言をインタヴューみたいに書くっていう」
行川「昔はまだロッキング・オンが力を持って



いなくて、インタヴューもとれないから、勝手に(笑)。70年代から、(イギリスの音楽誌の)ニュー・ミュージカル・エクスプレス(NME)とサウンズとは提携して転載してたよね。サウンズはOi!とかメタル、ニュー・ミュージカル・エクスプレスはニューウェイヴとかトンがっているやつを載せてて」

大越「今回俺が(連載で)書く原稿のニュー・ウェイヴ・オブ・ブリティッシュ・ヘヴィメタル(NWOBHM)って言葉自体、サウンズが言い出したことだし。しかし、延々とジジイの昔語りになっているけど、これ大丈夫?」

■ちょっとずつ現代へ話しを向けていきます(笑)。

行川「ドールの戦犯の話しでも」

■その話し好きですね(…困る)。

行川「今から井の頭へ襲撃に行こうか(笑)」

■ところで、ドールが終わるっていうのはショックでしたか?完全に他人事のように言ってますけど。

大越「ショックでしたね。たしか他のライターにはギリギリまで(廃刊を)知らせなかったんですよね。俺と行川さんが多分、最初に連絡をもらった外部ライターだったんじゃないですかね」

■あぁ、たしか連載があったから、とっとと知らせた方が良いってなったような…。

大越「そうかぁ、遂にこの日が来たかって」

行川「まだ、雑誌がドンドンなくなる、途中の時期だったような。ミュージック・ライフはとっくになくなってて、他はまだ残っている時期だったかな。その後の2、3年間にドンドンなくなっていって」

大越「ちょっと後ですかね、シンコー(ミュージックが発行)のDIGがなくなって」

行川「クロスビートはよく分からない終わり方で。けど、ドールはびっくりしたなぁ。なくなるとは思っていなかったから。けど、全盛期のメロコア・バブルの頃と比べると広告も1/50くらいになって」

大越「広告と文通欄とかを除いた残りの記事、その一割を俺が書いていたりして、"これはまずいだろ!"って。よく特集があったじゃないですか、一つのテーマで、STOOGES特集とか。あれ、本当は他の雑誌みたいに複数のライターで別々の視点で書き分けないとダメじゃないかと思っていました。一つのテーマ、全部俺が書くっていうよりも。そう思いながら書いてました(笑)」

行川「それは良し悪しな気もするけど。一人の人が一つの姿勢で全部書いたほうが良いときもあるし」

大越「レコード・コレクターズなんかは一人のアーティストの、"何年から何年までは誰、何年から何年までは誰"って、全部分けてライターに書かしていますよね。ヒストリーと考察は別の人が書くとか」

行川「終わる2、3年前とかは一人で10何ページも書いていたから、"行川にあんまり書かすな"ってストップが入ったりしたなぁ。あと、どうでもいい記事が多かったかな。広告と関係ない、どうでもいい記事が。広告と関係あるのはしょうがないけど」

大越「末期は明らかに、数少ない広告に寄っかかっている記事が多かったですよね。表4(裏表紙)にメジャーの、ドールっぽくないスラッシュ・メタルの広告が載ったら、インタヴューも載っているとか」

■うん、そこいら辺のやり方がすごくイージーだったのかもしれませんね。

行川「仕事していない人が2人いたからね、へっへっへっ(邪悪な微笑み)」

■(…困る)。

大越「後ろの方のJAP'S FRONT LINE(一ページのインタヴュー)で、広告と全然関係ない、どインディーのバンドとか、"インタヴュー載せましょうよ"って言うとやらしてくれて、その辺の自由度は高かったですよね」

行川「商業商業してなくて。まぁ、両極端だよね」

大越「俺の連載も内容については全く言われなかったし」

行川「日本のシーン的に(廃刊は)大きかったんじゃないかねぇ。ドールがなくなっただけじゃないだろうけど、バラバラ感が一層広まった感じ」

大越「紙媒体は必要だと思うんですよ。だからドールがなくなった後に色々と出てきたし。エルジンもその一つでしょうし」

行川「なんだかんだ言っても、ドールにはカラーがあったからね。山路くんはイヤかもしれないけど、ある種エルジンはその流れを汲んでいるところがあるかもしれない。表紙に日本人を載せない。載せないと思ってやっているわけじゃないだろうけど、ドールも80年代後半以降は日本の人は表紙に載せなかった」

■あー、それは"揉めるから"ってのが理由みたいで。

行川「"アイツが表紙でなんで俺たちは載せないんだ!?"ってなるのか」

大越「面倒臭いなぁ。けど不思議な話しで、ずーっと毎号エルジンで書かせてもらっているけど、どうして自分に需要があるのか分からない」

行川「唯一の皆勤だよね、僕は前号書かなかったから」

大越「そう、前号は"行川さんが載ってない!"って」

行川「やる気がなくて。高円寺のBASEのHPに載るじゃない、発売よりも先に内容が。それを見た人がメールしてきて、"行川さんの名前が載っていなかったんですが、書いてますよね?"って。"いや、今回は書いてないです"と答えたら、"それでも買いますけど、(行川さんの記事を)期待していますよ"と。そうか、頑張ろうかなと」

■そうです、頑張って下さい(笑)。

行川「まぁ、ドールはショックだったね。"ドールの行川"って思われていたし」

大越「良い意味でも悪い意味でもドールはデカかったですね。ずーっと"ドールの大越さん"と言われて。"いや、俺はドールの大越さんじゃないから"って」

■ドールの読者さんって、"ドールしか読まない"って方が多かったから。他の音楽誌でも2人が書いていることを認識していなかったり。

行川「編集者とライターを分けて考えてない、よく書いているから社員だろうと思ったりするんじゃないかな」

大越「よく書いていたな〜。30時間寝ないで書いたりしてたから」

行川「山路くんの話しによると、大越くんはすごく緻密に書いているらしいじゃん。誤字脱字がない」

大越「それは基本じゃないの?!」

行川「僕は誤字脱字だらけだから。基本が出来ていない(笑)」

■本当、大越さんの誤字脱字のなさはトップ・クラスですね。

行川「締め切りは守るけど、誤字脱字は何十年ライターをやってても出来てない」

大越「俺は書いている時間よりも見直している時間の方が長いですもん」

■あぁ、やっぱり。

大越「一回原稿が出来上がったら次の日に読み直して。直すところがなかったら送ろう、と。でも大抵直すところがある。で、直す。そうしたらすぐに送らないで明日また見直して、それで直すところがなかったら出そう。それを何日も繰り返して」

行川「それで締め切りに遅れないということは、何日も前に仕上げているわけだ。すげーな。ライターの鑑だね。それだけやっているからミスがない。僕は一回見直したらすぐに送信。で、すぐに山路くんから返信が来て、"念のため確認ですが、ここはこうですか?"って」

大越「この間のグラム・ロックの記事(VOL.15に掲載)も、依頼もらってから2日で書いて、あとは延々と直しです。そんだけ直して誤字脱字はなくても、本になってから"ここはこう書くべきだった"とか、"これを盛り込ん

でおくべきだった"、"こう書くべきではなかった"とか出てきて。会心の原稿って未だにないですね」

行川「会心とは言わなくても、"これは!"っていうのは?MOTORHEADの"レミー年表"(映画『極悪レミー』のパンフレットに掲載)?」

大越「どれでしょうね。あの"レミー年表"も、ブルーレイの時に直しましたからね。レミーの自伝を読み直して、"ヤベッ、手首を折ったんじゃなくて足首を折ったんだ!"とか。今、ブログで書いている記事も時間があれば読んでは直していますね。ブログの良いところは書いちゃってからでも直せるところで」

行川「ブログも毎日書いているの?」

大越「ほぼ毎日」

行川「いつ書いているの?仕事が終わってから?」

大越「そうっすね。晩飯食ってから、ブログ書いてそれから原稿。が、大体のパターン。書かないと死ぬんです」

行川「僕は時間があるときにまとめて書いているね。ちょっと取り組み方が違うね。性格の違いかもしれないけど」

大越「ライヴに行って時間が遅くなったとかじゃない限りは、ほぼ毎日書いてて。基本ネタもなくならないんですよね。"いついつにこれを書く"っていうのが、2週間後まで決まっていたり」

行川「大越くん、A型?」

大越「Aです」

行川「やっぱりな。僕もAだけど、違うなー。典型的なAだよね。山路くんはBだけど緻密だから血液型は関係ないかもしれないけど、大越くんは会った瞬間にAだと思ったね」

大越「(笑)」

行川「とりあえず固有名詞を間違えるのはまずい。"てにをは"はともかく」

大越「たまーに俺もありますよ。記憶に頼ってスラスラ書けているときなんかは。この間もSLADEのカヴァー曲の曲名を間違えて書いていたり(※VOL.15掲載時には修正済み)」

行川「知っているやつ程危ない」

■けど、2人とも締め切りは厳守ですよね。当たり前っちゃ当たり前ですけど、守らないライターさんの方が多いくらいです。

大越「生業じゃないですけど、仕事は仕事だから。音楽だけじゃなく他でも書いているので、基本、締め切り厳守は当たり前ですよね。大雑把な振られ方をしたら、自分の解釈で書いて。"この原稿でOKかな?"ってときは極力早めに送って。この間も締め切りの3日前に送って、"何かあったら連絡ください"と」

行川「僕はある時期からそれをやらなくなっちゃったね。面倒臭いやつほどギリギリだね。ディスク・レヴューとか、やりやすいのを先に書いて、長い原稿はギリギリで。情報量を盛り込むのが大変。違ったことを言わなければならない、発見がなくてはいけない、インスパイア/人に考えさせなければいけないと、色んなことを考えて。20代と同じようには書けない。今まで言われていないような視点が必要だし。あとは年齢の問題だよね、気力がない(笑)。ただ、締め切りを守れないときは事前に連絡して。それ(事前連絡)をしなかったことはないなぁ」

大越「俺は長いの程早いですね。勢いでやって、見直して、みたいな。短いレヴューのほうが大変かも」

行川「本は読むの?」

大越「今は読んでいるかもしれない。雑誌を買わなくなったので、お金がないから。うちに昔買って一回読んだっきりとか、ろくに読んでいない文庫本とかがドッサリあるんですよ。最近はそれを読み直していますね」

行川「それは小説?本を読む人の文章だとは思っていたけど」

大越「大体小説。最近は(ウィリアム・S・)バロウズを読んでますよ。やっぱおもしれー」

■行川さんはほとんど本、読まないですよね。

行川「だからメチャクチャなんだよね。そう思うよ。読む人ってうまいというか、文章としてちゃんとしているよ。新聞は読んでいるけど、活字を読むのは新聞くらいかなぁ。本は小学生の頃は、江戸川乱歩を読んでいたけど」

大越「乱歩はこの3人共通ですね」

行川「小学生の頃だけだけどね」

大越「猟奇ものは?"石榴"とか」

行川「いや、子供向けのだけだね」

大越「俺は乱歩というと猟奇ものだけどなー。"パノラマ島奇談"とか」

■あぁ、エログロですか。

大越「"パノラマ島奇談"は乱歩だっけ?夢野久作?バロウズの前に江戸川乱歩と夢野久作を続けて読んでいたから、ごっちゃになっちゃって」

■"パノラマ"は乱歩ですね。

行川「"ドグラ・マグラ"は読んだなぁ。ていうのは、YBO²で"Doglamagla"という曲があったから。そういうキッカケがないとダメだね」

大越「そういうのありますよね。俺も"スローターハウス5"という映画を子供の頃にTVで観て、ずっと頭の中に残っていて。ZELDAを聴いたときに"スローターハウス"という曲があって、"アッ!"ってなって。それで"スローターハウス5"の原作を文庫本で読んだりして。夢野久作もYBO²を聴いていなかったら、知るのはもっと遅かったかもしれない」

行川「YBO²は聴いていたの?あれもプログレだけど」

大越「大好きでしたよ。あの頃、インディーズ・ブームだったじゃないですか。だから、GASTUNKとYBO²でしたよ」

行川「(YBO²と)仲良かったんだよなぁ。あの頃が一番ライヴに行っていたよ」

大越「そうなんですか。俺はドールで書いていた頃が一番行っていましたね。連載持っていた2000年代前半。年間140本とか見ていましたから。手帳もライヴ予定でみっちり」

■今はそれほどでも?

大越「それほどどころか月に1、2本です。全然行ってない」

行川「僕もそれくらいだね。大越くんは仕事的に忙しくて?」

大越「仕事もありますけど、金もない気力もない体力もない。何もないですね。たまに観て来たらそれもブログで書いていますけど。行けても行かないっていうのが最近多いですけどね。それで後悔する」

行川「最近は結構諦めているのかなぁ。日本もの含めれば、(ライヴが)いっぱいやりすぎていて。選ぶのもお手上げだし。ビッグ・ネームだと6000〜7000円はするからそんなに行けないし。日本のバンドとか、見に行って疲れるだけっていうのが多い」

大越「残念ながら体力は落ちましたね」

行川「"このライヴを見て何があるのかな?"というのが非常に多い。新鮮に感じられなくて。事前に分かっちゃうような。ブログでも書いた桜台のライヴ[東京・桜台POOLで8月30日に開催されたイヴェント"MODERN"。出演はGRIM、透過性分子、冷泉(REIEN)、ZINGA(Vasilisk + Ungeziefer)、橋本孝之]は新鮮だったな。昔、80年代に見ていた人がいっぱい出ていたんだけど、場所も良かったね。パンク、ハードコアも好きだけど、余程じゃないと」

大越「俺は逆にそれはなくて、行けるものなら全部行きたい。行けば大概発見はあるから、現場に出たいんですけど、なかなか難しくなっていますね。そういえば行川さんと最後に会った現場って去年のD・O・Tのレコ発でしたね」

行川「最近行ったライヴは?」

大越「組織暴力幼稚園。メンバーから招待されて。俺が中学生棺桶〜例のKをずっと追いかけていたのを羨ましく思っていたみたいで」

■大越さんが、中学生棺桶〜例のKに入れ込んでいるのを?

大越「そう。多分、ブログとか雑誌の記事を見て"この人なら自分たちの音楽を分かるんじゃないか"と思ってくれたみたいで。なかなか面白かったです。神楽坂EXPLOSIONがゴミだらけになって。ゴミ箱を引っくり返して最後は

ポリバケツいっぱいの生のイカをぶちまけて」
行川「僕はそういうのは勘弁だな。音楽は素晴らしいことをやっているのかもしれないけど、またかよって」
■大越さんがポジティヴで、行川さんがネガティヴな感じですね(笑)。
大越「連載のタイトルが"VIVA HATE"だから。でもネガティヴなことを歌っているのに生のエネルギーに溢れているのとかもあって…。俺と行川さんで共通して入れ込んでいるバンドって多分、JURASSIC JADEじゃないですか。この10年くらい、全作レヴューしているんですよ。B.T.H. RECORDSからの再発もあって、あらかた聴いてて。先日FOLLOW UP(ディスクユニオン発行のフリー・ペーパー)で初めて(JURASSIC JADEのヴォーカルの)HIZUMIさんにインタヴューしたんですけど。素敵な人だなぁって」
■他に2人が共通しているバンドは?
行川「ANAL CUNTは?」
大越「ファンではないですね。共通項なら一番分かりやすいのはMOTORHEADだと思いますよ。あとAC/DCかな。2001年にAC/DCが来日したとき、俺もドールで書き始めてちょっと経っていた頃なんですけど、"行川さんが書いた来日特集があるはずだ!"と思っていたら、"載ってない!"って」
行川「横浜アリーナのライヴは行ったけど、どこか他の雑誌で書いた記憶があるなぁ」
大越「その後に来日したときに俺が特集を書いて、ちょっとリベンジを果たした気分になりました(笑)」
行川「(MOTORHEADの)『AFTERSHOCK』のツアー・エディションはもちろん買った?」
大越「買ってない」
行川「ああいう出し方をして欲しくないっていうのがあって。後からプラスされるじゃん。DVD付きのもあったり(『AFTERSHOCK』のツアー・エディションはライヴCDが付いた2枚組。他にはデジパックのリミテッド・エディションもリリースされている)」
大越「最近、そこいら辺を追っかけきれないんですよ。前は国内盤を買って、輸入盤も併せて買っていたけど、最近は追っつかない」
行川「ああいう、なんとかエディションを(通常盤の)後から出すのは勘弁してくれって」
大越「未だにMOTORHEADは大好きですけど、『WE ARE MOTORHEAD』を境にちょっとMOTORHEAD熱が下がったかなって」
行川「『WE ARE MOTORHEAD』は良かったね。来日公演も良かったし」
大越「LIQUIDROOM?」
行川「そうそう。あれが単独来日は最後だね」
大越「あとはサマソニとかね」
行川「(いつも被っている)テンガロン・ハットってレミーの影響?」
大越「全然関係ないです。2つあったんだけど、いつだったかな、暑くて電車の網棚に置いてそのまま降りちゃって。あ、山路さんに会った日だ。渋谷のO-NESTのライヴで山路さんに会ったんですけど、そのときに帽子がなかったんです」
■へー(全く覚えていない)。2人とも基本的に見た目が変わらないですよね。行川さんは長髪ですし、大越さんはテンガロン・ハットで。
行川「基本、バンドTシャツは着ているよね」
大越「そうですね、バンドTシャツに革ベストにハット。十何年変わってないですね」
行川「ライダースは持ってないの?」
大越「ライダースはないですね、似合わないんですよ。普通の革ジャンはありますけど」
行川「イメージ的にやっぱり革ベストだよね。MOTORHEADは何枚、何種類くらい持っているの?」
大越「さっぱり分からないです。少し前に、お金がなくてダブっているやつは売ったんですよ。だから減りましたね。80年代までのオリジナル・アルバムはCDだけでも3枚ずつ買っていましたから。国内盤、リマスター盤、そのリマスター盤が国内盤になったやつと。あとは紙ジャケだったりも。大体3枚ずつ。今は2枚ずつになってますけど。オリジナル盤に拘るのは全然ないです。廃盤でしか聴けないのは頑張って手に入れますけど、STIFFから出ていた7インチ(『LEAVING HERE/WHITE LINE FEVER』)。あれは廃盤専門店の郵便オークションで4500円だったかな。CDでバンバン出るようになってからは、廃盤をオリジナルで買うっていうのはしていないですね」
■行川さんはオリジナル盤を尊重するタイプ?
行川「テキトー。安ければ(笑)。あとはボーナス・トラックが多いとか。買い直すのも、単なるリマスタリングなら殆ど買わないかな。買ったのはTHIS HEATってバンド。ポスト・パンク〜プログレだけど、1stアルバムをLPでしか持ってなくて、CDで聴いたら"凄い!"と。LED ZEPPELINもCD買わなかったからね。最近ようやくCDを買ったくらいだから2種類しか持ってないし。POP GROUPもCDは一枚しかないな、2ndアルバムは3種類持っているけど。まぁ、ゴッドなんで(笑)。ところでレコードはどう管理しているの?地震(東日本大震災)のときに崩れたって言っていたけど。一部屋を置き場所にしているの?」
大越「一部屋半ですね。キャスターのついたCD棚があって、アルファベット順に全部並べていますね。震災でぐっちゃぐっちゃになったのを、一年くらいかけて整理して」
行川「ジャンルは関係なく?」
大越「もう関係なく」
行川「僕も昔はそうしていたんだけどね。そのほうが良いような気がするな。ジャンルで分けるとどっちに入れるべきか迷うし、どっちに入れたかを忘れるからね。今は国別にも分けているから、ヨーロッパ〜アメリカ、で、アメリカも70年代〜80年代と」
大越「迷いますよね。俺のCD棚は自分で見て面白いですよ。イギー・ポップの隣りに飯島真理、その間に飯田香織がある。AC/DCの隣りに安倍なつみとか」
■モーニング娘。は好きなんですか?
大越「昔は好きでしたね。困るのはBLACK FLAGなんですよ。最初はBLACK FLAGとROLLINS BANDを一緒のコーナーに入れていたんですけど、"オリジナル・メンバーじゃねぇしな"って、今はBLACK FLAGは"B"、ROLLINS BANDは"H"のところ、ヘンリー・ロリンズという仕切りで入れていて。出したいときに出せないとイヤなんですよ」
行川「自宅ではヴォリュームあげて聴いているの?」
大越「いや、流石に集合住宅なので、買ったCDを最初に聴くときはヘッドホン。レヴューを書くときもヘッドホン。それ以外はなるべくスピーカーで」
行川「なんで最初はヘッドホンで聴くの?」
大越「やっぱり、もれなくみっちり聴きたいので」
行川「大越くんの話しを色々聞くと、性格が全てに刻まれていると感じるね(笑)」
■ところで、2人ともインタヴューをするときって事前に質問表を作られますよね。
行川「表というかね、質問がどんどん出てくるから、グチャグチャで。自分でも読めなくなるけど(笑)」
大越「オレはワープロで作ってますね」
■中にはフリートークでやるライターさんもいますが。
行川「聞き落としちゃいけないものだけ書いておけばいいんだけど、"アレもコレも"ってなっちゃうからなぁ」
■インタヴュー中に心がけていることはありますか?
行川「口を挟まない、喋りたいだけ喋ってもらう。あとは突っ込みを入れる。相づちを打つようにはしているかな。外国の人の方が難しいね。自分で直接出来ないから。通訳さんを操るというかね、だからやりやすい人と、FUCK YOU!な"HATEリスト"に入っている通訳さんがいるからね。なるべく僕が言っていることを省略せずにそのまま言ってもらうようにしてい

る。通訳さんを通すときは質問を長くしないようにはしているか。ブライアン・バートンルイスに言われたのが、"あんまり質問が長いとリズム、会話のテンポが悪くなる"と言われて、"確かに"と」

■大越さんは?

大越「いくつかあるんですけど、一番大事にしているのは、必ず一つは嫌がられそうな質問をする。"はいはい、あーそうですか"では絶対に終わらせない。気を悪くするかもしれないことを言うようにしています」

■それで本当に気を悪くされて、険悪になったことはないんですか?

大越「ちょっと変な顔をされたのは何回かあります。ニュージーランドのD4にインタヴューしたときに、同じニュージーランドのDATSUNSのライヴを観た後だったもので、"DATSUNSはみんな女の子みたいに可愛い顔でしたね～"って言ったら、D4のメンバーが真顔になって、"僕たち不細工?"って。目が笑ってなかったですね。あとは基本的に最近のインタヴューは全曲解説してもらうことが多いですね。個別に曲について聞きながら、トータルでバンドの本質に迫ろうとする。バラードと速い曲が並んでいたとしても、バラバラの曲が並んでいるわけじゃないじゃないですか。バンドの基本姿勢は一貫したものがあるはずなので、1曲1曲について語ってもらいながら、そのバンドの根底に流れる本質をどうにか自分の文章で掬いとろうとしていますね。そしてテープ起こしをして記事にすることで、それが読者に伝わるようにしています」

■行川さんの原稿って、行川さん自身の感情が強く出ているように感じるんですが、意識はされてますか?

行川「普通は出るんじゃないかな。チャック・ベリーとかも、歌詞になんのメッセージもないとは言わないけど、そこには感情が出ているんじゃないの?ちゃんとやっていればね。大越くんの原稿にも、僕ほどじゃないにしろ、大越くんの感情が出ているだろうし。というので、一人称で"おれ"っていうのは使わなくなったね。"この文章でおれだとキツいかなー"って」

大越「雑誌がダメになって、ネットネットってなったときによく言われていたのが、"ライターのバイアスのかかった解説なんて何の意味もない"みたいなのがあって。アーカイヴとかエンサイクロペディアみたいな、"ただの情報が欲しいんだ"っていう言説があったんです。それは一面真実だけど、書き手の過剰な自分語りは別として、書き手のアティテュードが出ていないとそれは意味がないんじゃないかな、と。"自分にはこう聴こえる!"、"こう思う!"を出さないと。それが共感を得るかどうか、共感を得るに越したことはないけど、"なるほど"と思ってもらえたらこっちの勝ち、思ってもらえなければこっちの負け。(負けの場合は)何かが偏っているのかなって」

行川「ネットの文章って基本、情報だよね。だから、自分のブログは余計なことが書いてあるのによく一日300人くらいの人が見に来てくれているなと思うよ。ブログで扱っている内容のちり方もあるし。情報云々だけのネット、雑誌の文章に対するアンチはあるね。そんなのツイッターでやればいい」

■2人とも、"こんなのやりたい"っていう持ち込みをされないですよね。"このバンドを載せたい!"みたいな。

大越「それはやらなくなりました。JAP'S FRONT LINEのインタヴューとかも、持ち込んではいました。けど、忙しくなって持ち込む余裕がなくなったのと、連載を持って自分の好きなことを毎号2ページもらえていたので、そこでやっていた。特にドールが潰れる前にやっていたLUCIFER SAM'S DINERとか、何でも書いていたじゃないですか。あれは有名無名問わずにやっていたから。だから、書き始めた当初は持ち込んでいましたよ。BLUE CHEERとDEVIANTSのインタヴューのあとに、静岡のSTUPID BABIES GO MADのインタヴューを自分から持ち込んで、それからですね、継続的にドールで書くようになったのは。その次がSISTER PAUL。大きい特集だとデヴィッド・ピールを持ち込んだり。掲載を渋られたけど、"いや、この人が元祖パンクですから!"って半ば無理矢理突っ込んで」

行川「JAP'S FRONT LINEくらいかな。持ち込みはあるっちゃあるけど、そうやらなくても仕事がいっぱいあったからね。メロコア・バブルの頃とか、体を壊すくらい忙しくて」

■その頃と今の仕事量を比べると?

行川「1/4くらいかなぁ。あの頃は無理が。"この生活は続けられない"と。BRAHMANとかTHEE MICHELLE GUN ELEPHANTとか、毎月インタヴューしていたよ(笑)」

■大越さんは兼業のライターですけど、専業になろうというのはなかったですか?

大越「あんまりなかったですね。多分、完全に仕事にしちゃうと、自分の意にそぐわないことが増えるんじゃないかなというのがあって。自分の書く文章とか好きなバンドって、ニッチなものだと思っているので、それで一本立ちが出来るかといったら難しいかなと。今、結果的に音楽以外の仕事ももらえるから、物書きとしての仕事量は増えてきていますね。ドールがあった頃ほどじゃないけど、そこそこお金ももらっているし。それでもカツカツ以下の生活ですけどね」

行川「僕もカツカツ以下だね」

■まぁ、ここにいる全員がカツカツ以下ですよね(苦笑)。では、ここいらでまとめたいのですが、最後にエルジン読者さんに何か言いたいことがありましたら。

大越「おー、ミュージシャンのインタヴューみたい(笑)。そうですね、山路編集長が原稿依頼してくださる限り書きますので、どうか読んで下さい」

行川「"特にない"って言いたくなる気持ちが分かったよ、逆の立場になって(笑)」

■じゃあ、特にないですか(笑)?

行川「言い出すと説教みたくなるから。LOVE & PEACEとでも言っておくよ(笑)」

■ありがとうございました!

大越「お疲れさまでした!…大丈夫か、これ本当に(笑)」

行川「個人名が出てヤバいところはイニシャル・トークにしよう(笑)」

●行川和彦氏のブログ『なめブログ』
http://hardasarock.blog54.fc2.com

●大越よしはる氏のブログ
『LAZY SMOKEY DAMN!』
http://maruta.be/lsd_magazine



LASHING SPEED DEMONS VOL.17

EL ZINE的NWOBHM再検証

New Wave Of British Heavy Metal(以下NWOBHM)については、今は亡きDOLLの2008年10月号で書いたし(その時は一応IRON MAIDENをテーマにしていた)、それに加筆訂正したモノはDOLL廃刊後、俺のブログ「LAZY SMOKEY DAMN!」にもアップした(実はそれ以前、「ヘビメタさん」という書籍でも同趣旨の文章を書いている)。ここでまた書くことになったのは、例によって山路編集長のリクエストがあったからというのもあるし、何と言っても俺自身NWOBHMのバンド群が大好きで、ことある毎に書きたくなるから、というのもある。…というワケで、改めて(一応)EL ZINE向けっぽく語ってみようNWOBHM。よろしくお付き合いください。

TEXT:大越よしはる

NWOBHMについては、一応改めて説明しておいた方がいいだろうか。

音楽性の"進化"と共に商業化も進み、原初的な猛々しさが失われて行った70年代後半の英国ロック・シーン…にパンクが風穴を開けた後、唾棄すべき"オールド・ウェイヴ"のひとつに数えられたハード・ロック。しかし70年代末、若い世代によって、パンク由来のアグレッシヴさやDIY精神を取り入れた新種のハード・ロックが続々と登場(ロックの歴史が常に反動の繰り返しであることは、前号のグラム・ロックの記事で書いたとおりだ)。

英国の音楽新聞・SOUNDSの副編集長ジェフ・バートンは、旧来のハード・ロックとの差別化を図るため、新世代の英国ハード・ロック・バンド群を"New Wave Of British Heavy Metal"とカテゴライズする。その中から、IRON MAIDENをはじめとするヘヴィ・メタル戦士たちが世界へと雄飛…したりしなかったり。もの凄くざっくりと説明してしまえば、以上のような感じになると思う。1972年にアメリカのハード・ロック・バンドBLUE OYSTER CULTがデビューする際に用いられた"ヘヴィ・メタル"という言葉(元々はウィリアム・S・バロウズの作中に登場するジャンキー用語…つまり本来ドラッグ/サイケデリック関連の呼称)が、ここで改めてハード・ロックの新たなサブジャンルを指す名称として定着することになる。

パンク・ムーヴメントの時点で全英にインディペンデント/マイナー・レーベルが乱立したことは、NWOBHMに限らず、その後のロックに決定的な影響を与えている。レコードを自主制作するというのはそれ以前からあったことだが、それはあくまでも少数の例外で、バンドを組んでレコードを出すのはいわゆるレコード会社から、というのが音源リリースに関する基本的な認識だった時代…パンク・ムーヴメントは、そのような点でも革新的だった。

かくて、自主制作やらインディ・レーベルやらで作られた若いメタル・バンドのレコードが続々登場する。あのIRON MAIDENも、レコード・デビューは当時隆盛を極めたヘヴィ・メタル・ディスコ"BANDWAGON"に送ったデモ・テープを7inch EPにしたものだった。

俺はよくNWOBHMのことを"ハード・ロックのパンク・ムーヴメント"とか呼ぶのだが、技術や機材が整わなくとも、メジャーなレコード会社との契約がなくとも、とにかく初期衝動に任せてバンドを組んではすぐにレコードを出してしまう…という、NWOBHMによく見られた若いバンド連中の動きは、実際パンク・ムーヴメントと共通するものだった。そして、それゆえに音質や演奏技術の面で難アリだったりするところ…が、彼らのサウンドにポリッシュされていないRAWな感覚を与えていた。

音楽そのものにパンクの影響を示していたバンドはそんなに多くはなく、大半は旧来のハード・ロックを引きずった一種他愛のない歌詞だったり、こけおどしの(ポーズとしての)悪魔主義なんかも多かったが、音楽的にはオーソドックスなブルーズ・ロックを引きずったSAMSON(後にIRON MAIDENに参加するブルース・ディッキンソン在籍)のようなバンドでさえ、従来のブルーズ・ベースのハード・ロックとは違ったメタリックな感触を持っていたし、DEEP PURPLEの多大な影響を感じさせたWHITE SPIRIT(これまたIRON MAIDENに参加するヤニック・ガーズ在籍)も、サウンドにはガレージ的な感触を含んでいた。後に大味なポップ・メタルでスタジアム・バンドとなったDEF LEPPARDにしても、デビュー当時の音はかなりRAWだった。音楽性自体にパンク・ロックの影響がなくとも、パンク・ムーヴメントを通過した時代の空気感みたいなモノは、NWOBHMの多くのバンドに共通していたと思う。

そもそも"New Wave Of British Heavy Metal"という呼称自体、



IRON MAIDEN
The Soundhouse Tapes



DEF LEPPARD
The Def Leppard E.P.

当然ながらパンク/ニュー・ウェイヴのムーヴメントがなければ登場しなかった言葉だ。パンク/ニュー・ウェイヴによって、旧来のハード・ロックは他の様々なロックと一緒に“オールド・ウェイヴ”として扱われる憂き目を見たが、その後反動として盛り上がるNWOBHMが登場するための下地…として、オールド・ウェイヴ勢の衰退というのも時代の必然だった、というべきなのだろう(そしてNWOBHMの時代には多くのヴェテラン勢も息を吹き返すことになる)。

…話をリリースのことに戻すと、パンクのレコードを出していたマイナー・レーベルが、NWOBHMの時代にはメタル・バンドをリリースしていたというケースもけっこうある。NWOBHM以前の時代にその先鞭を付けた例を挙げるなら、何と言ってもあのスティッフ・レコーズから7inch(諸事情によりほとんど出回らず、激レア化したが)をリリースしたMOTORHEAD、ということになるだろう。MOTORHEADがメタル・バンドかというと微妙だが、彼らがNWOBHM勢に与えた影響の大きさ自体は疑う余地もないだろう。

MOTORHEADの初代ギタリスト、ラリー・ウォリス(この人のことはEL ZINE VOL.10でのUFOの記事で紹介済み)が在籍していたPINK FAIRIESも、やはりスティッフから7inchをリリースしている。このバンドもメタルとは直接関係ないが、元THE DAMNEDのアルジー・ワードがNWOBHMの時代に結成したTANKはPINK FAIRIESのカヴァーを演っていたし、IRON MAIDENのヴォーカリスト、ポール・ディアノはPINK FAIRIESのライヴ会場でスティーヴ・ハリスに出会ったとかいうので、NWOBHMの成り立ちに多少なりとも関連があると言える。

…それはさておき。その後、THE TOURISTS(EURYTHMICSの前身バンド)やミック・ファレン(元THE DEVIANTS)の2ndソロ・アルバム(ミックは60年代から活動していた人だが、このアルバムは完全にパンク/パブ・ロック)を出していたロゴ・レコーズ(純然たるパンク系のレーベルというワケではないが)は激烈メタル・ブギー軍団VARDISをリリースしていたし、DISCHARGEで知られるクレイ・レコーズは通好みな(?)シアトリカル・メタル・バンドDEMONのレコードを出し続けていた(レーベル・オーナーのマイク・ストーンはハードコア勢のリリースを続ける一方で、DEMONのマネージャーでもあった)。



FIST
Turn The Hell On



VENOM
Black Metal

70年代末〜80年代前半にかけてパンク/ニュー・ウェイヴに特化したインディ・レーベルが多数あったのと同様、NWOBHMの時代には当然メタル専門のマイナー・レーベルもあり。RAVENやFISTなど、劣悪な音質ながら粗製乱造とは言い切れないインパクトを持つアグレッシヴなバンド群のリリースを続けたニート・レコーズが世に出した最終兵器(?)が、あのVENOMだったワケで。

EL ZINE寄りの目線でNWOBHMを考えるなら、やはりVENOMの存在は大きい。MOTORHEADとパンク・ロックの影響を独自過ぎる音楽に仕立て上げた特異なバンドだった。スラッシュ・メタル、デス・メタル、ブラック・メタルといったヘヴィ・メタルのサブジャンルにVENOMが与えた影響の大きさは言うまでもないし(何しろ2ndアルバムのタイトルがそのまんま『BLACK METAL』)、VENOMの影響で音を変化させていったハードコア・バンドも少なくなかった(そのあたりはイギリスよりもむしろ日本で顕著だったと思う)。とにかくRAW過ぎる極悪サウンドに、演奏技術の拙さを顧みず崩壊しながら突進するアンサンブル。そして邪悪なたたずまい(ガチの悪魔主義なんかじゃなくて、極端に言えばKISSのようなイメージ戦略だったのだが、後のブラック・メタル勢にいいように曲解された)。

そしてTANK。THE DAMNEDの「Love Song」でベースを弾いた男が結成したバンド…というだけで、VENOMと共に元祖パンク・メタルの称号を与えていい、と思う。ただし音楽的には意外とパンク・ロック色は薄くて、特に歴代のギタリストはいずれもオーソドックスなハード・ロックの影響を感じさせる煽情的なソロを得意としていた。とはいえ1stアルバム『FILTH HOUNDS OF HADES』(1982年)での彼らはヘヴィ・メタルというよりもメタリックな突進R&Rといった感じで、当時MOTORHEADの弟分と言われたのもうなずける。



TANK
Filth Hounds Of Hades



DEMON
Night Of The Demon



GIRLSCHOOL
Demolition



ROGUE MALE
First Visit

パンク寄りということでは、GIRLSCHOOLも忘れ難い。こちらはMOTORHEADの妹分。本人たちがパンクを意識していたかどうかは知らないが、その音楽性はMOTORHEAD同様に、あるいはそれ以上にR&R色が強く、特に初期のサウンドはかなりパンキッシュだった。MOTORHEADとの合体バンド"HEADGIRL"でカヴァーしたのがJOHNNY KIDD & THE PIRATESの「Please Don't Touch」だったのも印象的。

あと、デビューが85年なのでNWOBHMというには微妙だが、SEX PISTOLSとTHE DAMNEDの影響を広言して登場したROGUE MALE（83年結成）の名前も挙げておきたい。スラッシュ・メタル/スピード・メタルが確立する少し前に現れた彼らの音は、スラッシュ特有の刻みを用いずに野蛮な疾走感を生みだしていた。

GIRLSCHOOLを含むNWOBHMのバンド群の一部に目立った特徴として、グラム・ロックからの影響というのも無視出来ない。本誌前号で書いたとおり、グラム・ロックがパンクに与えた影響はかなりの大きさだったが、パンク・ムーヴメント以降の新世代ヘヴィ・メタルの幾つかにとっても、グラム・ロックは大きな影響源だった。

VARDISはT.REXのカヴァーを演っているし、RAVENはTHE SWEETをカヴァーしている。北アイルランドのMAMA'S BOYSはSLADEのカヴァーを演っていた。GIRLSCHOOLに至ってはT.REXもTHE SWEETもゲイリー・グリッターもカヴァーしている。

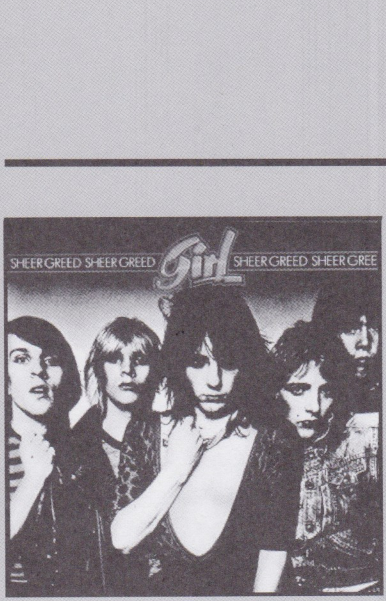
DEF LEPPARDやGIRLなんかも明らかにグラム・ロック/モダン・ポップ勢の影響下にある音楽性だった。DEF LEPPARDの連中は、後にデイヴィッド・ボウイのバンド・THE SPIDERS FROM MARSのメンバーとコラボレートしたりもしている。GIRLは更に異質で、KISSのカヴァーを演る一方でJAPANあたりの影響も感じさせるバンドだった。GIRLのシンガーだったフィリップ・ルイス（後に渡米してL.A.GUNSを結成）と組むことになるバーニー・トーメは元DEEP PURPLEのイアン・ギランのバンド・GILLANのギタリストだったが、元々はパンク・シーンから出てきた人で、自身のバンドやソロではジョニー・サンダースあたりの影響を感じさせるパンキッシュなR&Rを演っていた。

SLADEやTHE SWEETをはじめとするグラム・ロックの幾つかのバンドはハード・ロックでもあった…というのは前号の記事でも書いたとおりだが、パンク・ロックを演っていた連中とほぼ同世代だったNWOBHMのバンド群が、パンクスと同様にグラム・ロックを聴いて影響を受けていたというのは、自然なことだ。基本的には70年代のハード・ロックを受け継いでいたバンドの多いNWOBHM勢だったが、やはり世代の違いというのはその音楽に如実に表れていた。

そして、数年の間に騒々しく盛り上がって終息してしまった…というのも、パンクとNWOBHMに共通した特徴だった（まあパンクやNWOBHMに限ったことではないが）。NWOBHMに刺激されるようにして、あるいは同時多発的に、日本からはLOUDNESSやHEAVY METAL ARMYが（アンダーグラウンドではOUTRAGEやZADKIELが）、フランスからはTRUSTが、ドイツからはACCEPTが、デンマークからはMERCYFUL FATEが、スイスからはHELLHAMMERが、そしてベルギーからはACIDやKILLERが登場し、アメリカではいわゆるLAメタル勢が現れたが、LAメタルのムーヴメントが本格化した1983～84年頃には、NWOBHMはほとんど終わりかけていた。あとにはIRON MAIDENやDEF LEPPARDなど、メジャーな存在となった一部のバンドが残った。

一方、NWOBHMと入れ替わるようにして、DIAMOND HEADをはじめとするNWOBHM勢の多大な影響を受けた若いバンドがアメリカから登場し、スラッシュ・メタルの代表格となったばかりか、その後のエクストリーム・ミュージック全般に絶大な影響を与えるバンドへと成長していくことになる。もちろんMETALLICAのことだ。そしてその頃にはDISCHARGEやENGLISH DOGSやCOCKNEY REJECTSといった連中が大胆にメタル化していった…。

花火のように打ち上がって消えた感のあるNWOBHMだったし、ブーム終息直後の80年代後半には中古レコード屋のメタルのエサ箱にはそのへんのレコードが捨て値で転がっていたものだが、パンクにも通じる粗野なサウンドは、今聴いても十分に楽しめる。とりあえずニート・レコーズ勢（MOTORHEADのフィル・キャンベルが在籍していたPERSIAN RISKもニートからリリースしていた）なんかはEL ZINE読者様にもお勧めです。

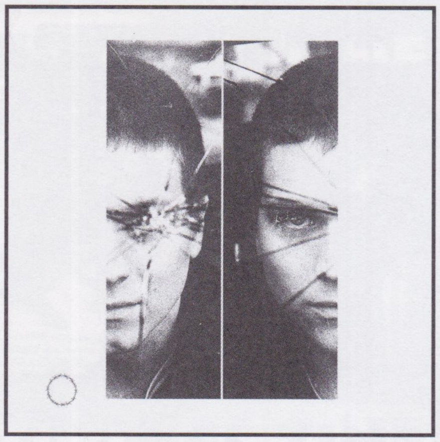


GIRL
Sheer Greed

ES GIBT KEIN WERT

DISC REVIEW

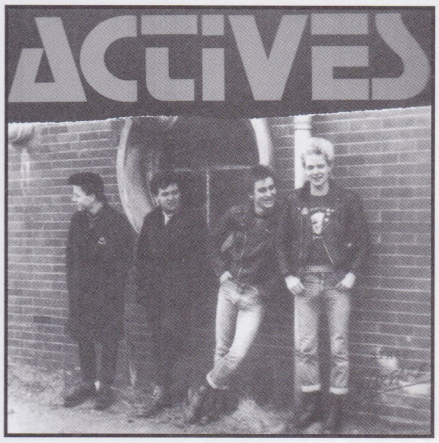
この間ディスクユニオンに行ったらエルビス・プレスリーのLPが飾られてて、そのデザイン・配色がまさにCLASHの『LONDON CALLING』そのものだったんですけど、これってロックやパンクを聴いている人なら当たり前の周知の事実なんでしょうか？
僕は全く知らなかったので、"CLASHはエルビスからパクったのか!"って("My Way"がシドのオリジナルじゃないことを知った15の春くらいに)驚いたのですが、いつまでもそんなドーデモイイことで驚ける無邪気さを大切にしていきたいなと思います(?)。
というわけで、ここ2、3年のうちにリリースされた作品のレヴューです。
とにもかくにもやっぱりHURULAが最高で、友人とも「スゲーいいよな!」なんて言い合ったのですが、そのあとに決まって、「でもパンクじゃないんだよね」という何とも言えないオチが…。それでもインタヴューしてみたいものですが、スウェーデンではメジャーからのリリースだし(レヴューしているのはドイツ盤)、もうパンクのファンジンじゃ相手にしてくれないだろうなぁ…と思うとなかなかどうして切ないのです。



HURULA
VI AR MANNISKORNA VARA FORALDRAR VARNADE OSS FOR

ex　MASSHYSTERIのRobertによるソロ・プロジェクト:HURULAの1st LP。ズバリ"MASS HYSTERIからパンクとサーフを引いて、カレッジ・ロック風味にしました"。"脱パンク→大衆音楽へ"のパターンは世にも醜悪な作品を産み落としがちですが、彼はやはりセンスの塊だったようで、もうコレ、パンク云々では全くないのですが最高です。そして、RobertこそがMASS HYSTERIだったのだ、と再認識させられました。と、同時に、"Robertは最早パンクに興味なし!"という事実も突きつけられ、一抹の寂しさを感じずにはいられない作品でもあるのです。

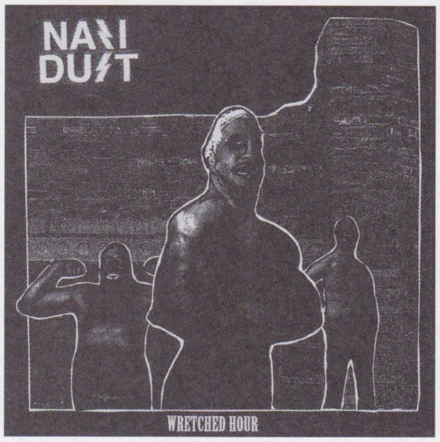
(NO GOOD NO 001)LP



ACTIVES
STREET WARFARE

F.F.T.LABEL復活の狼煙としてリリースされた80'sスコティッシュ・パンク・バンドの音源集。彼らが遺した全てのヴィニール音源を収録したディスク1と、デモとライヴ音源を収録したディスク2からなる2枚組。とにかく初っ端の"RIOT"を聴いて高揚しない人はいないでしょう!血と肉が沸き立つ原初のアタック・パンクにアドレナリンが溢れ出す!メンバーによるリマスタリングを施された音質も言うことなし。歌詞の対訳とバンドの解説などが掲載されたブックレットもついており、凝ったアートワーク含め、作り手の丁寧な仕事ぶりと深い愛情が伝わってくる。

(F.F.T. LABEL FFT-RE001)2CD



NAZI DUST
WRETCHED HOUR

ナチゴミという、クールなのかダサいのかよく分からないけどインパクトだけは大な名前にヤラれて購入しました。"バンド名買い"というヤツです。YOUTH ATTACKから1st 7"をリリースしているので、「発狂ブチ切れ系かな？」とワクワクして針を落としてみたところ…、モロにSSDな80'sボストン・スタイル!音もビシッと引き締まってて完成度も高いのですが、僕はもっと頭のネジが吹き飛んでイカれまくった音を期待していたので、ちょっとションボリ。そんなフロリダ州タンパ拠点のハードコア・バンドの10曲入り片面12"でございました。

(VINYL RITES 29)12"



CARCINOGENZ
ST

アメリカはカリフォルニア州ベーカーズフィールドのトリオが放った1stシングルは、ジャキジャキのギターが鼓膜を切り裂く純度100パーセントのロウ・パンク・ロック10発入り。"Killer"という言葉をそのまま体現するかのヤサグレ&ササクレっぷりで、全曲一分以下で仕留めにくる。重箱の隅をつつくパンク・オタク臭はゼロ、今を生きる下卑た息遣いとウルセー雑音に充ちた素敵な青色円盤です。アートワークのセンスも尖っているし、曲名も"Trendy Fucker"とかイチイチ格好良いのであります。

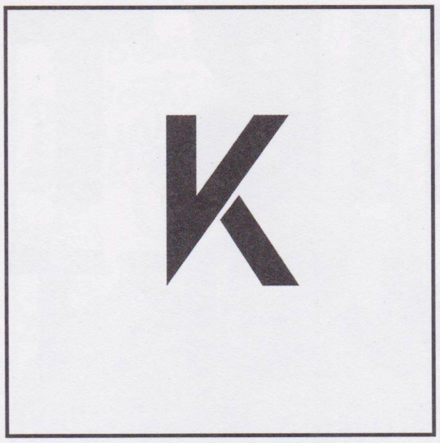
(GOING UNDERGROUND RECORDS 24)7"



PRIMITIVE RITES
ST

SISTA SEKUNDEN、KAMIKATZE、FY FAN、AUKTIONなどのメンバーからなるスウェーデンはMalmöのバンドのデビュー・アルバム。ツイン・ギターならではの厚みのある音作り&泣きのフレーズも飛び出して、キャリア豊富な面々が集まっているだけにツボは的確に押さえたスラッシュ・ハードコア。ただスマート過ぎてフックに欠けるような印象も…。聴いているときには良いんだけど、聴き終わると"どんな音だったっけ?"となる、ソツのなさ。もっと冒険してもいいんじゃないのでしょうか。今年の9月にはシングルを出しているので、そちらに期待。

(IN STI GATE 32/PUNKS ONLY 005/JAGUAR TRUST RECORDS 5)LP



VOIGHT KAMPFF
ST

2000年代以降のパンク・ロック・バンドと一口に言っても多種多様ですが、例えばTHE VICIOUS、そしてAUTISTIC YOUTHやESTRANGED辺りが好きな人はドンピシャでしょう!アメリカのバンドらしからぬ翳りと憂いを帯びたダーク・パンク・ナンバーが基調ですが、そこから更に一歩踏み込んだ(沈み込んだ)、湿った地下室で独り体育座りしているような気の滅入るナンバーまで、どこをとっても灰色がかった音像にヤラれます。メンバーはハードコアあがりのようですが、まるで想像がつきません。狙い澄ましたかの味のある音質も含めて最高です!

(ROCK BOTTOM 016/DERANGED 235)LP



SPLIT
ENSLAVE+PAZAHORA

空虚な絵空事ではない等身大の真摯な日本語詞が印象的なENSLAVEは、男女ツイン・ヴォーカルで劇的な曲展開を激情でもって駆け抜ける。基軸は所謂HHIG〜TRAGEDY以降の叙情的なクラスト・サウンドだが、現代の日本に漂う閉塞感を打破せんとする真っ直ぐなエナジーに充ち満ちている。対するPAZAHORAは、スタイル的にはENSLAVEと共鳴するところもあるが、もっと直情的な怒りと慟哭にまみれたダークネス・サウンドで抉ってくる。PAZAHORAの来日ツアーでの共演が縁となって実現した強力なスプリットCD。

(MCR COMPANY 273)CD



BROKEN BRAINS
ST

前号でインタヴューしたTHISCLOSE周辺(というか同じメンバー?)による、日本のメタル・コアを意識したようなプロジェクト・バンドの7"EP。曲名や歌詞、そして実に嘘くさいバンド・ヒストリーまでも(微妙に間違った)日本語で書かれています。5年後くらいには、「あのバンドなんだっけ?DISCLOSEみたいなバンド名でさ、BROKEN BONESみたいなのもやってて…駄目だ、思い出せない!」てな感じになっているのかもしれませんが、それもまた愛すべき"バンドの在り方"の一つだと思います。しかめっ面しているよりも、楽しんだほうが勝ちという訳です!

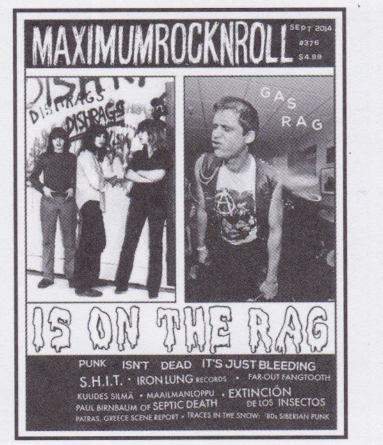
(NO LABEL NO NUMBER)7"



FOREIGN OBJECTS
NO SENSATION

同名のメタル・バンドがいましたが、こちらはボストンのバンドのファースト・アルバム。現代に蘇ったX!…とは言い過ぎですが、DANGERHOUSE〜POSH BOY周辺を想起させるヒリヒリとしたパンク・ロック/ポスト・パンク・サウンド。ヴォーカル含めフロントに立つ3人が女性でして、ドラムを担当しているのがLIBYANSのDan(唯一の男性)。その点も功を奏してか、自由奔放に飛び跳ねる女性陣の各パートを、彼の引き締まったタイトなドラムで一つにまとめあげているような感じもします。フリーキーなラスト・ナンバー含めクールな全8曲!

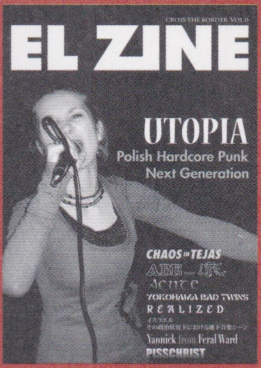
(VINYL RITES 27)LP



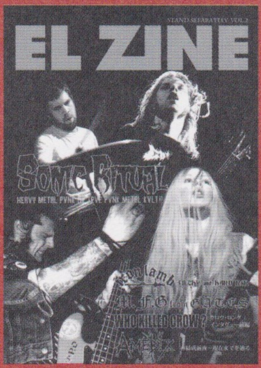
MAXIMUM ROCKNROLL
#376

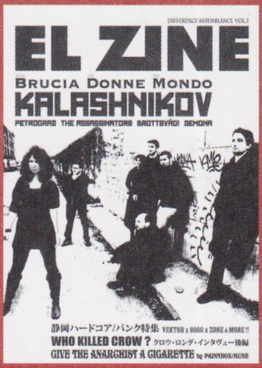
アメリカの老舗パンク・ファンジンの2014年9月号。いや、何がすごいって、表紙がDISHRAGSとGAS RAG、2つ並べて"どっちにもRAGがついているよね"って、…その発想はなかった。しかし、シベリア・パンク・シーンの映画とか、ギリシャの都市:パトラのシーン・レポートとか、トロントのS.H.I.T.ってバンドが格好良さそうだな〜とか、本当、未知に充ちてて面白い。昔と比べればそりゃ薄くなってはいるけれど、それでもこの情報量は圧巻。同じ音楽、同じ人、同じ場所しか見ないなんて勿体ない、パンクだけに限っても、世界はまだまだ広いし刺激的だ。

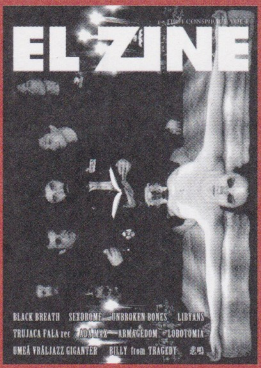
(MAXIMUM ROCKNROLL)ZINE



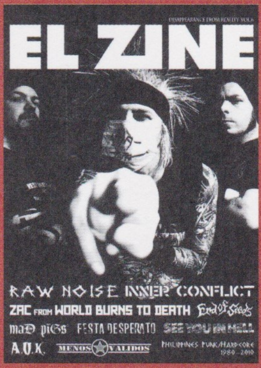


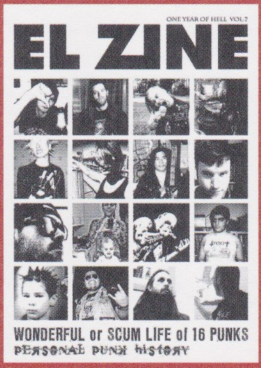


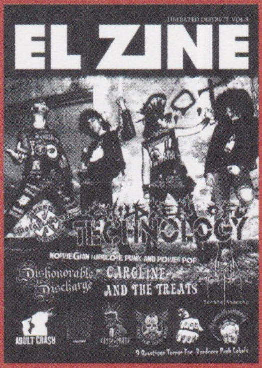


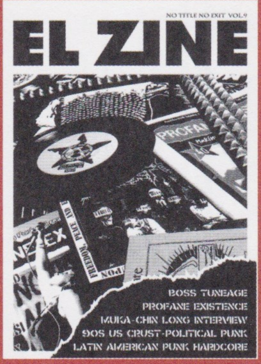




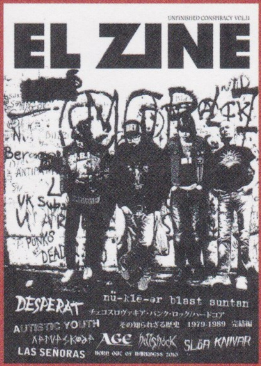


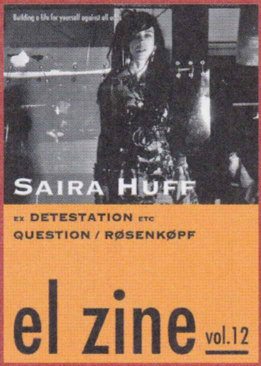


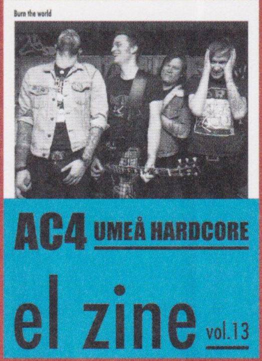
















SICK MUSIC FOR SICK PEOPLE!
PUNK IS THE ONLY ALTERNATIVE
THAT CAN KEEP OURSELF SANE IN THIS FUCKING CRAZY WORLD!

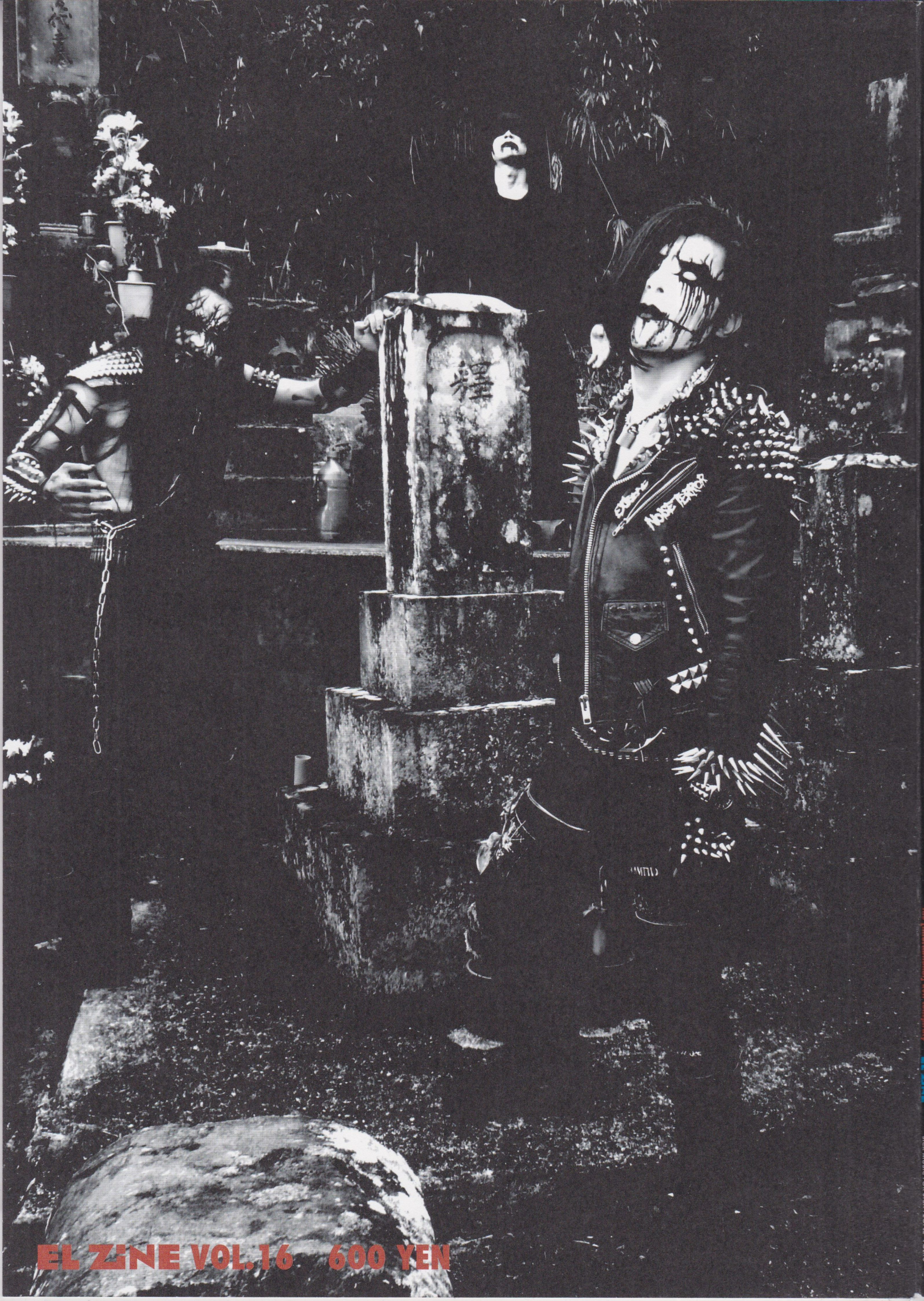
editor's notes

vol.16にして、ついに表紙がカラーに!そしてデカイ(従来比)!前号が小さくて黒かったのでその反動かというとそんなことはなく、長年お願いしていた印刷所が倒産してしまったので(不景気!)、心機一転ヤケクソな気分で作ってみました。
しかし今号、表紙がTOMとかのツンツン&カラフルな感じで、裏表紙はKNAVEで暗黒&お墓。でもどちらもパンク。この対比というか、「違っていること」が今更ながら面白いなーと思います。「パンクだから」と足並み揃えて、みんな仲良くみんな一緒に〜なんて同調圧力クソ喰らえ!…というわけで(?)、今号を手にとって頂きありがとうございました!まだ11月だけど、みなさま良いお年を。また来年!STAY SICK!

※インタヴュアー及び執筆者名の記載のない原稿は全て山路健二が記した

EL ZINE vol.16　2014年11月20日発行　E-MAIL　unno13@gmail.com

※バック・ナンバーはパンク/ハードコア取扱店　又はhttp://www.juzasha.comにてお求めになれます



EL ZINE VOL.16 600 YEN

The [International] Evil Conspiracy EL ZINE SICK MUSIC FOR SICK PEOPLE VOL.16



EL Z

GENERACION S

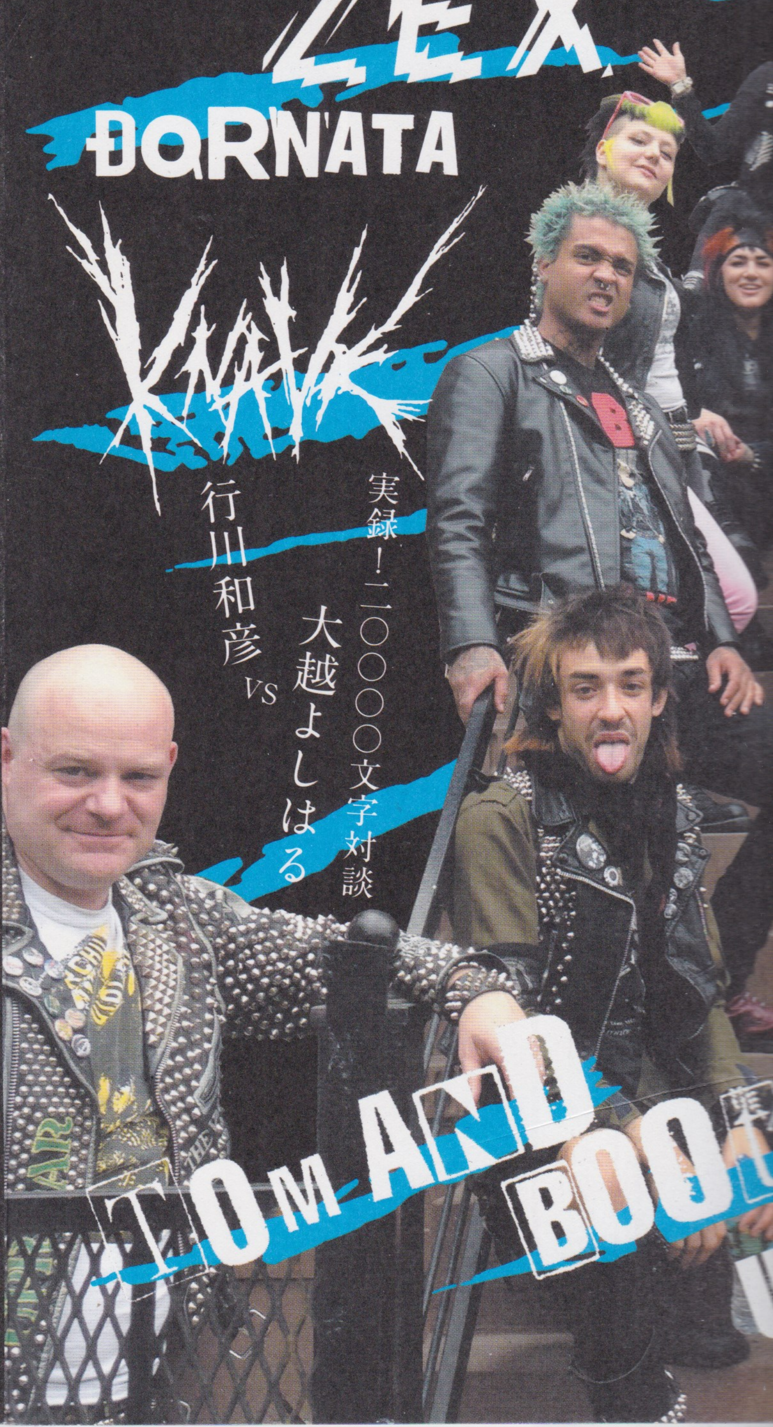
BEER BEL

ZEX

DORNATA

実録！二〇〇〇〇文字対談

大越よしはる vs 行川和彦



TOM AND BOO

the [international] kvlt conspiracy EL ZINE SICK MUSIC FOR SICK PEOPLE VOL.16